

新釈諸国噺

太宰治

青空文庫

凡例

一、わたくしのさいかく、とでも振仮名を附けたい気持で、新釈諸国噺しよこくばなしという題にしたのであるが、これは西鶴さいかくの現代訳というようなものでは決してない。古典の現代訳なんて、およそ、意味の無いものである。作家の為すべき業わざではない。三年ほど前に、私は聊齋志異りようさいいの中の一つの物語を骨子こっしとして、大いに私の勝手な空想を按配あんぱいし、「清貧譚せいひんたん」という短篇小説たんべんに仕上げて、この「新潮」の新年号に載せさせてもらった事があ
るけれども、だいたいあのような流儀で、いささか読者に珍味異香を進上しようと努めてみるつもりなのである。西鶴は、世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。私のこのような仕事に依よつて、西鶴のその偉さが、さらに深く皆に信用されるようになったら、私のまずしい仕事も無意義ではないと思われる。私は西鶴の全著作の中から、私の氣にいりの小品を二十篇ほど選んで、それにまつわる私の空想を自由に書き綴つづり、「新釈諸国噺」という題で一本にまとめて上梓じょうししようとして計画しているのだが、まず手はじめに、武家義理物語の中の「我が物ゆゑに裸川」の題材を拝借して、私

の小説を書き綴つてみたい。原文は、四百字詰の原稿用紙で二、三枚くらいの小品であるが、私が書くとその十倍の二、三十枚になるのである。私はこの武家義理、それから、永え代蔵いたぐら、諸国噺むねさんよう、胸算用むねさんようなどが好きである。所謂いわゆる、好色物は、好きでない。そんなにいいものだとも思えない。着想が陳腐ちんぷだとさえ思われる。

一、右の文章は、ことしの「新潮」正月号に「裸川」を發表した時、はしがきとして用いたものである。その後、私は少しずつこの仕事をすすめて、はじめは二十篇くらいの予定であったが、十二篇書いたら、へたばった。読みかえしてみると、実に不満で、顔から火の発する思いであるが、でも、この辺が私の現在の能力の限度かも知れぬ。短篇十二は、長篇一つよりも、はるかに骨が折れる。

一、目次をごろんになれば、だいたいわかるようにして置いたが、題材を西鶴の全著作からかなりひろく求めた。変化の多い方が更に面白おもしろいだろうと思つたからである。物語の舞台も蝦夷えぞ、奥州おうしゅう、関東、関西、中国、四国、九州と諸地方にわたるよう工夫した。

一、けれども私は所詮^{しよせん}、東北生れの作家である。西鶴ではなくて、東鶴^{ほつき}北亀のおもむきのあるのは、まぬかれぬ。しかもこの東鶴あるいは北亀は、西鶴にくらべて甚だ^{はなは}青臭い。年齢というものは、どうにも仕様の無いものらしい。

一、この仕事も、書きはじめてからもう、ほとんど一箇年になる。その期間、日本に於^おいては、実にいろいろな事があつた。私の一身上に於いても、いついかなる事が起るか予測出来ない。この際、読者に日本の作家精神の伝統とでもいうべきものを、はつきり知つていただく事は、かなり重要な事のように思われて、私はこれを警戒警戒の日にも書きつづけた。出来栄^{できばえ}はもとより大いに不満であるが、この仕事を、昭和聖代の日本の作家に与えられた義務と信じ、むきになつて書いた、とは言える。

昭和十九年晩秋、三鷹^{みたか}の草屋に於て

目次

貧の意地	(江戸)	諸国はなし、西鶴四十四歳刊行
大力	(讃岐)	ほんちようにじゆうふこう 本朝二十不孝、四十五歳
猿塚	(筑前)	ふところすずり 懐 硯、四十六歳
人魚の海	(蝦夷)	武道伝来記、四十六歳
破産	(美作)	につほんえいたいぐら 日本永代蔵、四十七歳
裸川	(相模)	武家義理物語、四十七歳
義理	(摂津)	武家義理物語、四十七歳
女賊	(陸前)	しんかしようき 新可笑記、四十七歳
赤い太鼓	(京)	おういんひじ 本朝桜陰比事、四十八歳
粹人	(浪花)	せけんむねさんよう 世間胸算用、五十一歳
遊興戒	(江戸)	西鶴置土産、五十二歳 (歿)
吉野山	(大和)	よろず ふみほうぐ 万の文反古、歿後三年刊行

貧の意地

むかし江戸品川、藤茶屋のあたり、見るかげも無き草の庵に、原田内助というおそろしく鬚の濃い、眼の血走った中年の大男が住んでいた。容貌おそろしげなる人は、その自身の顔の威厳にみずから恐縮して、かえつて、へんに弱気になっているものであるが、この原田内助も、眉は太く眼はぎよろりとして、ただものでないような立派な顔をしていながら、いっこうに駄目な男で、剣術の折には眼を固くつぶつて奇妙な声を挙げながらあらぬ方に向つて突進し、壁につきあたつて、まいった、と言ひ、いたずらに壁破りの異名を高め、蜆売りのずるい少年から、嘘の身上噺を聞いて、おいおい声を放つて泣き、蜆を全部買いしめて、家へ持つて歸つて女房に叱られ、三日のあいだ朝昼晩、蜆ばかり食べさせられて胃痙攣を起して転転し、論語をひらいて、学而第一、と読むと必ず睡魔に襲われるところとなり、毛虫がきらいで、それを見ると、きやつと悲鳴を挙げて両手の指をひらいてのけぞり、人のおだてに乗つて、狐にでも憑かれたみたいにおろおろして質屋へ走つて行つて金を作つてごちそうし、みそかには朝から酒を飲んで切腹の真似な

どして掛取りかけとをしりぞけ、草の庵も風流の心からではなく、ただおのずから、そのように落ちぶれたというだけの事で、花も実も無い愚図の貧、親戚しんせきの持てあまし者の浪人であつた。さいわい、親戚に富裕の者が二、三あつたので、せつばつまるとそのひとたちから合力ごうりきを得て、その大半は酒にして、春の桜も秋の紅葉も何が何やら、見えぬ聞えぬ無我夢中の極貧の火の車のその日暮しを続けていた。春の桜や秋の紅葉には面おもてをそむけて生きても行かれるだろうが、年にいちどの大みそかを知らぬ振りして過す事だけはむずかしい。いよいよこしも大みそかが近づくとつれて原田内助、眼つきをかえて、氣違いの真似なとして、用も無い長刀をいじくり、えへへ、と怪しく笑つて掛取りを氣味悪がせ、あさつては正月というに天井の煤すすも払わず、鬚もそらず、煎餅蒲団せんべいぶとんは敷きつ放し、来るなら来い、などあわれな言葉を譎語うわごとの如く力無く眩つぶやき、またしても、えへへ、と笑うのである。まいどの事ながら、女房はうつつの地獄の思いに堪たえかね、勝手口から走り出て、自身の兄なからいの半井清庵せいあんという神田明神かんだみょうじんの横町に住む医師の宅に駈かけ込み、涙ながらに窮状を訴え、助力を乞こうた。清庵も、たびたびの迷惑、つくづく呆あきれながらも、こいつ洒落しゃれた男で、「親戚にひとりくらい、そのような馬鹿ばかがいるのも、浮世の味。」と笑つて言つて、小判十枚を紙に包み、その上書うわがきに「貧病の妙薬、金用丸きんようがん、よるずによし。」と記して、

不幸の妹に手渡した。

女房からその貧病の妙薬を示されて、原田内助、よろこぶかと思いのほか、むずかしき顔をして、「この金は使われぬぞ。」とかすれた声で、へんな事を言い出した。女房は、こりや亭主ていしゅもいよいよ本当に気が狂ったかと、ぎよつとした。狂ったのではない。駄目な男というものは、幸福を受取るに当ってさえ、下手くそを極めるものである。突然の幸福のお見舞いにへどもどして、てれてしまつて、かえつて奇妙な屁理窟へりくつを並べて怒つたりして、折角の幸福を追い払つたり何かするものである。

「このまま使つては、果報負けがして、わしは死ぬかも知れない。」と、内助は、もつともらしい顔で言い、「お前は、わしを殺すつもりか？」と、血走つた眼で女房を睨にらみ、それから、にやりと笑つて、「まさか、そのような夜叉やしやでもあるまい。飲む。飲む。飲まなければ死ぬであろう。おお、雪が降つて来た。久し振りで風流の友と語りたい。お前はこれから一走りして、近所の友人たちを呼んで来るがいい。山崎、熊井くまい、宇津木、大竹、磯いそ、月村、この六人を呼んで来い。いや、短慶坊主ぼんずも加えて、七人。大急ぎで呼んで来い。帰りは酒屋に寄つて、さかなは、まあ、有合せでよからう。」なんの事は無い。うれしきで、わくわくして、酒を飲みたくなつただけの事なのであつた。

山崎、熊井、宇津木、大竹、磯、月村、短慶、いずれも、このあたりの長屋に住んでその日暮しの貧病に悩む浪人である。原田から雪見酒の使いを受けて、今宵^{こよい}だけでも大みそかの火宅^{かたく}からのがれる事が出来ると地獄で仏の思い、紙衣^{かみこ}の皺^{しわ}をのばして、傘^{かさ}は無いか、足袋は無いか、押入れに首をつつ込んで、がらくたを引出し、浴衣^{ゆかた}に陣羽織という姿の者もあり、単衣^{ひとえ}を五枚重ねて着て頸^{くび}に古綿を巻きつけた風邪気味と称する者もあり、女房のこそで小袖^{こそで}を裏返しに着て袖の形をごまかそうと腕^{うで}まくりの姿の者もあり、半襦^{はんじゆばん}絆^{うまのり}に馬^ば乗^り袴^ま、それに縫紋の夏羽織という姿もあり、裾^{すそ}から綿のはみ出たどてらを尻端^{しりばし}折^{しり}して毛^け孺丸^{ずね}出しという姿もあり、ひとりとしてまともな服装の者は無かったが、流石^{さすが}に武士の附^つき合いは格別、原田の家に集つて、互いの服装に就いて笑つたりなんかする者は無く、いかめしく挨拶^{あいさつ}を交し、座が定つてから、浴衣に陣羽織の山崎老がやおら進み出て主人の原田に、今宵の客を代表して鷹揚^{おうよう}に謝辞を述べ、原田も紙衣の破れた袖口を気にしながら、

「これは御一同、ようこそ。大みそかをよそにして雪見酒も一興かと存じ、ごぶさたのお詫^わびも兼ね、今夕お招き致しましたところ、さつそくおいで下さつて、うれしく思います。どうか、ごゆるり。」と言つて、まずしいながら酒肴^{しゆく肴}を供した。

客の中には盃さかずきを手にして、わなわな震える者が出て来た。いかがなされた、と聞かれて、その者は涙なみだを拭ぬぐき、

「いや、おかまい下さるな。それがしは、貧のため、久しく酒に遠ざかり、お恥ずかしいが酒の飲み方を忘れ申した。」と言つて、淋さびしそうに笑つた。

「御同様、」と半襦袢に馬乗袴は膝ひざをすすめ、「それがしも、ただいま、二、三杯つづけさまに飲み、まことに変な気持で、このさきどうすればよいのか、酒の酔い方を忘れてしまいました。」

みな似たような思いと見えて、一座しんみりして、遠慮しながら互いに小声で盃のやりとりをしていたが、そのうちに皆、酒の酔い方を思い出して来たと見えて、笑声も起り、次第に座敷が陽気になつて来た頃ころ、主人の原田はれいの小判十両の紙包を取出し、

「きようは御一同に御披露ひろうしたい珍物がございます。あなたがたは、御懐中の御都合のわるい時には、いさぎよくお酒を遠ざけ、つつましくお暮しなさるから、大みそかでお困りにはなつても、この原田ほどはお苦しみなさるまいが、わしはどうも、金に困るとなおさら酒を飲みたいたちで、そのために不義理の借金が山積して年の瀬を迎えるたびに、さながら八大地獄を眼前に見るような心地が致す。ついには武士の意地も何も捨て、親戚に泣

いて助けを求めるなどという不面目の振舞いに及び、ことしもとうとう、身寄りの者から、このとおり小判十両の合力を受け、どうやら人並の正月を迎える事が出来るようになりましたが、この仕合せをわしひとりで受けると果報負けがして死ぬかも知れませんので、きようは御一同をお招きして、大いに飲んでいただくこうと思ひ立つた次第であります。」と
 上機嫌じようきげんで言えば、一座の者は思ひ思ひの溜息ためいきをつき、

「なあんだ、はじめからそうとわかつて居れば、遠慮なんかしなかつたのに。あとで会費をとられるんじゃないか、と心配しながら飲んで損をした。」と言う者もあり、

「そう承れば、このお酒をうんと飲み、その仕合せにあやかりたい。家へ帰ると、思わぬところから書留が来ているかも知れない。」と言う者もあり、

「よい親戚のある人は仕合せだ。それがしの親戚などは、あべこべにそれがしの懐ふところをねらっているのだから、つまらない。」と言う者もあり、一座はいよいよ明るくにぎやかになり、原田は大恐悦で、鬚の端の酒しずくの雫ぬぐを押し拭ぬぐい、

「しかし、しばらく振りで小判十両、てのひらに載せてみると、これでなかなか重いものでございます。いかがです、順々にこれを、てのひらに載せてやって下さいませんか。お金と思えばいやしいが、これは、お金ではございません。これ、この包紙にちゃんと書いて

てあります。貧病の妙薬、金用丸、よろずによし、と書いてございます。その親戚の奴が、しやれてこう書いて寄こしたのですが、さあ、どうぞ、お廻しまわになつて御覧になつて下さい。」と、小判十枚ならびに包紙を客に押しつけ、客はいちいちその小判の重さに驚き、また書附けの軽妙に感服して、順々に手渡し、一句浮びましたという者もあり、筆硯ひつけんを借りてその包紙の余白に、貧病の薬いただく雪あかり、と書きつけて興を添え、酒盃しゅはいの献酬もさかんになり、小判は一まわりして主人の膝許ひざもとにかえつた頃に、年長者の山崎は坐り直し、

「や、おかげさまにてよい年忘れ、思わず長座を致しました。」と分別顔してお礼を言い、それでは、と古綿を頸に巻きつけた風邪気味が、胸を、そらして千秋楽をうたい出し、主客共に膝を軽くたいて手拍子をととり、うたい終つて、立つ鳥あとを濁さず、昔も今も武士のたしなみ、爛鍋かんなべ、重箱しおからつぼ、塩辛壺しおからつぼなど、それぞれ自分の周囲の器を勝手口に持ち出して女房に手渡し、れいの小判が主人の膝もとに散らばつて在るのを、それも仕舞いなされ、と客にすすめられて、原田は無雑作に掻き集めて、はつと顔色をかえた。一枚足りないのである。けれども原田は、酒こそ飲むが、気の弱い男である。おそろしい顔つきにも似ず、人の気持ばかり、おつかなびつくり、いたわっている男だ。どきりとしたが、素知

らぬ振りを装い、仕舞い込もうとすると、一座の長老の山崎は、

「ちよつと、」と手を挙げて、「小判が一枚足りませんな。」と軽く言った。

「ああ、いや、これは、」と原田は、わが悪事を見破られた者の如く、ひどくまごつき、

「これは、それ、御一同のお見えになる前に、わしが酒屋へ一両支払い、さきほどわしが持ち出した時には九両、何も不審はございません。」と言ったが、山崎は首を振り、

「いやいや、そうでない。」と老いの頑固がんこ、「それがしが、さきほど手のひらに載せたの

は、たしかに十枚の小判。行燈あんどんのひかり薄しといえども、この山崎の眼光には狂いはな

い。」ときつぱり言い放てば、他の六人の客も口々に、たしかに十枚あった筈はずと言う。皆

々総立ちになり、行燈を持ち廻つて部屋の隅々すみずみまで捜したが、小判はどこにも落ちていない。

「この上は、それがし、まっぱだかになつて身の潔白を立て申す。」と山崎は老いの一轍いつて、貧の意地、瘦やせても枯れても武士のはしくれ、あらぬ疑いをこうむるは末代までの恥辱とばかりに憤然、陣羽織を脱いで打ちふるい、さらによれよれの浴衣を脱いで、ふんどし一つになつて、投網とあみでも打つような形で大袈裟おおげさに浴衣をふるい、

「おのおのがた、見とどけたか。」と顔を蒼あおくして言った。他の客も、そのままではすま

されなくなり、次に大竹が立つて縫紋の夏羽織をふるい、半襦袢を振って、それから馬乗袴を脱いで、ふんどしをしていない事を暴露し、けれどもこりともせず、袴をさかさにしてふるって、部屋ふんいきの雰囲気が次第に殺氣立つて物ものすべ凄くなつて来た。次にどてらを尻端折して毛臙丸出しの短慶坊が、立ち上りかけて、急に劇烈の腹痛にでも襲われたかのようけわに峻しく顔をしかめて、ううむと一声呻き、

「時も時、つまらぬ俳句を作り申した。貧病の薬いたたく雪あかり。おのおのがた、それがしの懐に小判一両たしかにあります。いまさら、着物を脱いで打ち振うまでもござらぬ。思いも寄らぬ災難。言い開きも、めめしい。ここで命を。」と言いも終らず、両肌もろはだ脱いで脇差わきざしに手を掛ければ、主人はじめ皆々駈け寄つて、その手を抑え、

「誰だれもそなたを疑つてはいない。そなたばかりでなく、自分らも皆、その日暮しのあさましい貧者ながら、時に依よつて懷中に、一両くらいの金子きんすは持っている事もあるさ。貧者は貧者同志、死んで身の潔白を示そうというそなたの氣持はわかるが、しかし、誰ひとりそなたを疑う人も無いのに、切腹などは馬鹿らしいではないか。」と口々になだめると、短慶いよいよわが身の不運がうらめしく、なげきはつのもり、齒はぎしりして、

「お言葉は有あり難がたいが、そのお情なさけも冥途めいどへの土産。一両詮議せんぎの大事の時、生憎あいにくと一両ふ

ところに持つているといふこの間の悪さ。御一同が疑わずとも、このぶざまは消えませぬ。世の物笑い、一期いちごの不覚。面目なくて生きて居られぬ。いかにも、この懐中の一両は、それがし昨日、かねて所持せし徳とく乗じょうの小柄こづかを、坂下の唐物屋とうぶつや十左衛門方じゆうざえもんへ一両二分にて売つて得た金子には相違なけれども、いまさらかかる愚痴めいた申開きも武士の恥辱。何も申さぬ。死なせ給え。不運の友を、いささか不憫ふびんと思おぼしめ召さば、わが自害の後に、坂下の唐物屋へ行き、その事たしかめ、かばねの恥を、たのむ！」と強く言い放ち、またも脇差し取直してあがいた途端、

「おや？」と主人の原田は叫び、「そこにあるよ。」

見ると、行燈の下にきらりと小判一枚。

「なんだ、そんなところにあつたのか。」

「燈台もと暗しですね。」

「うせ物は、とかく、へんてつもないところから出る。それにつけても、平常の心掛けが大切。」これは山崎。

「いや、まったく人騒がせの小判だ。おかげで酔いがさめました。飲み直しましょう。」
とこれは主人の原田。

口々に言つて花やかに笑い崩れた時、勝手元に、

「あれ！」と女房の驚く声。すぐに、ばたばたと女房、座敷に走つて来て、「小判はここに。」と言ひ、重箱の蓋ふたを差し出した。そこにも、きらりと小判一枚。これはと一両顔を見合せ、女房は上気した顔のおくれ毛を掻きあげて間がわるそうに笑い、さいぜん私は重箱に山の芋の煮しめをつめて差し上げ、蓋は主人が無作法にも畳にべたりと置いたので、私が取つて重箱の下に敷きましたが、あの折、蓋の裏の湯気に小判がくつついていたのでございましょう、それを知らずに私の不調法、そのままお下さげ渡わたしになつたのを、ただいま洗おうとしたら、まあどうでしょう、ちやりんと小判が、と息せき切つて語るのだが、主客ともに、げげんの面持ちおもで、やつぱり、ただ顔を見合せているばかりである。これでは、小判が十一両。

「いや、これも、あやかりもの。」と一座の長老の山崎は、しばらく経たつて溜息と共に、ちつとも要領の得ない意見を吐いた。「めでたい。十両の小判が時に依つて十一両にならぬものでもない。よくある事だ。まずは、お収め。」すこし毫もうろく碌ろくしているらしい。

他の客も、山崎の意見の滅茶苦茶めっちゃなのに呆あきれながら、しかし、いまの場合、原田にお収めを願うのは最も無難と思つたので、

「それがよい。ご親戚のお方は、はじめから十一両つつんで寄こしたのに違いない。」

「左様、なにせ洒落たお方のようだから、十両と見せかけ、その実は十一両といういたずらをなさったのでしよう。」

「なるほど、それも珍趣向。粹いきな思いつきです。とにかく、お収めを。」

てんでにいい加減な事を言つて、無理矢理原田に押しつけようとしたが、この時、弱気で酒くらの、駄目な男の原田内助、おそらくは生しょうがい涯がいに一度の異様な頑張り方を示した。

「そんな事でわしを言いくるめようたつて駄目です。馬鹿ばかにしないで下さい。失礼ながら、みなさん様に貧乏なのを、わしひとり十両の仕合せにめぐまれて、天道てんとうさまにも御一同にも相すまなく、心苦しくて落ちつかず、酒でも飲まなけりや、やり切れなくなつて、今夕御一同を御招待して、わしの過分の仕合せの厄やくはら払いをしようとしたのに、さらにまた降つてわいた奇妙な災難、十両でさえ持てあましている男に、意地悪く、もう一両押しつけるとは、御一同も人が悪すぎますぞ。原田内助、貧なりといえども武士のはしくれ、お金も何も欲しくござらぬ。この一両のみならず、こちらの十両も、みなさんお持ち帰り下さい。」と、まことに、へんな怒り方をした。気の弱い男というものは、少しでも自分

の得とくになる事に於おいては、極度に恐縮し汗を流してまごつくものだが、自分の損になる場合、人が変つたように偉そうな理窟を並べ、いよいよ自分に損が来るように努力し、人の言は一切容いれず、ただ、ひたすら屁理窟を並べてねばるものである。極度に凹へこむと、裏のほうがふくれて来る。つまり、あの自尊心の倒錯である。原田もここは必死、どもりどもり首を振って意見を開陳し矢鱈やたらにねばる。

「馬鹿にしないで下さいよ。十両の金が、十一両に化けるなんて、そんな人の悪い冗談はやめて下さいよ。どなたかが、さつきこつそり、お出しになつたのでしよう。それにきまっています。短慶どのの難儀を見るに見かね、その急場を救おうとして、どなたか、所持の一両を、そつとお出しになつたのに違いない。つまらぬ小細工をしたものです。わしの小判は、重箱の蓋の裏についていたのです。行燈の傍そばに落ちていた金は、どなたかの情の一両にきまっています。その一両を、このわしに押しつけるとは、まるですじみちが立っています。そんなにわしが金を欲しがっていると思召さるか。貧者には貧者の意地があります。くどく言うようだけれども、十両持っているのさえ、わしは心苦しく、世の中がいやになっていた折も折、さらに一両を押しつけられるとは、天道さまにも見放されたか、わしの武運もこれまで、腹かき切つてもこの恥は雪そそがなければならぬ。わしは酒飲みの馬

鹿ですが、御一同にだまされて、金が子を産んだと、やにさがるほど耄碌はしていません。さあ、この一両、お出しになった方は、あつさりと収めて下さい。「もともと、おそろしい顔の男であるから、坐り直して本気にものを言い出せば、なかなか凄しい。一座の者は頸をすくめて、何も言わない。

「さあ、申し出て下さい。そのお方は、情の深い立派なお方だ。わしは一生その人の従僕になつてもよい。一文の金でも惜しいこの大みそかに、よくぞ一両、そしらぬ振りして行燈の傍に落し、短慶どのの危急を救つて下された。貧者は貧者同志、短慶どののつらい立場を見かねて、ご自分の大切な一両を黙つて捨てたとは、天晴れの御人格。原田内助、敬服いたしました。その御立派なお方が、この七人の中にたしかにいるのです。名乗つて下さい。堂々と名乗つて出て下さい。」

そんなにまで言われると、なおさら、その隠れた善行者は名乗りにくくなるであろう。こんなところは、やつぱり原田内助、だめな男である。七人の客は、いたずらに溜息をつき、もじもじしているばかりで、いつこうに埒があかない。せつかくの酒の酔いも既に醒め、一座は白け切つて、原田ひとり血走つた眼をむき、名乗り給え、名乗り給え、とあせつて、そのうちに鶏鳴あかつきを告げ、原田はどうとう、しびれを切らし、

「ながくおひきとめも、無礼と存じます。どうしても、お名乗りが無ければ、いたしかたがない。この一両は、この重箱の蓋に載せて、玄関の隅に置きます。おひとりずつ、お帰り下さい。そうして、この小判の主は、どうか黙って取ってお持ち帰り願います。そのような処置は、いかがでしょう。」

七人の客は、ほっとしたように顔を挙げて、それがよい、と一様に賛意を表した。実際、愚図の原田にしては、大出来の思いつきである。弱気な男というものは、自分の得にならぬ事をするに当っては、時たま、このような水際立みずぎわだった名案を思いつくものである。

原田は少し得意。皆の見ている前で、重箱の蓋に、一両の小判をきちんと載せ、玄関に置いて来て、

「式台の右の端、最も暗いところへ置いて来ましたから、小判の主でないお方には、あるか無いか見定める事も出来ません。そのままお帰り下さい。小判の主だけ、手さぐりで受取って何気なくお帰りなされるよう。それでは、どうぞ、山崎老から。ああ、いや、襖ふすまはびつたりしめて行つて下さい。そうして、山崎老が玄関を出て、その足音が全く聞えなくなつた時に、次のお方がお立ち下さい。」

七人の客は、言われたとおりに、静かに順々に辞し去つた。あとで女房は、手燭てしよくをと

もして、玄関に出て見ると、小判は無かった。理由のわからぬ戦慄せんりつを感じて、
 「どなたでしようね。」と夫に聞いた。

原田は眠そうな顔をして、

「わからん。お酒はもう無いか。」と言った。

落ちぶれても、武士はさすがに違うものだと、女房は可憐かれんに緊張して勝手元へ行き、お酒の爛に取りかかる。

(諸国はなし、卷一の三、大晦日おほつごもりはあはぬ算用)

大力

むかし讚岐さぬきの国、高松に丸亀屋まるがめとて両替屋を営み四国に名高い歴々の大長者、その一子に才兵衛さいべえとて生れ落ちた時から骨太く眼玉めだまはぎよろりとしてただならぬ風貌ふうぼうの男児があつたが、三歳にして手足の筋骨いやに節くれだち、無心に物差しを振り上げ飼猫かいねこの頭をこつんと打つたら、猫は声も立てずに絶命し、乳母は驚き猫の死骸しがいを取上げて見たら、その頭の骨が微塵みじんに打ち砕かれていますので、ぞつとして、おひまを乞こい、六歳の時にはもう近所の子供たちの餓鬼大将で、裏の草原につながれてある子牛を抱きすくめて頭の上に乗せその辺を歩きまわつて見せて、遊び仲間を戦慄せんりつさせ、それから毎日のように、その子牛をおもちやにして遊んで、次第に牛は大きくなつても、はじめからかつぎ慣れているものだから何の仔細しさいもなく四肢ししをつかまえて眼より高く差し上げ、いよいよ牛は大きくなり、才兵衛九つになつた頃ころには、その牛も、ゆつたりと車を引くほどの大黒牛になつたが、それでも才兵衛はおそれず抱きかかえて、ひとりで大笑いすれば、遊び友達はいまは全く薄気味すぎわるくなり、誰も才兵衛と遊ぶ者がなくなつて、才兵衛はひとり裏山に登つて杉の

大木を引抜き、牛よりも大きい岩を崖の上から蹴落して、つまらなそうにして遊んでいた。
 十五、六の時にはもう頬ほおに髻ひげも生えて三十くらいに見え、へんに重々しく分別ありげな面つら構まえをして、すこしも可愛かわいいところがなく、その頃、讚岐に角力すもうがはやり、大関には天て竺んじく仁に太夫たゆう、つづいて鬼石くわいせき、黒駒くろこま、大浪おきなみ、いかずち、白滝しろたけ、青鮫あおざめなど、いずれも一癖ありげな名前をつけて、里の牛飼うまが、山家の柴しば男おとこ、または上かみ方がたから落ちて来た本職の角力取りなど、四十八手しじゅうはっぺに皮をすりむき骨を砕き、無用の大怪我おおけがばかりして、またこの道にも特別の興ありと見えて、やめられず榎子どんすのまわしなどして時々ゆるんでまわしがずり落ちてにもこりとも笑わず、上手うわてがどうしたの下手したてがどうしたの足癖あしぐせがどうしたのと、何の事やらこの世の大事だいじの如ごとく騒さわいで汗も拭ふかず矢鱈やたらにもみ合あって、稼業かぎようも忘れ、家へ帰ると、人一倍大めしをくらって死んだようにぐたりと寝てしまう。かねて力自慢の才兵衛、どうして之これを傍觀ぼうくわんし得べき。榎子のまわしを締め込んで、土俵に躍り上あって、さあ来い、と両手をひろげて立ちはだかれれば、皆々、才兵衛の幼少の頃からの馬鹿力ばかぢからを知しっているの、にわかに興覚めて、そそくさと着物を着て帰り仕度をする者もあり、若旦那わかだんな、およしなさい、へへ、ご身分にかかわりますよ、とお世辞よこしまだか忠告ちゆうこだか非難ひなんだか、わけのわからぬ事を人の陰に顔をかくして小声で言う者もあり、その中に、上方からくだつて来

た鰐わにぐち口くちという本職の角力、上方では弱くて出世もできなかつたが田舎へ来ればやはり永年たたき込んだ四十八手がものを言い在郷ざいこうの若い衆の糞くそちから力を軽くあしらっている男では一番、と平気で土俵にあがつて、おのれと血相変えて飛び込んで来る才兵衛の足を払つて、苦もなく捻ねじ伏せた。才兵衛は土俵のまんなかに死んだ蛙かえるのように見つともなく這はいつくばつて夢のような気持、実に不思議な術もあるものだと思ふと首を振り、間抜けた顔で起き上つて、どつと笑い囃はやす観衆をちよつと睨にらんで黙らせ、腹が痛い、とてれ隠しのつまらぬ嘘うそをついて家へ帰つて来たが、くやしくてたまらぬ。鶏を一羽ひねりつぶして煮て骨ごとぼりぼり食つて力をつけて、その夜のうちに鰐口の家へたずねて行き、さきほどは腹が痛かつたので思わぬ不覚をとつたが、今度は負けぬ、庭先で一番やつて見よう、と申し出た。鰐口は晩酌ばんしやくの最中で、うるさいと思つたが、いやにしつこく挑いどんで来るので着物を脱いで庭先に飛び降り、突きかかつて来る才兵衛の巨軀きよくを右に泳がせ左に泳がせ、自由自在にあやつれば、才兵衛次第に目まいがして来て庭の松の木を鰐口と思ひ込み、よいしよと抱きつき、いきせき切つて、この野郎と叫んで、苦も無く引き抜いた。

「おい、おい、無茶をするな。」鰐口もさすがに才兵衛の怪力あきに呆あきれて、こんなものを永く相手にしていると、どんな事になるかもわからぬと思ひ、縁側にあがつてさっさと着物

を着込んで、「小僧、酒でも飲んで行け。」と懐柔の策に出た。

才兵衛は松の木を引き抜いて目よりも高く差し上げ、ふと座敷の方を見ると、鰐口が座敷で笑いながらお酒を飲んでいたので、ぎよつとして、これは鬼神に違いないと幼く思い込み、松の木も何も投げ捨て庭先に平伏し、わあと大声を挙げて泣いて弟子にしてくれよと懇願した。

才兵衛は鰐口を神様の如くあがめて、その翌日から四十八手の伝授にあずかり、もともと無双の大力ゆえ、その進歩は目ざましく、教える鰐口にも張合いが出て来るし、それにもまして、才兵衛はただもう天にも昇る思いで、うれしくてたまらず、寝ても覚めても、四十八手、四十八手、あすはどの手で投げてやろうと寝返り打って寝言を言い、その熱心が摩利支天にも通じたか、なかなかの角力上手になって、もはや師匠の鰐口も、もてあまし気味になり、弟子に投げられるのも恰好かっこうが悪く馬鹿々々しいと思ひ、或る日もつとらしい顔をして、汝も、もう一人前の角力取りになった、その心掛けを忘れるな、とわけのわからぬ訓戒を垂れ、ついでには汝に荒磯あらいそという名を与える、もう来るな、と言つていそいで敬遠してしまった。才兵衛は師匠から敬遠されたとも気附きづかず、わしもいよいよ一人前の角力取りになったか、ありがたいわい、きょうからわしは荒磯だ、すごい名前じゃ

ないか、あまことに師の恩は山よりも高い、と涙を流してよろこび、それから、どこ
の土俵に於おいても無敵の強さを発揮し、十九の時に讃岐の大関天竺仁太夫を、土俵の砂に
埋めて半死半生にし、それほどまで手ひどく投げつけなくてもいいじゃないかと角力仲間
の評判を悪くしたが、なあに、角力は勝ちやいいんだ、と傲ごうぜん然ぜんとうそぶき、いよいよ皆
に憎まれた。丸亀屋の親爺おやしは、かねてよりわが子の才兵衛の力自慢をにがにがしく思い、
何とか言おうとしても、才兵衛にぎよろりと睨にらまれると、わが子ながらも気味悪く、あの
馬鹿力で手向いされたら親の威光も何もあつたものでない、この老いの細い骨は木こつ葉は微み
塵じんと震え上つて分別し直し、しばらく静観と自重していたのだが、このごろは角力に凝
つて他人様ひとさまを怪我けがさせて片輪にして、にくしみの的てきになっている有様を見るに見かねて、
或る日、おつかなびつくり、

「才兵衛さんや、」わが子にさんを附けて猫撫ねこなでこえ声こゑで呼び、「人は神代かみよから着物を着てい
たのですよ。」遠慮しすぎて自分でも何だかわからないような事を言ってしまった。

「そうですか。」荒磯は、へんな顔をして親爺おやしを見ている。親爺おやしは、いよいよ困つて、
「はだかになつて五体あぶない勝負も、夏は涼しい事でしょうが、冬は寒くていけません
でしょうねえ。」と伏目になつて膝ひざをこすりながら言った。さすがの荒磯も噴き出して、

「角力をやめろと言うのでしよう？」と軽く問い返した。親爺はぎよつとして汗を拭き、
 「いやいや、決してやめろとは言いませんが、同じ遊びでも、楊弓など、どうでし
 うねえ。」

「あれは女子供の遊びです。大の男が、あんな小さい弓を、ふしくれ立った手でひねくり
 まわし、百発百中の腕前になってみたところで、どろぼうに襲われて射しようとしても、ど
 ろぼうが笑い出しますし、さかなを引く猫にあてても描はかゆいとも思やしません。」

「そうだろうねえ。」と賛成し、「それでは、あの十種香とか言つて、さまさまの香を
 嗅ぎわける遊びは？」

「あれもつまらん。香を嗅ぎわけるほどの鼻があつたら、めしのこげるのを逸早く嗅ぎ
 出し、下女に釜の下の薪をひかせたら少しは家の仕末のたしになるでしょう。」

「なるほどね。では、あの蹴鞠は？」

「足さばきがどうのこうのと言つて稽古しているようですが、塀を飛び越えずに門をくぐ
 つて行つたつて仔細はないし、闇夜には提灯をもって静かに歩けば溝へ落ちる心配も
 ない。何もあんなに苦勞して足を軽くする必要はありません。」

「いかにも、そのとおりだ。でも人間には何か愛嬌が無くちやいけなあんじやないか

ねえ。茶番の狂言なんか稽古したらどうだろうねえ。家に寄り合いがあつた時など、あれをやつてみんなにお見せすると、——」

「冗談を言つちやいけない。あれは子供の時こそ愛嬌もありますが、髭ひげの生えた口から、まかり出いでたるは太郎冠者たろうかじやも見ると冷汗をかきますよ。お母さんだけが膝をすすめて、うまい、なんてほめて近所のもの笑いの種になるくらいのもんです。」

「それもそうだねえ。では、あの活いけ花はなは？」

「ああ、もうよして下さい。あなたは耄もうろく碌ろくしているんじゃないですか。あれは雲の上の奥深きお方々が、野辺に咲く四季の花をごろんになる事が少ないので、深山の松かしわを、取り寄せて、生きてあるままの姿を御眼の前に眺ながめてお楽しみなされるためにはじめた事で、わしたち下々の者が庭の椿つばきの枝をもぎ取り、鉢植はちうちえの梅をのこぎりで切つて、床の間に飾つたつて何の意味もないじゃないですか。花はそのままに眺めて楽しんでるほうがいいのだ。」言う事がいちいち筋道がちゃんとしてるので親爺は閉口して、

「やつぱり角力が一ばんいいかねえ。大いにおやり。お父さんも角力がきらいじゃないよ。若い時には、やったものです。」などと、どうにも馬鹿らしい結果になつてしまった。お内儀は親爺の無能を軽けい蔑べつして、あたしならば、ああは言わない、と或る日、こつそり才

兵衛を奥の間に呼び寄せ、まず華やかに、おほほと笑い、

「才兵衛や、まあここへお坐りすわ。まあたいへん鬚ひげが伸びているじやないか、剃そつたらどうだい。髪もそんなに蓬ぼうぼう々とさせて、どれ、ちよつと撫なでつけてあげましょう。」

「かまわないで下さい。これは角力の乱れ髪と言つて粹いきなものなんです。」

「おや、そうかい。それでも粹なんて言葉を知つてただけたのもしいじやないか。お前はことし、いくつだい。」

「知つてる癖に。」

「十九だつたね。」と母は落ちついて、「あたしがこの家にお嫁に来たのは、お父さんが十九、お母さんが十五の時でしたが、お前のお父さんたら、もうその前から道楽の仕放題でねえ、十六の時から茶屋酒の味を覚えたとやらで、着物の着こなしても何でも、それこそ粹でねえ、あたしと一緒になつてからも、しばしば上方へのぼり、いいひとをたくさんこしらえて、いまこそあんな、どつちを向いてるのだからわからないような変な顔だが、わかい時には、あれでなかなか綺麗きれいな顔で、ちよつとそんなに俯向うつむいたところなど、いまのお前にそっくりですよ。お前も、お父さんに似てまつげが長いから、うつむいた時の顔に愁うれえがあつて、きつと女には好かれますよ。上方へ行つて島原しまばらなどの別嬪べっぴんさんを泣か

せるなんてのは、男と生れて何よりの果報だろうじやないか。」と言って、いやらしくにやりと笑った。

「なんだつまらない。女を泣かせるには殴るに限る。角力で言えば張手はりてというやつだ。こいつを二つ三つくらわせたなら、泣かぬ女はありますまい。泣かせるのが、果報だったら、わしはこれからいよいよ角力の稽古をはげんで、世界中の女を殴って泣かせて見せます。」

「何を言うのです。まるで話が、ちがいますよ。才兵衛、お前は十九だよ。お前のお父さんは、十九の時にはもう茶屋遊びでも何でも一とおり修行をすましていたのですよ。まあ、お前も、花見がてらに上方へのぼって、島原へでも行って遊んで、千両二千両使ったって、へるような財産でなし、気に入った女でもあつたら身請みうけして、どこか景色のいい土地にしよう。お前の好きな土地に、お前の気ままの立派なお屋敷をこしらえてあげましょう。」

そうして、あたしのほうから、米、油、味噌、塩、醤油、薪炭、四季折々のお二人の着換え、何でもとどけて、お金だつて、ほしだけ送ってあげるし、その女のひと一人だけで淋さびしいならば、お妾めかけを京からもう二、三人呼び奇せて、その他、振袖ふりそでのわかい腰元三人、それから中居なかい、茶の間、御物縫おものいの女、それから下働きのおさんどん二人、お小姓

二人、小坊主こぼうず一人、あんま取の座頭一人、御酒の相手に歌うたいの伝右衛門でんえもん、御料理番一人、駕籠かごかき二人、御草履取おぞうり大小二人、手代一人、まあぎつと、これくらいつけてあげるつもりですから、悪い事は言わない、まあ花見がてらに、——」と懸命に説けば、

「上方へは、いちど行つてみたいと思つていました。」と気軽に言うので、母はよろこび膝をすすめ、

「お前さえその気になつてくれたら、あとはもう、立派なお屋敷をつくつて、お妾でも腰元でも、あんま取の座頭でも、——」

「そんなのはつまらない。上方には黒獅子くろじしという強い大関がいるそうです。なんとかしてその黒獅子を土俵の砂に埋めて、——」

「ま、なんて情無い事を考えているのです。好きな女と立派なお屋敷に暮して、酒席のなぐさみには伝右衛門を、——」

「その屋敷には、土俵がありますか。」

母は泣き出した。

襖越ふすまこしに番頭、手代てだいたちが盗み聞きして、互いに顔を見合せて溜息ためいきをつき、

「おれならば、お内儀さまのおつしやるとおりにするんだが。」

「当り前さ。蝦夷が島の端でもいい、立派なお屋敷で、そんな榮華のくらしを三日でもいい、あとは死んでもいい。」

「声が高い。若旦那に聞えると、あの、張手とかいう凄いのを、二つ三つお見舞いされるぞ。」

「そいつは、ごめんだ。」

みな顔色を変え、こそこそと退出する。

その後、才兵衛に意見をしようとする者も無く、才兵衛いよいよ増長して、讃岐一国を狭しとして阿波の徳島、伊予の松山、土佐の高知などの夜宮角力にも出かけて、情容赦も無く相手を突きとばし張り倒し、多くの怪我人を出して、角力は勝ちやいいんだ、と憎々しげにせせら笑って悠然と引き上げ、朝昼晩、牛馬羊の生肉を食って力をつけ、顔は鬼の如く赤く大きく、路傍で遊んでいる子はそれを見て、きやつと叫んで病気になる、大人は三丁さきから風をくらって疾走し、丸亀屋の荒磯と言えば、讃岐はおろか四国全体、誰知らぬものとして無い有様となった。才兵衛はおろかにもそれを自身の出世と考え、わしの今日あるは摩利支天のお恵みもさる事ながら、第一は恩師鰐口様のおかげ、めったに鰐口様のほうへは足を向けて寝られぬ、などと言うものだから、鰐口は町内の者に合わず顔が

無く、いたたまらず、ついに出家しなければならなくなった。そのような騒ぎをいつまでも捨て置く事も出来ず、丸亀屋の身内の者全部ひそかに打寄つて相談して、これはとにかく嫁をもらつてやるに限る、横町の小平太の詰将棋も坂下の与茂七の尺八も嫁をもらつたらばつたりやんだ、才兵衛さんも綺麗なお嫁さんから人間の情愛というものを教えられたら、あんな乱暴なむごい勝負がいやになるに違いない、これは何でも嫁をもらつてやる事です、と鳩首きゆうしゆして眼を光らせてうなずき合い、四方に手廻てまわして同じ讃岐の国の大地主の長女、ことし十六のお人形のように美しい花嫁をもらつてやったが、才兵衛は祝しゆげ言んの日にも角力の乱れ髪のまま、きょうは何かあるのですか、大勢あつまつていやがる、と本当に知らないのかどうか、法事ですか、など情無い事を言い、父母をはじめ親戚きせき一同、拜むようにして紋服を着せ、花嫁てはの傍そばに坐らせてとにかく盃さかずきごと事をすませて、ほつとした途端に、才兵衛はぶいと立ち上つて紋服を脱ぎ捨て、こんなつまらぬ事をしていては腕の力が抜けると言い、庭に飛び降り庭石を相手によいしょ、よいしょとすさまじい角力の稽古。父母は嫁の里の者たちに面目なく背中にびっしり冷汗をかいて、

「まだ子供です。ごらんとおりの子供です。お見のがしを。」と言うのだが、見たところ、どうしてなかなか子供ではない。四十くらいの親爺に見える。嫁の里の者たちは、あ

つけにとられて、

「でも、あんな髭をはやして分別顔でいきんでいられるさまは、石川五右衛門の釜うでを思い出させます。」と率直な感想を述べ、とんでもない男に娘をやったと顔を見合せて溜息をついた。

才兵衛はその夜お嫁を隣室に追いやり、間の襖に念入りに固くしんばり棒をして、花嫁がしくしく泣き出すと大声で、

「うるさい！」と唼鳴り、^{どな}「お師匠の鰐口様がいつかおっしゃった。夫婦が仲良くすると、あたり男盛りも、腕の力が抜ける、とおっしゃった。お前も角力取の女房^{にようぼう}ではないか。それくらいのを知らないでどうする。わしは女ぎらいだ。摩利支天に願掛けて、わしは一生、女に近寄らないつもりなのだ。馬鹿者め。めそめそしないで、早くそつちへ蒲団^{ふとん}敷いて寝ろ！」

花嫁は恐怖のあまり失神して、家中が上を下への大騒ぎになり、嫁の里の者たちはその夜のうちに、鬼が来た鬼が来たと半狂乱で泣き叫ぶ娘を駕籠^{かご}に乗せて、里へ連れ戻った。

このような不首尾のために才兵衛の悪評はいよいよ高く、いまは出家遁世^{とんせい}して心静かに山奥の庵^{いおり}で念仏三昧^{ざんまい}の月日を送っている師匠の鰐口の耳にもはいり、師匠にとって弟

子の悪評ほどつらいものはなく、あけくれ氣に病み、ついには念仏の障りにもなつて、或る夜、決意して身を百姓姿にかえて山を下り、里の夜宮に行つて相変らずさかなな夜宮角力を、ほおかぶ頬被りして眺めて、そのうちにれいの荒磯が、のつしのつしと土俵にাগり、今夜もわしの相手は無しか、尻しりごみしないでかかつて来い、としゃが噎れた声で言つてぎよろりとあたりを見廻せば、お宮の松しょうらい籟も、しんと静まり、人々は無言で帰り仕度をはじめ、その時、鰐口和尚おしょうは着物を脱ぎ、頬被りをしたままで、おう、と叫んで土俵に上つた。荒磯は片手で和尚の肩をわし驚つかみにして、この命知らずめが、とせせら笑い、和尚は肩の骨がいまにも砕けはせぬかと氣が氣でなく、

「よせ、よせ。」と言つても、荒磯は、いよいよ笑つて和尚の肩をゆすぶるので、どうにも痛くてたまらなくなり、

「おい、おい。おれだ、おれだよ。」とさびさや嘯いて頬被りを取つたら、

「あ、お師匠。おなつかしゆう。」などと言つてる間に和尚は、上手投げという派手な手を使つて、ものの見事に荒磯の巨体を宙に一廻転させて、ずでんどうと土俵のまん中に仰向けに倒した。その時の荒磯の形のみつともなかつた事、おおなます大鯰がひょうたん瓢箪からすべり落ち、いのししはしご猪が梯子はしごからころげ落ちたみたいの言語に絶したぶざまなかつこう恰好であつたと後々の

里の人たちの笑い草にもなった程で、和尚はすばやく人ごみにまぎれて素知らぬ振りでの庵に帰り、さっぱりした気持で念仏を称となえ、荒磯はあばら骨を三本折って、戸板に乗せられて死んだようになって家へ帰り、師匠、あんまりだ、うらみませ、とうわごとを言い、その後さまさま養生してもはかどらず、看護の者を足で蹴け飛ばしたりするので、次第にお見舞いをする者もなくなり、ついには、もったいなくも生みの父母に大小便の世話をさせて、さしもの大兵肥満も骨と皮ばかりになって消えるように息を引きとり、本朝二十不孝の番附の大横綱になったという。

(本朝二十不孝、卷五の三、無用の力自慢)

猿塚さるづか

むかし筑前ちくぜんの国、太宰府だざいふの町に、白坂徳右衛門とくえもんとて代々酒屋を営み太宰府一の長者、その息女お蘭らんの美形ならびなく、七つ八つの頃から見る人すべて瞳どうじゃく若し、おのれの鼻垂れの娘の顔を思い出してやけ酒を飲み、町内は明るく浮き浮きして、ことし十に六つ七つ余り、骨細く振ふり袖そでも重げに、春光ほのかに身辺をつつみ、生みの母親もわが娘に話かけて、ふと口を噤つぐんで見とれ、名花ほまれの誉は国中にかぐわしく、見ぬ人も見ぬ恋に沈むという有様であつた。ここに桑盛次郎右衛門くわもりじろうえもんとて、隣町の裕福な質屋の若旦那わかだんな、醜男ぶおとこではないけれども、鼻が大きく目尻めじりの垂れ下つた何のへんてつも無い律儀りちぎそうな鬚ひげ男おとこ、齒はの綺麗きれいなのが取柄とりえで笑顔にちよつと愛あい嬌きやうのあるところがよかつたのか、或る日あの雨宿あめりが縁きりになつて、人は見かけに依よらぬもの、縁きりは異なるもの、馬鹿ばからしいもの、お蘭に慕あこがれるという飛んでもない大果報を得たというのがこの物語の発端である。両方の親は知らず、次郎右衛門ひそかに、出入のさかなやの伝六に頼み、徳右衛門方に縁組の内相談を持ちかけさせた。伝六はかねがねこの質屋に一かたならず面倒をかけている事とて、次郎右

衛門の言いにくそうな頼みを聞いて、向うは酒屋、うまく橋渡しが出来たら思うぞんぶん飲めるであろう、かつはこちらの質の利息払いの期限をのばしてもらうのはこの時と勇み立ち、あつかましくも質流れの紋服で身を飾り、知らぬ人が見たらどなたさまかと思うほどの分別ありげの様子をして徳右衛門方に乗り込み、えへへと笑い扇子を鳴らして庭の石を褒め、相手は薄気味悪く、何か御用でも、と言い、伝六あわてず、いや何、と言い、やがてそれとなく次郎右衛門の希望を匂わせ、こちらさまは酒屋、向うさまは質屋、まんざら縁の無い御商売ではございませぬ、酒屋へ走る前には必ず質屋へ立寄り、質屋を出てからは必ず酒屋へ立寄るもので、謂わば坊主とお医者ごことの如くこの二つが親戚しんせきだったら、鬼に金棒で、町内の者が皆殺されてしまいます、などとけしからぬ事まで口走り、一世一代の無い智慧ちえを絞って懸命に取りなせば、徳右衛門も少し心が動き、

「桑盛様の御総領ならば、私のほうでも不足はございませぬが、時に、桑盛さまの御宗ごしゅう旨しは？」

「ええと、それは、」意外の質問なので、伝六はぐつとつまり、「はつきりは、わかりませぬが、たしか浄土宗で。」

「それならば、お断り申します。」と口を曲げて憎々しげに言い渡した。「私の家では代

々の法華宗ほつけしゆうで、殊ことにも私の代になりましたから、深く日蓮にちれん様に帰依きいかまつ仕つかまつつて、朝夕南なむみ無妙法蓮華經ようほうれんげきようのお題目を怠おろそらず、娘にもそのように仕込んでありますので、いまさら他宗へ嫁にやるわけには行きません。あなたも縁談の橋渡しをしようというほどの男なら、それくらいそれくらいの事を調べてからおいでになつたらどうです。」

「いや、あの、私は、」と冷汗を流し、「私は代々の法華宗の日蓮様で、朝夕、南無妙法蓮華經と。」

「何を言っているのです。あなたに嫁をやるわけじゃあるまいし、桑盛様が浄土宗ならば、いかほど金銀を積んでも、またその御総領が御発明で男振りがよくつても、私は、いやと申します。日蓮様に相すみません。あんな陰気くさい浄土宗など、どこがよいのです。よくもこの代々の法華宗の家へ、娘がほしいなんて申込めたものだ。あなたの顔を見てさえ胸くそが悪い。お帰り下さい。」

さんざんの不首尾で伝六は退散し、しよげ切つてこの由よしを次郎右衛門に告げた。次郎右衛門は気軽に、なんだ、そんな事は何でもない、こちらの宗旨を変えたらいい、家は代々不信心だから浄土宗だつて法華宗だつてかまわないんだ、と言つて、にわかふきに総ふさの長い珠じ数ゆずに持ちかえ、父母にもすすめて、朝夕お題目をあげて、父母は何の事かわからぬが子供

に甘い親なので、とにかく次郎右衛門の言いつけどおりに、わきを見てあくびをしながら南無妙法蓮華経と称え、ふたたび伝六は、徳右衛門方におもむき、いまは桑盛様も一家中、日蓮様を信心してお題目をあげていますと得意満面で申し述べたが、徳右衛門はむずかしい男で、いやいや根抜きさまの法華でなければ信心が薄い、お蘭ほしさの改宗は見えずいて浅間し、日蓮さまだつていい顔をなさるまい、ちよつと考えてもわかりそうな事だ、娘は或る知合いの法華の家へ嫁にやるようにきまつています、というむごい返事、次郎右衛門は聞いて仰天して、取敢えずお蘭に、伝六なんの役にも立たざる事、ならびに、お前がよその法華へ嫁ぐそうだが、畜生め、私はお前のために好きでもないお題目を称えて太鼓をたたき手に豆をこしらえたのだぞ、思えば私の次郎右衛門という名は、あずまの佐野の次郎左衛門に似ていて、かねてから気になつていたのだが、やはり東西左右の振られ男であつた、私もこうなれば、刀を振りまわして百人斬りぎをするかも知れぬ、男の一念、馬鹿にするな、と涙を流して書き送れば、すぐに折り返しお蘭の便り、あなたのお手紙何が何やら合点がてんが行かず、とにかく刀を振りまわすなど危い事はよして下さい、百人斬りはおろか一人も斬らぬうちにあなたが斬られてしまいます、あなたの身にもしもの事があつたなら、私はどうしたらいいのでしょうか、あまりおどかさないで下さい、よその縁談の事など、本

当に私には初耳です、あなたはいつもお鼻や目尻の事を気にして自信が無く、何のかのと言つて私を疑うので困つてしまいます、私が今更どこへ行くものですか、安心していらつしやい、もしもお父さんが私をよそへやるようだったら私はこの家から逃げてもあなたのところへ行くつもり、女の一念、覚えていらつしやい、という事なので次郎右衛門すこし笑い、しかし、まだまだ安心はならぬと無理に顔をしかめて、とにかくお題目と今は本気に日蓮様におすがりしたくなつて、南無妙法蓮華経と大声でわめいて滅多矢鱈めつたやたらに太鼓をたたく。

お蘭はその翌あぐる日、徳右衛門の居間に呼ばれて、本町紙屋彦作様かみやひこさくと縁談ととのつた、これも日蓮様のおみちびき、有難ありがたくとこしなえの祝しゅうげん言ことばを結むすべ、とおごそかに言い渡せば、お蘭はぎよつとしたが色に出さず、つつしんで一礼して部屋から出て、それから飛ぶようにして二階に駈かけ上り、一筆しめしまいらせ候そうろう、来たわよ、いよいよ決行の日が来たわよ、私は逃げるつもりです、今宵こよひのうちに迎えたのむ、拜まがむ、としどろもどろに書き散ちらし、丁稚ていぢに言いつけて隣町へ走らせ、次郎右衛門はその手紙をぎつと一読してがたがた震え、台所へ行つて水を飲み、ここが思案のしどころと座敷のまん中に大あくらをかいてみたが、別に何の思案も浮ばず、立ち上つて着物を着換え、帳場へ行つてあちこちの引

出しを搔きまわし、番頭に見とがめられて、いやちよつと、と言い、何がしの金子きんすをそそくさと袂たもとにほうり込んで、もう眼に物が見えぬ氣持で、片ちんばの下駄げたをはいて出て途中で氣がついて、家へ引返すのもおそろしく、はきもの屋に立ち寄って、もうこれだけしかお金が無いのだと思うと、けちになつて一ばん安い草履を買い、その薄つぺらな草履をはいて歩くとペタペタと裸足はだしで地べたを歩いていような感じで心細く、歩きながら男泣きに泣いて、ようやく隣町の徳右衛門の家の裏口にたどりつくと、矢のようにお蘭は走り出て、ものも言わず次郎右衛門の手を取りさつきと自分からさきに歩き出し、次郎右衛門はあんまの如く手をひかれて、ペタペタと歩いて、またも大泣きに泣くのである。ここまで、分別浅い愚かな男女の、取るにも足らぬふざけた話であるが、もちろん物語はここで終らぬ。世の中の嚴肅な労苦は、このさきにあるようだ。

二人は、その夜のうちに七里歩み、左方に博多はかたの海が青く展開するのを夢のように眺ながめて、なおも飲まず食わず、背後に人の足音を聞きたびに追手かと胆きもをひやし、生きた心地こころも無くただ歩きに歩いて蹠そつろつ跟とたどりついたところは其その名も盛者じようしやひつすい必衰ぜしやうめつ、是生せい滅ぼつ法の鐘が崎、この鐘が崎の山添の野をわけて次郎右衛門のほのかな知合いの家をたずね、案の如く薄情のあしらいを受けて、けれどもそれも無理のない事と我慢して、ぶしつ

けながら、とお金を紙に包んで差し出し、その日は、納屋なやに休ませてもらい、浅間しき身のなりゆきと今はじめて思い当つて青く寔やつれた顔を見合せて溜息ためいきをつき、お蘭は、手飼てかひの猿さるの吉兵衛の背を撫なでながら、やたらに鼻をすすり上げた。この吉兵衛という名の猿は、小猿の頃からお蘭に可愛かわいがられて育ち、娘が男と一緒にひたすら夜道を急ぐ後を慕つてついて来て、一里あまり過ぎた頃、お蘭が見つけて叱しかつて追つても、石を投げて追つてもひよこひよこついて来て、次郎右衛門は不憫ふびんに思い、せつかく慕つて来たのだから仲間に入れておやり、と言ひ、お蘭は、おいで、と手招きすれば、うれしそうに駈かけ寄つて来て、お蘭に抱かれて眼をぱちぱちさせて二人の顔を気の毒そうに眺める。いまはもう二人の忠義げまな下僕げまになりすまして、納屋へ食事を持ちこぶやら、蠅はえを追うやら、櫛くしでお蘭のおくれ毛を搔かき上げてやるやら、何かと要らないお手伝いをして、二人の淋さびしさを慰めてやろうと畜生ながら努めている。いかに世を忍ぶ身とは言え、いつまでも狭い納屋に隠れて暮しているわけにも行かず、次郎右衛門はさらに所持のお金の大半を出してその薄情の知合いの者にたのみ、すぐ近くの空地に見すばらしい庵いおりを作つてもらい、夫婦と猿の下僕はそこに住み、わずかな土地を耕して、食膳しょくぜんに供するに足るくらいの野菜を作り、ひまひまに亭主ていしゅは煙草たばこを刻み、お蘭は木綿の枷かせというものを繰つて細々と渡世し、好きも

きらいも若い一時の阿呆らしい夢、親にそむいて家を飛び出し連添ってみても、何の事は無い、いまはただありふれた貧乏世帯の、とと、かか、顔を見合せて、おかしくもなく、台所がかたりと鳴れば、鼠か、小豆に糞されてはたまらぬ、と二人血相かえて立ち上り、秋の紅葉も春の菫も、何の面白事もなく、猿の吉兵衛は主人の恩に報いるはこの時と、近くの山に出かけては柏の枯枝や松の落葉を掻き集め、家に持ち帰って竈の下にしやがみ、松葉の煙に顔をそむけながら渋団扇を矢鱈にばたばた鳴らし、やがてぬるいお茶を一服、夫婦にすすめて可笑しき中にも、しおらしく、ものこそ言わね貧乏世帯に気を遣い、夕食も遠慮して少量たべると満足の態でころりと寝て、次郎右衛門の食事がすむと駈け寄って次郎右衛門の肩をもむやら足腰をさするやら、それがすむと台所へ行きお蘭の後片附のお手伝いをして皿をこわしたりして実に面目なさそうな顔つきをして、夫婦は、せめてこの吉兵衛を唯一のなぐさみにして身の上の憂きを忘れ、そのとしも過ぎて翌年の秋、一子菊之助をもうけ、久し振りに草の庵から夫婦の樂しそうな笑声が漏れ聞え、夫婦は急に生きたる事にも張合いが出て来て、それめめをさました、あくびをしたと騒ぎ立てると、吉兵衛もはねまわって喜び、山から木の実を取って来て、赤ん坊の手に握らせて、お蘭に叱られ、それでも吉兵衛には子供が珍らしくてたまらぬ様子で、傍を離れず寝顔を覗き込み、

泣き出すと驚いてお蘭の許もとに飛んで行き裾すそを引いて連れて来て、乳を吞のませよ、と身振みぶりで教え、赤子の乳を吞むさまを、きちんと膝ひざを折ひつて坐まつて神妙しんめうに眺め、よい子守が出来たと夫婦は笑い、それにつけても、この菊之助も不憫なものの、もう一年さきに古里ふるさとの桑盛さくざうの家で生れたら、絹ふとんの蒲団ふとんに寝かせて、乳母を二人も三人もつけて、お祝いの産衣うぶぎが四方から山ほど集り、蚤のみ一匹も寄せつけず玉たまの肌はだのまま立派りつぱに育て上げる事も出来たのに、一年おくれたばかりに、雨風も防ぎかねる草の庵いほに寝かされて、木の实のおもちやなど持たされ、猿が子守とは、と自分たちの無分別な恋より起つたという事も忘れて、ひたすら子供をいとおしく思い、よし、よし、いまはこのようにみじめだが、この子の物心地のつく返までは、何とか一財産つくつて古里の親たちを見かえしてやらなければならぬ、と次郎右衛門も、子への愛から発奮して、近所の者に、この頃ころのよろしき商売は何、などと尋ね、草の庵も去年にかわつて活気を呈し、一子の菊之助もまるまると太つてよく笑い、母親のお蘭に似て輝くばかりの器量よし、猿の吉兵衛は野の秋草を手折たおつて来て菊之助の顔ちかく差しのべて上手にあやし、夫婦は何の心配も無く共に裏の畑はたけに出て大根を掘り、ことしの秋は、何かいい事でもあるか、と夫婦は幸福の予感にぬくまっていた。その頃、近所のお百姓から耳よりのもうけ話ありという事を聞き、夫婦は勇んで、或る秋晴れの日、二人

そろつてその者の家へ行つてくわしく話の内容を尋ね問いなどしている留守に、猿の吉兵衛、そろそろお坊ちゃんの入浴の時刻と心得顔で立ち上り、かねて奥様の仕方を見覚えていたとおりに、まず竈の下を焚きつけてお湯をわかし、湯玉の沸き立つを見て、その熱湯を盥たらいにちようど一ぱいとり、何の加減も見ると迄も無く、子供を丸裸にして仔細しさいらしく抱き上げ、奥様の真似まねして子供の顔をのぞき込んでやさしく二、三度うなずき、いきなりずぶりと盥に入れた。

喚わつという声ばかりに菊之助の息絶え、異様の叫びを聞いて夫婦は顔を見合せて家に駆け戻れば、吉兵衛うろうろ、子供は盥の中に沈んで、取り上げて見ればはや茹海老ゆでえびの如く、二目と見られぬむぎんの死骸しかい、お蘭はこけまろびて、わが身に代えても今一度もとの可愛なげい面影おもかげを見たと狂つたように泣き叫ぶも道理、呆然ぼうぜんたる猿を捕えて、とかく汝なんじは我が子の敵かたき、いま打殺すと女だてらに薪まきを振上げ、次郎右衛門も胸つぶれ涙とどまらぬながら、ここは男の度量、よしこれも因果の生れ合せと観念して、お蘭の手から薪を取上げ、吉兵衛を打ち殺したく思うも尤もつともながら、もはや返らぬ事に殺せつ生しょうするは、かえつて菊之助ぼたが菩提ぼだいのため悪し、吉兵衛もあさましや我等われらへの奉公と思つてしたるべけれども、さすが畜生の智慧ちえ浅きは詮せん方かたなし、と泣き泣き論ごとせば、猿の吉兵衛も部屋の隅すみで涙を流し

て手を合せ、夫婦はその様を見るにつけいよいよつらく、いかなる前生の悪業ありてかかる憂目に遭うかと生きる望も消えて、菊之助を葬った後には共にわずらい寝たきりになって、猿の吉兵衛は夜も眠らずまめまめしく二人を看護し、また七日々々にお坊ちゃん墓所へ参り、折々の草花を手折って供え、夫婦すこしく恢復せし百日に当る朝、吉兵衛しよんぼりお墓に参つて水心静かに手向け、竹の鉾にてみずから喉笛を突き通して相果てた。夫婦、猿の姿の見当らぬを怪しみ、杖にすがつてまず菊之助の墓所へ行き、猿のあわれな姿をひとめ見て一切を察し、菊之助無き後は、せめてこの吉兵衛だけが世の慰めとなのでいたのに、と恨み嘆き、ねんごろに葬い、菊之助の墓の隣に猿塚を建て、その場に於いて二人出家し、（と書いて作者は途方にくれた。お念仏かお題目か。原文には、かの庵に絶えず題目唱えて、法華読誦の声やまず、とある。徳右衛門の頑固な法華の主張がこんなところに顔を出しては、この哀話も、ぶちこわしになりそうだ。困った事になったものである。）ふたたび、庵に住むも物憂く、秋草をわけていずこへとも無く二人旅立つ。

（懐硯、卷四の四、人真似は猿の行水）

人魚の海

後深草ごふかくさ天皇宝治元年三月二十日、津軽の大浦というところに人魚はじめて流れ寄り、
其その形は、かしらに細き海草の如ごとき緑の髪ゆたかに、面おもては美女の愁うれえを含み、くれないの
小こさき鶏冠とさかその眉間みけんにあり、上半身は水すい晶しょうの如く透明にして幽かすかに青く、胸に南天の
赤せきき実を二つ並べ附つけたるが如き乳あり、下半身は、魚の形さながらにして金色の花びら
とも見まがうこまかき鱗うろこすきまなく並び、尾おひれ鱗は黄色くすきとおりて大いなる銀い杏ちようの葉
の如く、その声は雲雀ひばりぶえ笛の歌に似て澄みて爽さわやかなり、と世の珍らしきためしに語り伝
えられているが、とかく、北の果の海には、このような不思議の魚も少からず棲せい息そくして
いるようである。むかし、松前まつまえの国うらぶぎようの浦奉行、中堂ちゆうどう金内こんないとて勇あり胆あり、しか
も生れつき実直の中年の武士、或あるとしの冬、お役目にて松前の浦々を見廻みまわり、夕暮ちか
く鮭さけがわ川いりうみという入海いりうみのほとりにたどりつき、そこから便船を求め、きようのうちに次の
港まで行くつもりで相客五、六人と北国の冬には珍らしく空もよく晴れ静かな海を船出し
て、汀みぎわから八丁ほど離れた頃ころ、風も無いのに海がにわかみぎわに荒れ出して、船は木の葉の如く

翻ほんろう弄せられ、客は恐怖のために土色の顔になって、思う女の名を叫び出し、さらばよ、さらばよ、といやらしく悶もたえて見せる者もあり、笈おひの中より観かんのんぎよう音経ぎようを取出し、さかさとも知らず押しいただき、そのまま開いておろおろ読み上げる者もあり、瓢ひょうたん箆たんを引き寄せ中に満たされたある酒を大急ぎで口くちの呑みして、これを飲みのこしては死んでも死にきれぬ、からになった瓢箆は浮袋になります、と五寸にも足りぬその小さいひさごを、しさいらしい顔つきで皆に見せびらかす者もあり、なんの意味か、しきりに指先で額ひたいに唾つばをなすりつけている者もあり、いそがしげに財布を出して金勘定、一両足りぬと呟つぶやいてあたりの客をいやな眼つきで睨にらむ者もあり、いのちの瀬戸際せとぎわにも、足がさわつたとやらで無用の口論をはじめめる者もあり人さまさまに騒ぎ立て、波はいよいよ高く、船は上下に荒く震動し、いまは騒ぐ力も尽き、船頭がまず船底にたおれ伏し、おゆるしなされ、と呻うめいて死んだようにぐたりとなれば、船中の客、総泣きに泣き伏して、いずれも正体を失い、中堂金内ただひとり、はじめから舷ふなばたを背にしてあぐらを掻かき、黙って腕組して前方を見つめていたが、やがて眼めのさきの海水が金色に変わり、五色の水玉噴き散ると見えしと同時に、白波二つにわかれて、人魚、かねて物語に聞いていたのと同じ姿であらわれ、頭を振って緑の髪をうしろに払いのけ、水晶の腕で海水を一掻き二掻きすると蛇へびの如く素早く金内の船

に近づき、小さく赤い口をあけて一声爽やかな笛の音。おのれ船路のさまたげと、金内怒つて荷物の中より半弓はんきゆうを取り出し、神に念じてひようと射れば、あやまたずかの人魚の肩先に当り、人魚は声もなく波間に沈み、激浪たちまち収まって海面はもとのように静かになり、斜陽おだやかに船中にさし込み、船頭は間抜けまぬで起き上り、なんだ夢か、と言つた。金内は、おのれの手柄てがらを矢鱈やたらに吹聴ふいちようするような軽薄な武士でない。黙つて微笑ほほえみ、また前のように腕組みして舷によりかかつて坐すわつている。船客もそろそろ土色の顔を挙げ、てれ隠しにけたたましく笑う者あり、せつかくの酒を何の興もなく飲んでしまつて、後の樂しみを無くした、と五寸ばかりのひさごをさかさかさに振つて、そればかり愚痴つている者もあり、或いはまた、さいぜん留守宅の若いお妾めかけの名を叫んで身悶えしていた八十歳の隠居は、さてもおそろしや、とおもむろに衣紋えもんを取りつくろい、これすなわち登竜のぼりりゆうに違いござらぬ、と断じ、そもそもこの登竜は越中えちゅう越後の海中に多く見受けられるものにして、夏日に最もしばしばこの事あり、一群の黒雲虚空こくうより下り来れば海水それに吸われるが如く応じて逆卷さかまきのぼり黒雲潮水一柱になり、まなこをこらしてその凄じき柱すさまを見れば、はたせるかな、竜の尾頭その中に歴々たりとももの本にござつた、また別の一書には、或る人、江戸より船にてのぼりしに東海道おきつの興津の沖を過ぎる時に一むらの黒雲虚

空よりの船をさして飛来る、船頭大いに驚き、これは竜の此舟を巻上げんとするなり、急に髪を切つて焼くべしとて船中の人々のこらず頭髮を切つて火にくべしに臭気ふんぷんと空にのぼりしかば、かの黒雲たちまちに散り失せたりとごぎつたが、愚老もし若かつたら、さいぜんただちに頭髮を切るべきに生憎、と言つて禿げた頭を真面目な顔して静かに撫でた。へえ、そうですか、と観音経は、馬鹿にし切つたような顔で、そつぽを向いて相槌を打ち、何もかも観音のお力にきまつていますき、と小声で呟き、殊勝げに瞑目して南無観世音大菩薩と称えれば、やあ、ぜにはあつた！と自分の懐の中から足りない一両を見つけて狂喜する者もあり、金内は、ただにこにこして、やがて船はゆらゆら港へはいり、人々やれ命拾いと大恩人の目前にあるも知らず、互いに無邪気に慶祝し合つて上陸した。

中堂金内は、ほどなく松前城に帰着し、上役の野田武蔵に、このたびの浦々巡視の結果をつぶさに報告して、それからくつろぎ、よもやまの旅の土産話のついでに、れいの人魚の一件を、少しも誇張するところなく、ありのままに淡々と語れば、武蔵かねて金内の実直の性格を熟知しているゆえ、その人魚の不思議をも疑わず素直に信じ、膝を打つて、それは近頃めずらしい話、殊にもそなたの沈着勇武、さつそくこの義を殿の御前に於いて御

披露^{ひろう}申し上げよう、と言うと、金内は顔を赤らめ、いやいや、それほどの事でも、と言いかけるのかぶせて、そうではない、古来ためし無き大手柄、家中^{かちゆう}の若い者どものはげみにもなりません、と強く言い切つて、まごつく金内をせき立て、共に殿の御前にまかり出ると、折よく御前には家中の重役の面々も居合せ、野田武蔵は大いに勢い附いて、おのおの方もお聞きなされ、世にもめずらしき手柄話、と金内の旅の奇談を逐一語れば、殿をはじめ一座の者、膝をすすめて耳を傾ける中にひとり、青崎百右衛門^{あおさきひやくえもん}とて、父親の百之丞^{ひやくのじゆう}が松前の家老として忠勤をはげんだお蔭^{かげ}で、親の歿^{ぼつご}後も、その禄高^{ろくだか}をそっくりいだき何の働きも無いくせに重役のひとりに加えられ、育ちのよいのを鼻にかけて同輩をさげすみ、なりあがり者の娘などはこの青崎の家に迎^{むか}え容れられぬと言つて妻をめとらず道楽^{だんま}三昧^{さんまい}の月日を送つて、ことし四十一歳、このごろは欲しいと言つたつて誰も娘をやるうとはせぬ有様、みずからの高慢のむくいではあるが、さすがに世の中が面白^{おもしろ}くなく、何かにつけて家中の者たちにいや味^{あじ}を言い、身のたけ六尺に近く極度に瘦^やせて、両手の指は筆の軸のように細く長く、落ち窪^{くぼ}んだ小さい眼はいやらしく青く光つて、鼻は大きな鷺^わ鼻^{しほな}、頬^{ほお}はこけて口はへの字型、さながら地獄の青鬼の如き風貌^{ふうぼう}をしていて、一家中のきらわれ者、この百右衛門が、武蔵の物語を半分も聞かぬうちに、ふふん、と笑い、のう

玄齋げんさい、と末座に丸くかしこまっている茶坊主ちやぼうずの玄齋に勝手に話掛け、

「そなたは、どう思うか。こんな馬鹿らしい話を、わざわざ殿へ言上するなんて、ちと不謹慎だとは思わぬか。世に化物なし、不思議なし、猿さるの面つらは赤し、犬の足は四本にきまつている。人魚だなんて、子供のお伽ときばなし噺はなしではあるまいし、いいとしをしたお歴々が、額ひたいにはくれないの鶏冠とさかも呆あきれるじやないか。」と次第に傍若無人の高声になって、「のう、玄齋、よしその人魚とやらの怪しい魚類が北海に住んでいたとしてもさ、そんな古来ための無い妖ようかい怪かいを射とめるには、こちらにも神通力が無くてはかなわぬ。なまなかの腕では退治が出来まい。鳥に羽あり魚に鱗ひれありさ。なかなかどうして、飛ぶ小鳥、泳ぐ金魚を射とめるのも容易の事じやないのに、そんな上半身水晶とやらの化物を退治するには、まず弓矢ゆみや八幡大菩薩はちまんたいぼさつ、頼光らいこう、綱、八郎、田原藤太たわらとうた、みんなのお力をたばにしたくらい腕前でもなければ、間に合いますまい。いや、論より証拠、それがしの泉水の金魚、な、そなたも知っているだろう、わずかの浅水をたのしみにひらひら泳ぎまわってござるが、せんだつて退屈のあまり雀すずめの小弓で二百本ばかり射かけてみたが、これにさえ当らぬもの、金内殿も、おおかた海上でにわかにわかの旋風に遭い、動転して、流れ寄る腐木にはっしと射込んだのでなければ、さいわいだがのう。」と、当惑し切ってもじもじしている茶坊主をつ

かまえて、殿へも聞えよがしの雑言^{ぞうごん}。たまりかねて野田武蔵、ぐいと百石衛門の方に向
き直り、

「それは貴殿の無学のせいだ。」と日頃の百右衛門の思い上った横着振りに対する鬱憤^{うつぶん}
もあり、噛みつくような口調で言つて、「とかく生半可^{なまはんか}の物識^{ものし}りに限つて世に不思議な
し、化物なし、と実^みもふたも無いような言い方をして澄^{すま}し込んでいるものですが、そもそ
もこの日本の国は神国なり、日常の道理を越えたる不思議の真実、炳^{へい}として存す。貴殿の
お屋敷の浅い泉水とくらべられては困ります。神国三千年、山海万里のうちにはおのずか
ら異風奇態の生^{しょうるい}類^いあるまじき事に非^あらず、古代にも、仁^{にんとく}徳天皇の御時、飛驒^{ひだ}に一身両
面の人出ずる、天武^{てんむ}天皇の御宇^{ぎよ}に丹波^{たんば}の山家^{やまが}より十二角の牛出ずる、文武^{もんむ}天皇の御時、慶^け
雲^{いづん}四年六月十五日に、たけ八丈よこ一丈二尺一頭三面の鬼、異国より来^{きた}る、かかる事ど
もも有るなれば、このたびの人魚、何か疑うべき事に非^あらず。」と名調子でもつて一気にま
くし立てると、百右衛門、蒼^{あお}い顔をさらに蒼くして、にやりと笑い、
「それこそ生半可の物識り。それがしは、議論を好まぬ。議論は軽輩、功をあせっている
者同志のやる事です。子供じやあるまいし。青筋たてて空論をたたかわしても、お互い自
説を更に深く固執するよな結果になるだけのものさ。議論は、つまらぬ。それがしは何

も、人魚はこの世に無いと言っているのではござらぬ。見た事が無いと言っているだけの事だ。金内殿もお手柄ついでにその人魚とやらを、御前に御持参になればよかつたのに。」と憎らしくうそぶく。武蔵たけり立つて膝をすすめ、

「武士には、信の一字が大事ですぞ。手にとって見なければ信ぜられぬとは、さてさて、あわれむべき御心魂。それ心に信無くば、この世に何の実体かあらん。手に取って見れども信ぜずば、見ざるもひとしき仮寝の夢。実体の承認は信より発す。然しかして信は、心の情愛を根源とす。貴殿の御心底には一片の情愛なし、信義なし。見られよ、金内殿は貴殿の毒舌に遭い、先刻より身をふるわし、血涙をしぼって泣いてござるわ。金内殿は、貴殿とは違つて、うそなど言う仁じんではござらぬ。日頃の金内殿の実直を、貴殿はよもや知らぬとは申されますまい。」と詰め寄つたが、百右衛門は相手にせず、

「それ、殿がお立ちだ。御不興と見える。」といかめしい口調で言い、御奥へ引上げる城主に向つて平伏し、

「やれやれ、馬鹿どもには迷惑いたす。」と小声で呟いて立ち上り、「頭の血のめぐりの悪い事を実直と申すのかも知れぬが、夢や迷信をまことしやかに言い伝え、世をまどわすのは、この実直者に限る。」と言ひ捨て、猫ねこの如く足音も無く退出する。他の重役たちも、

或いは百右衛門の意地悪を憎み、或いは武蔵の名調子を気障きざなりとしてどつちもどつちだ
と思ひ、或いは居眠りをして何の議論やらわけがわからず呆然ぼうぜんとして立ち上つて、一人
去り二人去り、あとには武蔵と金内だけが残されて、武蔵くやししく齒がみをして、

「おのれ、よくも、ほざいた。金内殿、お察し申す。そなたも武士、すでに御覚悟もある
うが、いついかなる場合も、この武蔵はそなたの味方です。いかにしても、きやつを、こ
のままでは。」と力めば、金内は、そう言われて尚なほの事、悲しくうらめしく、しばらくは
一言の言葉も出ず、声も無く慟どうごく哭くしていた。不仕合せな人は、他人からかばわれ同情さ
れると、うれしいよりは、いつそうわが身がつらく不仕合せに思われて来るものである。
東西を失い男泣きに泣いて、いまはわが身の終りと観念し、涙をこぶしで拭ふいて顔を挙げ、
なおも泣きじやくりながら、

「かたじけなく存じます。さきほどの百右衛門のかずかずの悪口、聞き捨てになりがたく、
金内軽輩ながら、おのれ、まつぶたつと思ひながらも、殿の御前なり、忍ぶべからざるを
忍んで、ただ、くやし涙にむせていましたが、もはや覚悟のほどが極きまりました。ただいま
これより追かい駈かけて、かの百右衛門を一刀のもとに切り捨てるのは最も易やすい事ですが、そ
れでは家中の人たちは、金内は百右衛門のために嘘うそを見破られて、くやしきの余にんじより刃

傷に及んだと言ひ、それがしの人魚の話もいよいよろんの事になって、御貴殿にも御迷惑をおかけする結果に相成りますから、どうせもう、すたりものになったこの身、死におくれついでに今すこし命ながらえ、鮭川の入海を詮議して、弓矢八幡お見捨てなく、かの人魚の死骸を見つけた時は、金内の武運もいまだ尽きざる証拠、是を持参して一家中に見せ、しかるのち、百右衛門を心置きなく存分に打ち据え、この身もうれしく切腹の覚悟。と申せば武蔵は、いじらしさに、もらい泣きして、

「武蔵が無用の出しゃばりして、そなたの手柄を殿に御披露したのが、わるかった。わけもない人魚の論などはじめて、あたら男を死なせねばならぬ。ゆるせ金内、来世は武士に生れぬ事じやのう。」顔をそむけて立ち上り、「留守は心配ないぞ。」と強く言つて広間から退出した。

金内の私宅には、八重ということし十六になる色白く目鼻立ち鮮やかな大柄な娘と、鞆という小柄で伶俐な二十一歳の召使いと二人住んでいるだけで、金内の妻は、その六年前にすでに病歿していた。金内はその日努めて晴れやかな顔をして私宅へ帰り、父はまたすぐ旅に出かける、こんどの旅は少し永いかも知れぬから留守に気を附けよ、とだけ言つて、貯えの金子ほとんど全部をふところねじ込み、逃げるようにして家を出た。

「お父さまは、へんね。」と八重は、父を送り出してから、鞠に言った。

「さようでございます。」鞠は落ちついて同意した、金内は、ひとをあざむく事は、下手である。いくら陽気に笑ってみせても、だめなのである。十六の娘にも、また召使いにも、看破されている。

「お金を、たくさん持って出たじゃないの。」お金の事まで看破されている。

鞠は、うなずいて、

「容易ならぬ事と存じます。」と、分別顔をして呟いた。

「胸騒ぎがする。」と言って、八重はりようそで両袖で胸を覆った。

「どのような事が起るかわかりませぬ。見苦しい事の無いように、これからすぐに家の内うち外を綺麗きれいに掃除いたしましょう。」と鞠は素早く襷たすきをかけた。

その時、重役の野田武蔵がお供も連れず、平服で忍ぶようにやって来て、

「金内殿は、出かけられましたか。」と八重に小声で尋ねた。

「はい。お金をたくさん持って出かけました。」

武蔵は苦笑して、

「永い旅になるかも知れぬ。留守中、お困りの事があつたら、少しも遠慮なくこの武蔵の

ところへ相談にいらつしやい。これは、当座のお小遣い。」と言って、かなりの金子を置いて立ち去る。

これはいよいよ父の身の上に何か起つたと合点して、八重も武士の娘、その夜から懐剣を固く抱いて帯もとかずに丸くなって寝る。

一方、人魚をさがしに旅立つた中堂金内、鮭川の入海のほとりにたどり着き、村の漁師をことごとく集めて、所持の金子を残らず与え、役目を以てそちたちに申しつけるのではない、中堂金内一身上の大事、内々の折入つての頼みだ、と物堅く公私の別をあきらかにして、それから少し口ごもり、頬を赤らめ、ほろ苦く笑つて、そちたちは或いは信じないかも知れないが、と気弱く前置きして、過ぎし日の人魚の一件を物語り、金内がいのに代えての頼みだ、あの人魚の死骸を是非ともこの入海の底から捜し出し、或る男に見せてやらなければこの金内の武士の一分が立たぬのだ、この寒空に気の毒だが、そちたちの全力を挙げてあの怪魚の死骸を見つけ出しておくれ、と折から雪の霏々と舞い狂う荒磯で声をからして懇願すれば、漁師の古老たちは深く信じて同情し、若い衆たちは、人魚だなんて本当かなあと疑いながら、それでも少し好奇心にそそられ、とにかく大綱を打つて、入海の底をさぐつて見たけれども、綱にはいつて来るものは、にしん、たら、かに、

いわし、かれいなど、見なれた姿のさかなばかりで、かの怪魚らしいものは更に見当らず、翌る日も、またその翌る日も、村中総出で入海に船を浮べ、寒風に吹きさらされて、網を打ったりもぐったり、さまざま難儀して捜査したが、いずれも徒勞に終り、若い衆たちは、はや不平を言い出し、あのさむらいの眼つきを見よ、どうしたって普通でない、氣違いだよ、氣違いの言う事をまに受けて、この寒空に海にもぐるのは馬鹿々々しい、おれはもう、やめた、あてもない海の人魚を捜すよりは、村の人魚にあたためられたほうが気がきいてゐる、と磯の焚火たきびに立ちはだかり下品な冗談を大声で言つてどつと笑い囃し、金内はひとり悲しく、聞えぬ振りして、一心に竜神りゅうじんに祈念し、あの人魚の鱗一枚うろこ、髪一筋でもいまこの入海から出たならば、それがしの面目はもとより武蔵殿も名譽、共に思うさま百右衛門をののしり、信義のひとたち一太刀覚えたか、とまっこうみじんに天誅てんちゆうを加え、この胸のうらみをからりと晴らす事が出来るものを、と首を伸ばして入海を見渡す姿のいじらしさに、漁師の古老は思わず涙ぐんで傍そばに寄り、

「なあに、大丈夫だ。若い衆たちは、あんな事を言っているけれど、おれたちは、たしかにこの海に、おさむらいの射とめた人魚が沈んでいると見込んでいるだ。このあたりの海には、な、昔からいろいろな不思議なさかながいました、若い衆たちには、わからねえ事

だ。おれたちの子供の頃にも、な、この沖に、おきなという大魚があらわれて、偉い騒ぎをしました。嘘でも何でも無い、その大きさは二、三里、いや、もっと大きいかも知れねえ。誰もその全身を見たものがねえのです。そのさかなが現われる時には、海の底が雷のように鳴って風もねえのに大波が起って、鯨くじらなんてやつも東西に逃げ走って、漁の船も、やあれ、おきなが来たぞう、と叫び合つて早々に浜に漕こぎ戻り、やがて、おきなが海の上に浮んで、そのさまは、大きな島がにわかひれに沖にいくつも出来たみたいで、これは、おきなひれの背中や鱗が少しずつ見えたのでして、全体の大きさは、とてもとても、そんなもんじやありやしねえ。はかり知る事が出来ねえのだ。このおきなは、小さなさかなには見むきもしねえで、もつぱら鯨ばかりたべて生きているのだそうひろでして、二十尋三十尋の鯨をたばにして呑み込んで、その有様は、鯨が鰭いわしを呑むみたいだすじってんだから凄すじいじやねえか。だから鯨は、海の底が鳴れば、さあ大変と東西に散って逃げますだ。おつかないさかなもあつたものさ。蝦夷えぞの海には昔から、こんな化物みたいなさかなが、いろいろあつただ。おさむらいの人魚の話だつて、おれたちは、ちつとも驚きやしねえ。それはきつと、この入海にいやがったに違いねえのだ。なんの不思議もねえ事だ。二里三里のおきなが泳ぎ廻つていた海だもの、な、いまにおれたちは、きつとその人魚の死骸を見つけて、おさむら

いの一分とやらを立てさせてあげますぞ。」と木訥ぼくとつの口調で懸命になぐさめ、金内の肩に積った粉雪を払ってやったりするのだが、金内は、そのように優しくされると尚さら心細くなり、ああ、自分もとうとうこんな老爺ろうやの慈悲を受けるようなはかない身の上の男になつたか、この老爺のいたわりの言葉の底には、何だかもう絶望してあきらめているような気配が感ぜられる、とひがみ心さえ起つて来て、荒々しく立ち上り、

「たのむ！ それがしは、たしかにこの入海で怪しい魚を射とめたのだ。弓矢八幡、誓言する。たのむ。なお一そう精出して、あの人魚の鱗一枚、髪一筋でも捜し当てておくれ。」
と言ひ捨て、積雪を蹴けつて汀みぎわまで走つて行き、そろそろ帰り支度をはじめている漁師たちの腕をつかんで、たのむ、もういちど、と眼つきをかえて歎たんがん願する。漁師たちは、お金をさきに受け取つてしまつているし、もういい加減に熱意を失いかけている。ほんの申しわけみたいに、岸ちかくの浅いところへ、ざぶりと網を打つたりなどして、そうして、一人二人、姿を消し、いつのまにか磯には犬ころ一匹もいなくなり、日が暮れてあたりが薄暗くなるといよいよ朔風さくふうが強く吹きつけ、眼をあいていられないくらいの猛吹雪になつても、金内は、鬼界きかいヶ島しまの流る人にん俊しゅん寛かんみみたいに浪打なみうち際ぎわを足ありしてうろつき廻り、夜がふけても村へは帰らず、寢床は、はじめから水際近くの舟小屋の中と定めていて、その

小屋の中で少しまどろんでは、また、夜の明けぬうちに、汀に飛び出し、流れ寄る藻屑もくずをそれかと驚喜し、すぐにがっかりして泣きべそをかいて、岸ちかくに漂う腐木を、もしやと疑いざぶざぶ海にはいつて行って、むなく引返し、ここへ来てから、ろくろくものも食わずに、ただ、人魚出て来い、出て来いと念じて、次第に心魂朦朧もうろうとして怪しくなり、自分は本当に人魚を見たのかしら、射とめたなんて嘘だろう、夢じゃないか、と無人の白は皚くがいがい々の磯に立つてひとり高笑いしてみたり、ああ、あの時、自分も船の相客たちと同様にたわいなく気を失い、人魚の姿を見なければよかった、なまなかに気魂が強くて、この世の不思議を眼前に見てしまったからこんな難儀に遭うのだ、何も見もせず知りもせず、そうしてもつともらしい顔でそれぞれ独り合点して暮している世の俗人たちがうらやましい、あるのだ、世の中にはあの人たちの思いも及ばぬ不思議な美しいものが、あるのだ、けれども、それを一目見たものは、たちまち自分のようにこんな地獄に落ちるのだ、自分には前世から、何か気味悪い宿業しゆくごうのようなものがあつたのかも知れない、このうえ生きて甲斐かひない命かも知れぬ、悲惨に死ぬより他ほかは無ない星の下に生れたのだろう、いつそここの荒磯に身を投じ、来世は人魚に生れ変つて、などと、うなだれて汀をふらつき、どうやら死神にとりつかれた様子で、けれども、やはり人魚の事は思い切れず、しらじらと明け

はなれて行く海を横目で見て、ああ、せめてあの老漁師の物語ったおきなとかいう大魚ならば、詮議せんぎもひどく容易なものなあ、と真顔でくやしがつて溜息ためいきをつき、あたたら勇士も、しどろもどろ、既に正気を失い命のほどもここ一兩日中ときえ見えた。

留守宅に於いては娘の八重、あけくれ神仏に祈つて、父の無事を願っていたが、三日経ち四日経ち、茶碗ちやわんはわれる、草履の鼻緒は切れる、少しの雪に庭の松の枝が折れる、縁起の悪い事ばかり続いて、とても家の中にじつとして居られなくなり、一夜こつそり武蔵の家をたずねて、父は鮭川の入海のほとりにいるという事を聞いて、その夜のうちに身支度をして召使いの鞠と二人、夜道の雪あかりをたよりに、父の後を追って発足した。或いは民家の軒下に休み、或いは海岸の岩穴に女の主従がひたと寄り添って浪の音を聞きつつ仮寝して、八重のゆたかな頬やも痩せ、つらい雪道をまたもはげまし合っていそいでも、女の足は、はかどらず、ようやく三日目の暮方、よろめいて鮭川の入海のほとりにたどり着いた時には、南無三寶なむさんぼう、父は荒蓆あらむしろの上にあさましい冷いからだを横たえていた。その日の朝、この金内の屍むくろが、入海の岸ちかくに漂っていたという。頭には海草が一ぱいへばりついて、かの金内が見たという人魚の姿に似ていたという。女の主従は左右より屍に取りつき、言葉も無くただ武者振りついて慟哭して、さすがの荒くれた漁師たちも興覚める

思いで眼をそむけた。母に先立たれ、いままた父に捨てられ、八重は人心地ひとこちも無く泣きに泣いて、やがて覚悟を極きめ、青い顔を挙げて一言、

「鞠、死のう。」

「はい。」

と答えて二人、しずかに立ち上った時、戛かつかつ々たる馬蹄ばていの響きが聞えて、

「待て、待てえ！」と野田武蔵のたのもしい畜声。

馬から降りて金内の屍に頭を垂れ、

「えい、つまらない事になった。ようし、こうなつたら、人魚の論もくそも無い。武蔵は怒った。本当に怒った。怒った時の武蔵には理窟りくつも何も無いのだ。道理にはずれていようが何であろうが、そんな事はかまわない。人魚なんて問題じやない。そんなものはあつたつて無くつたつて同じ事だ。いまはただ憎い奴やつを一刀両断に切り捨てるまでだ。こら、漁師、馬を貸せ。この二人の娘さんが乗るのだ。早く捜して来い！」と八つ当りに吠鳴どなり散らし、勢いあまつて、八重と鞠を、はつたと睨にらみ、

「その泣き顔が気に食わぬ。かたきのいるのが、わからんか。これからすぐ馬で城下に引返し、百右衛門の屋敷に躍り込み、首級しるしを挙げて、金内殿にお見せしないと武士の娘とは

言わせぬぞ。めそめそするな！」

「百右衛門殿というと、「召使いの鞠は、ひそかにうなずき進み出て、「あの青崎、百右衛門殿の事でしようか。」

「そうよ、あいつにきまつている。」

「思い当る事がございます。」と鞠は落ちつき、「かねてあの青崎百右衛門殿は、いいとしをしながらお嬢様に懸想して、うるさく縁組を申し入れ、お嬢様は、あのような驚鼻のお嫁になるくらいなら死んだほうがいいとおっしゃるし、それで、旦那様も、——」

「そうか、それで事情が、はつきりわかった。きやつめ、一生独身主義だの、女ぎらいだのと抜かしていながら、蔭では、なあんだ、振られた男じゃないか、だらしが無い。いよいよ見下げ果てたやつだ。かなわぬ恋の仕返しに金内殿をいじめるとは、憎さが余って笑止千万！」と早くも朗らかに凱歌を挙げた。

その夜、武蔵を先登に女ふたり長刀を持ち、百右衛門の屋敷に駆け込み、奥の座敷でお妾を相手に酒を飲んでいゝる百右衛門の瘦せた右腕を武蔵まず切り落とし、百右衛門すこしもひるまず左手で抜き合わすを鞠は踏み込んで両足を払えば百右衛門立膝になつてもさらに弱るところなく、八重をめがけて烈しく切りつけ、武蔵ひやりとして左の肩に切り

込めば、百右衛門たまらず仰向けに倒れたが、一向に死なず、蛇へびの如くごと身をくねらせて手し裏ゆりけん剣を鋭く八重に投げつけ、八重はひよいと身をかがめて危あやうく避けたが、そのあまりの執念深さに、思わず武蔵と顔を見合せたほどであった。

めでたく首級を挙げて、八重、鞠の兩人は父の眠っている鮭川の磯に急ぎ、武蔵はおのれの屋敷に引き上げて、このたびの刃傷の始しちゆうじゆう中終を事こまかに書き認め、殿の御許しも無く百右衛門を誅ちゆうした大罪を詫わび、この責すべてわれに在りと書き結び、あしたすぐ殿へこの書状を差上げよと家来に言いつけ、何のためらうところも無く見事に割腹して相果てたとはなかなか小気味よき武士である。女二人は、金内の屍に百右衛門の首級を手向け、ねんごろに父の葬とむらいをすませて、私宅へ帰り、門を閉じて殿の御裁きを待ち受け、女ながらも白無垢しろむくの衣服に着かえて切腹の覚悟、城中に於いては重役打寄り評議の結果、百右衛門こそ世にめずらしき悪人、武蔵すでに自決の上は、この私闘おかまいなしと定め、殿もそのまま許認し、女ふたりは、天晴あつぱれ父の仇かたきしゆう、主の仇を打ったけなげの者と、かえつて殿のおほめにあずかり、八重には、重役の伊村作右衛門末子作之助の入縁仰せつけられて中堂みょうせきの名跡をつがせ、召使いの鞠事は、歩行目付かちめつけの戸井市左衛門とて美男の若侍に嫁がせ、それより百日ほど過ぎて、北浦春日かすがみょうじん明神の磯より深夜城中に注進あり、不思議の

骨格が汀に打ち寄せられています、肉は腐って洗い去られ骨組だけでございますが、上半身はほとんど人間に近く、下半身は魚に違たがわず、いかにも無気味のものゆえ、取り敢あえず御急報申しあげますとの事、さっそく奉行をつかわし検分させたところが、その奇態の骨の肩先にまぎれもなく、中堂金内の誉ほまれの矢の根、八重の家にはその名の如く春かさなが重かさなつたという、此段この、信まずる力の勝利を説く。

(武道伝来記、卷二の四、命とらるる人魚の海)

破産

むかし美作みまさかの国に、蔵合ぞうごうという名の大長者があつて、広い屋敷には立派な蔵くらが九つも立ち並び、蔵の中の金銀、夜な夜な呻うめき出して四隣の国々にも隠れなく、美作の国の人たちは自分の金でも無いのに、蔵合のその大財産を自慢し、薄暗い居酒屋でわずかの濁酒にごりに酔よつては、

蔵合さまには及びもないが、せめて成りたや万屋よろずやに、

という卑屈うたの唄うたをあわれなふしで口ずさんで淋さびしそうに笑い合うのである。この唄に出て来る万屋というのは、美作の国で蔵合につづく大金持、当主一代のうちに溜ため込んだ金銀、何万両、何千貫とも見当つかず、しかも蔵合の如ごとく堂々たる城郭を構える事なく、近隣の左官屋、炭屋、紙屋の家と少しも変らず軒の低い古ぼけた住居で、あるじは毎朝早く家の前の道路を掃除して馬糞ばふんや紐ひもや板切れを拾い集めてむだには捨てず、世には何染なにぞめ、何縞なにしまがはやろうと着物は無地の手織木綿一つと定め、元日にも賀入むこいりの時に仕立てた麻袴あさばかまを五十年このかた着用して礼廻れいまわりに歩き、夏にはふんどし一つの姿で浴衣ゆかたを大事

そうに首に巻いて近所へもらい風呂ぶろに出かけ、初生はつなりの茄子なす一つは三文、二つは三文と近在の百姓が売りに来れば、初物はつもの食つて七十五日の永生きと皆々三文出して二つ買うのを、あるじの分別はさすがに非凡で、二文を出して一つ買い、これを食べて七十五日の永生きを願つて、あとの一文にて、茄子の出盛りを待ちもつと大きいのをたくさん買ひましようという抜け目のない算用、金銀は殖えるばかりで、まさに、それこそ「暗闇くらやみに鬼」の如き根強き身代しんだい、きらいなものは酒色の二つ、「下戸げこならぬこそ」とか「色好まざらむ男は」とか書き残した法師を憎む事しきりにて、おのれ、いま生きていたら、訴訟をしても、ただは置かぬ、と十三歳の息子の読みかけの徒然草つれづれぐさを取り上げてばりばり破り、捨てずに紙の皺しわをのぼして細長く切り、紙小縫かみこよりを作つて五十組の羽織紐を素早く器用に編んで引出しに仕舞い、これは一家の者以後十年間の普段の羽織紐、息子の名は吉太郎というが、かねてその色白くなよなよしたからだつきが気に入らず、十四歳の時、やわらかい鼻紙ふしころを懐ふところに入れていたのを見て、末の見込み無しと即座かんとうに勘当かんとうを言い渡し、播州ばんしゅうには那波屋なば殿やという儉約の大長者がいるから、よそながらそれを見ならつて性根をかえよ、と一滴の涙もなく憎々しく言い切つて、播州の網干あほしというところにいるその子の乳母の家に追いや遣り、その後、あるじの妹の一子を家にいれて二十五、六まで手代てだい同様にしてこき使い、

ひそかにその働き振りを見るに、その仕末のよろしき事、すりきれた草履ぞうりの藁わらは、畑のこ
 やしになるとて手許てもとにたくわえ、ついでの人ひとにたのんで田舎の親元へ送つてやる程の珍めづら
 しい心掛こゝろがけの若者であつたから、大いに氣にいり、これを養子にして家を渡し、さて、嫁
 はどんなのがいいかと聞かれて、その養子の答えるには、嫁をもらつても、私だとして木ぼくせ
 石いしではなし、三十四十になつてからふつと浮氣うわきをするかも知れない、いや、人間その方
 面の事はわからぬものです、その時、女にようぼう房ぼうが亭ていしゆ主しゆに氣弱きじやくく負おけていたら、この道楽
 はやめがたい、私はそんな時の用心よこしまに、氣違あやまちいみたいなやきもち焼やきの女房にようぼうをもらつて置
 きたい、亭主ていしゆが浮氣うわきをしたら出刃でば庖丁ぼうちようでも振りまわすくらいくらいの悋氣りんきの強つよい女房にようぼうならば、
 私の生しょうがい涯がいも安全あんぜん、この万屋まんやの財産ざいぜんも万歳ばんざいだろうと思おもいます、という事ことだったので、あ
 るじは膝ひざを打ち眼めを細こくして喜よろこび、早速さつそく四方しやうほうに手をまわして、その父親ちちが九十こじゅうの祖母そぼとす
 こし長話ながわをして、いやらし、やめよ、と顔色かほいろを変かえ眼めを吊つり上げ立たちはだかつてわめき
 散ちらすという願ねがつたり叶かなつたりつたりの十六じゅうろくのへんな娘むすめを見みつけて、これを養子やしよの嫁よめに迎むかえ、自
 分自分ら夫婦ふうふは隠居いんきよして、家の金銀きんぎんのこらず養子やしよに心置こころをきなくゆずり渡わたした。この養子やしよ、世よに
 珍めづらしく仕末しまつの生れつきながら、量りやうり知しられぬおびただしき金銀きんぎんをにわかにながものにし
 て、さすがに上氣あがし、四十しじゅうはおろか三十さんじゅうにもならぬうちに、つき合あいと称なづして少し茶屋酒ちやえしよ

をたしなみ、がらにもなく髪を撫なでつけ、足袋、草履など吟味しはじめたので、女房たち
まち顔色を変え眼を吊り上げ、向う三軒両隣りの家の障子が破れるほどの大声を挙げ、

「あれあれ、いやらし。男のくせに、そんなちぢれ髪に油なんか附つけて、鏡を覗のぞき込んで、
きゅつと口をひきしめたり、につこり笑ったり、いやいやをして見たり、馬鹿ばかげたひとり
芝居をして、いったいそれは何の稽古けいこのつもりです、どだいあなたは正気ですか、わかっ
ていますよ、あさましい。あたしの田舎の父は、男というものは野良姿のらすがたのまま、手足
の爪つめの先には泥どろをつめて、眼脂めやにも拭ふかず肥桶こえおけをかついでお茶屋へ遊びに行くのが自慢だ、
それが出来ない男は、みんな茶屋女の男めかけになりたくて行くやつだ、とおっしゃって
いたわよ、そんなちぢれ髪を撫なでつけて、あなたはそれで茶屋の婆芸者の男めかけにでも
なる気なのでしょう、わかっていますよ、けちんぼのあなたの事ですから、なるべくお金
を使わず、婆芸者にでも泣きついて男めかけにしてもらって、あわよくば向うからお小遣
いをせしめてやろうという、いいえ、わかっていますよ、くやしかったら肥桶をかついで
お出掛けなさい、出来ないでしょう、なんだいそんな裏だか表だかわからないような顔を
して、鏡をのぞき込んでにつこり笑ったりして、ああ、きたない、そんな事をするひまが
あったら鼻毛でも剪つんだらどう？ 伸びていますよ、くやしかったら肥桶をかついで、」

とうるさい事、うるさい事。かねて、こんな時にこそ焼きもちを焼いてもらうために望んでめとった女房ではあったが、さて、実際こんな工合ぐあいに騒さわがしく悋とん気を起されてみると、あまりいい気持のものでない。養父母の氣にいられようと思つて、悋とん氣の強い女房こそ所望でございます、などと分別顔して言い出したばかりに、これは、とんでもない事になつた、と今はひそかに後悔した。ぶん殴つてやろうかとも思うのだが、隠居座敷の老夫婦は、嫁の悋とん氣がはじまるともう嬉うれしくてたまらないらしく、老夫婦とも母屋おもやまで這はい出して来て、うふふと笑いながら、まあまあ、などといい加減な仲裁をして、そうして惚ほれ惚ほれと嫁の顔を眺ながめる仕末なので、ぶん殴るわけにもいかず、さりとして、肥桶をかついで遊びに出掛けるのも馬鹿々々しく思われ、腹いせに銭湯に出かけて、眼まいがするほど永く湯槽ゆづねにひたつて、よろめいて出て、世の中にお湯銭くらい安いものはない、今夜あそびに出掛けたら、どうしたつて一両失う、お湯に酔うのも茶屋酒に酔うのも結局は同じ事さ、とわけのわからぬ負け惜しみの屁理窟へりくつをつけて瘦我慢やせがまんの胸をさすり、家へ歸つて一合の晩ばんし酌やくを女房の顔を見ないようにしてうつむいて飲み、どうにも面白くないので、やけくそに大めしをくらつて、ごろりと寝ころび、出入りの植木屋の太吉爺たきちいを呼んで、美作の国の七不思議を語らせ、それはもう五十ぺんも聞いているので、腕まくらしてきよるきよ

ろと天井板を眺めて別の事を考え、不意に思いついたように小間使いを呼んで足をもませ、女房の顔を見ると、むらむらつとして来て、おい、茶を持って来い、とつつけんどんに言いつけ、女房に茶碗をささげ持たせたまま、自分はやはり寝ながら頭を少しもたげ、手も出さずにごくごく飲んで、熱い、とごとを言い、八つ当りしても、大將が夜遊びさえしなければ家の中は丸くおさまり、隠居はくすくす笑いながら宵から楽寝、召使いの者たちも、將軍内にいらつしやるとて緊張して、ちよつと叔母のところへと怪しい外出をする丁稚もなく、裏の井戸端で誰を待つやらうろする女中もない。番頭は帳場で神妙を装い、やたらに大福帳をめぐつて意味も無く算盤をばちばちやって、はじめは出鱈目でも、そのうちに少しの不審を見つけ、本気になつて勘定をし直し、長松は傍に行儀よく坐つてあくびを噛み殺しながら反古紙の皺をのぼし、手習帳をつくつて、どうにも眠くてかなわなくなれば、急ぎ読本を取出し、奥に聞えよがしの大声で、徳は孤ならず必ず隣あり、と読み上げ、下男の九助は、破れた菰をほどいて銭差を緬えば、下女のお竹は、いまのうち朝のおみおつけの実でも、と重い尻をよいしょとあげ、穴倉へはいつて青菜を捜し、お針のお六は行燈の陰で背中を丸くしてほどこきものに余念がなさそうな振りをしていて、猫さえ油断なく眼を光らせ、台所にかたりと幽かな音がしても、にやあと鳴き、いよいよ

財産は殖えるばかりで、この家安泰無事長久の有様ではあつたが、若大将ひとり怏々として樂しまず、女房の毎夜の寢物語は味噌漬がどうしたの塩鮭の骨がどうしたのと呆れるほど興覚めな事だけで、せつかくお金が唸るほどありながら愀気の女房をもらったばかりに眼まいするほど長湯して、そうして味噌漬の話や塩鮭の話を拝聴していなければならぬ、おのれ、いまに隠居が死んだら、とけしからぬ事を考え、うわべは何気なさそうに立ち働き、内心ひそかによろしき時機をねらつていた。やがて隠居夫婦も寄る年波、紙小縫の羽織紐がまだ六本引出しの中に残つてあると言ひ遺して老父まず往生すれば、老母はその引出しに羽織紐が四本しか無いのを氣に病み、これも程なく後を追ひ、もはやこの家に氣兼ねの者は無く、名実共に若大将の天下、まず愀気の女房を連れて伊勢参宮、ついでに京大阪を廻り、都のしやれた風俗を見せ、野暮な女房を持ったばかりに亭主は人殺しをして牢へはいるという筋の芝居を見せて、女房の愀氣のつつしむべき所以を無言の裡に教訓し、都のはやりの派手な着物や帯をどつさり買つてやつたら女房は、女心のあさましく、国へ歸つてからも都の人に負けじと美しく装い茶の湯、活花など神妙らしく稽古して、寢物語に米味噌の事を言ひ出すのは野暮とたしなみ、肥桶をかついで茶屋遊びする人は無いものだという事もわかり、殊にも愀氣はあさましいものと深く恥じ、

「あたしだって、愷氣をいい事だとは思っていなかったのですけれど、お父さんやお母さんがお喜びになるので、ついあんな大声を挙げてわるかったわね。」と言葉までさばけた口調になって、「浮気は男の働きと言いますものねえ。」

「そうとも、そうとも。」男はここぞと強く相槌あいつちを打ち、「それについて、」ともつともらしい顔つきになり、「このごろ、どうも、養父養母が続いて死に、わしも、何だか心細くて、からだ工合いが変になった。俗に三十は男の厄年やくどしというからね、」そんな厄年は無い。「ひとつ、上方かみがたへのぼつて、ゆつくり気保養でもして来ようと思うよ。」とんでもない「それについて」である。

「あいあい、」と女房は春風しゅんぷう駘蕩たいとうたる面持おももちで、「一年でも二年でも、ゆつくり御養生しておいでなさい。まだお若いのですものねえ。いまから分別顔して、けちくさく暮らしていたら、永生き出来ませんよ。男のかたは、五十くらいから、けちになるといいのですよ。三十のけちんぼうは、早すぎます。見つともないわ。そんなのは、芝居では悪役ですよ。若い時には思い切り派手に遊んだほうがいいの。あたしも遊ぶつもりよ。かまわないでしょう?」と過激な事まで口走る。

亭主はいよいよ浮かれて、

「いいとも、いいとも。わしたちが、いくら遊んだって、ぐらつく財産じゃない。蔵の金銀にも、すこし日のめを見せてやらなくちや可哀想だ。それでは、お言葉に甘えて一年ばかり、京大阪で気保養をして来ますからね。留守中は、せいぜい朝寝でもして、おいしいものを食べていなさい。上方のはやりの着物や帯を、どんどん送ってよこしますからね。」といやに優しい言葉遣いをして腹に一物、あたふたと上方へのぼる。

留守中は女房、昼頃起きて近所のおかみたちを集めてわいわい騒ぎ、ごちそうを山ほど振舞っておかみたちの見え透いたお世辞に酔い、毎日着物を下着から全部取かえて着て、立ってくにやりとからだを曲げて一座の称讃を浴びれば、番頭はどさくさまぎれに、おのれの妻子の宅にせつせと主人の金を持ち運び、長松は朝から晩まで台所をうろつき、戸棚とだなに首を突込んでつまみ食い、九助は納屋なやにとじこもって濁酒を飲んで眼をどろんどきさせて何やらお念仏に似た唄を口ずさみ、お竹は、鏡に向つて両肌もろはだを脱ぎ角力取りすもうとが狐きつね拳けんでもしているような恰好かっこうでやつさもつさおしろいをぬたくつて、化物のようになり、われとわが顔にあいそをつかしてめそめそ泣き出し、お針のお六は、奥方の古着を自分の行李こうりにつめ込んで、ぎよろりとあたりを見廻し、きせるを取り出して煙草たばこを吸い、立膝たてひざになつてぶつと鼻から強く二本の煙を噴出させ、懐手ふところして裏口から出て、それつきり

夜おそくまで帰らず、猫は鼠を取る事をたいぎがつて、寝たまま炉傍に糞をたれ、家は蜘蛛の巣だらけ庭は草蓬々、以前の秩序は見る影も無くこわされて、旦那はまた、上方に於いて、はじめは田舎者らしくおつかなびつくり茶屋にあがつて、けちくさい遊びをたのしんでいたが、お世辞を言うために生れて来た茶屋の者たちに取りまかれて、ほんに旦那のようなお客ばかりだと私たちの商売ほど楽なものございませぬ、男振りがようて若うて静かで優しくて思やりがあつて上品で、口数が少くて鷹揚で喧嘩が強そうでしたのもしくてお召物が粋で、何でもよくお氣がついて、はたらきがありそうで、その上、おほほほ、お金があつてあつさりして、と残りくまなくほめられて流石に思慮分別を失い、天下のお大金とは私の事かも知れないと思ひ込み、次第に大胆になつて豪遊を試み、金というものは使うためにあるものだ、使つてしまえ、と観念して、ばらりばらりと金を投げ捨て、さらにまた国元から莫大の金銀を取寄せ、こうなると遊びは気保養にも何もならず、都の粋客に負けたくないという苦しい意地だけになつて、眼つきは変り、顔も青く瘦せて、いたたまらぬ思いで、ただ金を使い、一年経たぬうちに、底知れぬ財力も枯渇して、国元からの使いが、もはやこれだけと旦那の耳元に囁けば、旦那は愕然として、まだ百分の一も使わぬ筈だが、あああ、小判には羽が生えているのか、無くなる時には早いものだ、

ようし、これからが、わしの働きの見せどころだ、養父からゆずられた財産で威張っているなんて卑怯ひきような事だ、男はやつぱり裸一貫からたき上げなければいけないものだ、無くなつてかえつて気がせいせいしたわい、などと負け惜しみを言つて、空虚な笑声を発し、さあ今晚は飲みおさめと異様にはしゃいで見せたが、廓くわくわの者たちは不人情、しんとなつて、そのうちに一人立ち二人立ち、座敷の蟬燭せむそくを消して行く者もあり、あたりが急に暗くなつて心細くなり、酒だ酒だ、と叫んで手をたたいても誰も来ず、やがて婆が廊下に立つたまま、きようはお役人のお見廻りの日ですからお静かに、と他人にものを言うようなあらたまつた口調で言い、旦那は呆あきれて、さすがは都だ、薄情すぎて、むしろ小気味がいい、見事だ、と婆をほめて立ち上り、もとよりこの男もただものでない、あの万屋よろずやのけちな大旦那に見込まれたほどの男である、なあに、金なんてものは、その気にさえなれあ、いくらでも、もうけられるものだ、これから国元へ帰つて身を粉こにして働き以前にまさる大財産をこしらえ、再び都へ来て、きようの不人情のあだを打つて見せる、婆、その時まで死なずに待つて居おれ、と心の内で棄台詞すてげりふを残して、足音荒く馴染なじみの茶屋から引上げた。

男は国へ掃つてまず番頭を呼び、お金がもうこの家に無いというけれども、それは間違まちがい、必ずそのような軽はずみの事を言つてはならぬ、暗闇くらやみに鬼と言われた万屋の財産が、

一年か二年でぐらつく事はない、お前は何も知らぬ、きょうから、わしが帳場に坐る、まあ、見ているがよい、と言つて、ただちに店のつくりを改造して両替屋を営み、何もかも自分ひとり夜も眠らず奔走すれば、さすがに万屋の信用は世間に重く、いまは一文無しとも知らず安心してここに金銀をあずける者が多く、あずかった金銀は右から左へ流用して、四方八方に手をまわし、内証を見すかされる事なく次第に大きい取引きをはじめて、三年後には、表むきだけではあるがとにかく、むかしの万屋の身代と変らぬくらい勢いを取りもどし、来年こそは上方へのぼつて、あの不人情の廓の者たちを思うさま恥ずかして無念をはらしてやりたいといさみ立つて、その年の暮、取引きの支払いを首尾よく全部すませて、あとには一文の金も残らぬが、ここがかしい商人の腕さ、商人は表向きの信用が第一、右から左と埒らちをあけて、内蔵はからつぽでも、この年の瀬さえしつぽを出さずに、やりくりをすませば、また来年から金銀のあずけ入れが呼ばなくともさきを争つて殺到します、長者とはこんなやりくりの上手な男の事です、と女房と番頭を前にして得意満面で言つて、正月の飾り物を一つ三文で売りに来れば、そんな安い飾り物は小店に売りに行くものだよ、家を間違つたか、と大笑いして追い帰して、三文はおろか、わが家は現金一文も無いのをいまさらの如く思い知つて内心ぞつとして、早く除夜の鐘が、と待

つ間ほどなく、ごうん、と除夜の鐘、万金の重みで鳴り響き、思わずにつこりえびす顔になり、さあ、これでよし、女房、来年はまた上方へ連れて行くぞ、この二、三年、お前にも肩身の狭い思いをさせたが、どうだい、男の働きを見たか、惚ほれ直せ、下戸げこの建てたる蔵は無いと唄にもあるが、ま、心祝いに一ぱいやろうか、と除夜の鐘を聞きながら、ほつとして女房に酒の支度を言いつけた時、

「ごめん。」と門に人の声。

眼のするどい痩せこけた浪人が、ずかずかはいって来て、あるじに向い、

「さいぜん、そなたの店から受け取ったお金の中に一粒、贗にせの銀貨がまじっていた。取かえていただきたい。」と小粒銀一つ投げ出す。

「は。」と言つて立ち上つたが、銀一粒どころか、一文だって無い。「それはどうも相すみませんでした、もう店をしまいましたから、来年にしていただけませんか。」と明るく微笑ほほえんで何気なさそうに言う。

「いや、待つ事は出来ぬ。まだ除夜の鐘のさいちゆうだ。拙者も、この金でことしの支払いをしなければならぬ。借金取りが表に待っている。」

「困りましたなあ。もう店をしまつて、お金はみな蔵の中に。」

「ふざけるな！」と浪人は大声を挙げて、「百兩千兩のかねではない。たかが銀一粒だ。これほどの家で、手許てもとに銀一粒の替かえが無いなど冗談を言つてはいけない。おや、その顔つきは、どうした。無いのか。本当に無いのか。何も無いのか。」と近隣に響きわたるほどの高声でわめけば、店の表に待っている借金取りは、はてな？　といぶかり、両隣りの左官屋、炭屋も、耳をすまし、悪事千里、たちまち人々の囁きは四方にひろがり、人の運不運は知れぬもの、除夜の鐘を聞きながら身代あらわれ、せつかくの三年の苦心も水の泡あわ、さすがの智者も矢弾やだまつづかず、わずか銀一粒で大長者の万屋ぐわらりと破産。

（日本永代蔵、巻五の五、三匁五分曙あけぼののかね）

裸川

鎌倉山かまくらやまの秋の夕ぐれをいそぎ、青砥左衛門尉藤綱あおとさえもん、駒をあゆませて滑川なめりがわを渡り、川の真中に於いて、いささか用の事ありて腰の火打袋を取出し、袋の口をあけた途端に袋の中の錢もん十文ばかり、ちやぼりと川浪かわなみにこぼれ落ちた。青砥、はつと顔色を変え、駒をとどめて猫背ねこせになり、川底までも射透さんと稲妻いなずまの如く眼こめを光らせて川の面ぎようを凝視ししたが、潺湲せんかんたる清流は夕陽ゆうひを受けて照りかがやき、瞬時しんじも休むことなく動き騒さわぎ躍り、とても川底まで見透す事は出来なかつた。青砥左衛門尉藤綱は、馬上に於いて身悶みもだえした。川を渡る時には、いかなる用があるうとも火打袋の口をあけてはならぬと子々孫々に伝えて家憲あきちにしようと思つた。どうにも諦め切れぬのである。いったい、何文落したのだろう。けさ家を出る時に、いつものとおり小錢四十文、二度くりかえして数えてたしかめ、この火打袋に入れて、それから役所で三文使つた。それゆえ、いまこの火打袋には三十七文残つていなければならぬ筈はずだが、こぼれ落ちたのは十文くらいであろうか。とにかく、火打袋の中の残金を調べてみるとわかるのだが、川の真中で錢の勘定は禁物である。

向う岸に渡つてから、調べてみる事にしよう。青砥は惨めにしよげかえり、深い溜息をつき、うなだれて駒をすすめた。岸に着いて馬より降り、河原の上に大あぐらをかき、火打袋の口を明けて、ざらざらと残金を膝の間にぶちまけ、背中を丸くして、ひいふうみいと小声で言つて数えはじめた。二十六文残つていた。うむ、さすれば川へ落したのは、十一文にきわまつた、惜しい、いかにも、惜しい、十一文といえども国土の重宝、もしもこのまま捨て置かば、かの十一文はいたずらに川底に朽ちるばかりだ、もつたいなし、おそれるべし、とてもこのままここを立ち去るわけにはいかぬいかぬ、たとえ地を裂き、地軸を破り、竜宮までも是非にたずねて取返さん、とひどい決意を固めてしまった。

けれども青砥は、決して卑しい守銭奴ではない。質素儉約、清廉潔白の官吏である。いちじゅう 一菜、しかも、日に三度などは食べない。一日に一度たべるだけである。それでもからだは丈夫である。衣服は着たきりの一枚。着物のよごれが見えぬように、濃茶の色に染めさせている。真黒い着物は、かえつて、よごれが目立つものださうである。濃茶の色の、何だかひどく厚ぼつたい布地の着物だ。一生その着物いちまいで過した。刀の鞘には漆を塗らぬ。墨をまだらに塗つてある。主人の北条時頼も、見るに見かねて、

「おい、青砥。少し給料をましてやろうか。お前の給料をもっとよくするようにと夢のお

告げがありました。」と言つたら、青砥はふくれて、

「夢のお告げなんて、あてになるものじゃありません。そのうちに、藤綱の首を斬れというお告げがあつたら、あなたはどうします。きつと私を斬る気でしよう。」と妙な理窟を言つて、加俸を断つた。慾の無い人である。給料があまつたら、それを近所の貧乏な人たちに全部わけてやつてしまふ。だから近所の貧乏人たちは、なまけてばかりいて、鯛の塩焼などを食べているくらいであつた。決して吝嗇な人ではないのである。国のために質素儉約を率先躬行していたわけなのである。主人の時頼というひとまた、その母の松下禅尼から障子の切り張りを教えられて育つただけの事はあつて、酒のさかなは味噌ときめているほど、なかなか、しまつのいいひとであつたから、この主従二人は気が合つた。そもそもこの青砥左衛門尉藤綱を抜擢して引付衆にしてやつたのは、時頼である。青砥が浪々の身で、牛を吠鳴り、その逸事が時頼の耳にはいり、それは面白い男だという事になつて引付衆にぬきんでられたのである。すなわち、川の中で小便をしている牛を見て青砥は怒り、

「さてさて、たわけた牛ではある。川に小便をするとは、もつたない。むだである。畑にしたなら、よい肥料になるものを。」と地団駄踏んで叫喚したという。

真面目まじめな人なのである。銭十一文を川に落して竜宮までもと力むのも、無理のない事である。残りの二十六文を火打袋におさめて袋の口の紐ひもを固く結び、立ち上つて、里人をまねき、懐中より別の財布を取出し、三両出しかけて一兩ひっこめ、少し考えて、うむと首う肯なすき、またその一両を出して、やつぱり三両を里人に手渡し、この金で、早く人足十人ばかりをかり集めて来るように言いつけ、自分は河原に馬をつなぎ、悠然ゆうぜんと威儀をとりつくろつて大きな岩に腰をおろした。すでに薄暮である。明日にのばしたらどういうものか。けれども、それは出来ない事だ。捜査を明日にのばしたならば、今夜のうちにもあの十一文は川の水に押し流され、所在不分明となつて国土の重宝を永遠に失うというおそろしい結果になるかも知れぬ。銭十一文のちりぢりにならぬうち、一刻も早く拾い集めなければならぬ。夜を徹したつてかまわぬ。暗い河原にひとり坐すわつて、青砥は身じろぎもしなかつた。

やがて集つて来た人足どもに青砥は下知して、まず河原に火を焚たかせ、それから人足ひとりひとりに松明たいまつを持たせ冷たい水にはいらせて銭十一文の捜査をはじめさせた。松明の光に映えて秋の流れは夜の錦にしきと見え、人の足手は、しがらみとなつて瀬々を立ち切るといふ壯観であつた。それ、そこだ、いや、もつと右、いや、いや、もつと左、つつこめ、

などと声をからして青砥は下知するものの、暗さは暗し、落した場所もどこであったか青砥自身にさえ心細い有様で、たとえ地を裂き、地軸を破り、竜宮までもと青砥ひとりはずりしてあせつていても、人足たちの指先には一文の銭も当らず、川風寒く皮膚を刺して、人足すべて凍え死(こい)なんばかりに苦しみ、ようようあちこちから不平の呖(つぶや)き声(こゑ)が起つて来た。何の因果で、このような難儀に遭うか、と水底をさぐりながら、めそめそ泣き出す人足まで出て来たのである。

この時、人足の中に浅田小五郎という三十四、五歳のばくち打がいた。人間、三十四、五の頃(ころ)は最も自惚(うぬぼ)れの強いものだそうであるが、それでなくともこの浅田は、氏育ち少しくまされるを鼻にかけ、いまは落ちぶれて人足仲間にはいつていても、傲岸不遜(ごうがんふそん)にして長上をあなどり、仕事をなまけ、いささかの奇智(きち)を弄(ろう)して悪銭を得ては、若年の者どもに酒をふるまい、兄貴は気前がよいと言われて、そうでもないが、と答えてまんざらでもないような大馬鹿(ばか)者のひとりであった。かれはこの時、人足たちと共に片手に松明を持ち片手で川底をさぐっているような恰好(かっこう)だけはしていたが、もとより本気に捜すつもりはない。いい加減につき合つて手間賃の分配にあずかろうとしていただけであったのだが、青砥は岸に焚火(たきび)して赤鬼(あかおに)の如く顔をほてらし、眼(め)をむいて人足どもを監視し、それ左、それ

右、とわめき散らすので、どうにも、うるさくてかなわない。ちえ、けちな野郎だ、十一文がそんなに惜しいかよ、血相かえて騒いでいやがる、貧乏役人は、これだからいやだ、銭がそんなに欲しかったら、こつちからくれてやらあ、なんだい、たかが十文か十一文、とむらむら、れいの気前のよいところを見せびらかしたくなつて来て、自分の腹掛けから三文ばかりつかみ出し、

「あつた！」と叫んだ。

「なに、あつた？ 銭はあつたか。」岸では青砥が浅田の叫びを聞いて狂喜し、「銭はあつたか。たしかに、あつたか。」と背伸びしてくどく尋ねた。

浅田は、ばかばかしい思いで、

「へえ、ございました。三文ございました。おとどけ致します。」と言つて岸に向つて歩きかけたら、青砥は声をはげまし、

「動くな、動くな。その場を捜せ。たしかにそこだ。私はその場に落したのだ。いま思ひ出した。たしかにそこだ。さらに八文ある筈だ。落したものは、落した場所にあるにきまつている。それ！ 皆の者、銭は三文見つかつたぞ。さらに精出して、そこな下郎げろうの周囲を捜せ。」とたいへんな騒ぎ方である。

人足たちはぞろぞろと浅田の身のまわりに集り、

「兄貴はやつぱり勘がいいな。何か、秘伝でもあるのかね。教えてくれよ。おれはもう凍えて死にそうだ。どうしたら、そんなにうまく捜し出せるのか。」と口々に尋ねた。

浅田はもつともらしい顔をして、

「なあに、秘伝というほどの事でもないが、問題は足の指だよ。」

「足の指？」

「そうさ。おまえたちは、手でさぐるからいけない。おれのように、ほうら、こんな工合に足の指先でさぐると見つかる。」と言いながら妙な腰つきで川底の砂利を踏みにしり、

皆がその足元を見つめているすきを狙つてまたも自分の腹掛けから二文ばかり取り出して、

「おや？」と呟き、その銭を握つた片手を水中に入れて、

「あつた！」と叫んだ。

「なに、あつたか。」と打てば響く青砥の蛮声。「銭は、あつたか。」

「へえ、ございました。二文ばかり。」と浅田は片手を高く挙げて答えた。

「動くな。動くな。その場を捜せ。それ！ 皆の者、そこな下郎は殊勝であるぞ。負けず劣らず、はげめ、つつこめ。」と体を震わせて更にはげしく下知するのである。

人足たちは皆一様に、妙な腰つきをして、川底の砂利を踏みにじった。しゃがまなくてもいいのだから、ひどくからだが楽である。皆は大喜びで松明片手に舞いをはじめた。岸の青砥は、げせぬ顔をして、ふざけてはいかぬと叱つたが、そのような恰好をすれば銭が見つかるという返事だったので、浮かぬ気持で、その舞いを眺めているより他は無かつた。やがて浅田は、さらに三文、一文と皆の眼をごまかして、腹掛けから取り出しては、

「あつた！」

「やあ、あつた！」

と真顔で叫んで、とうとう十一文、自分ひとりで拾い集めた振りをした。

岸の青砥は喜ぶ事がぎりなく、浅田から受け取った十一文を三度も勘定し直して、うむ、たしかに十一文、と深く首肯き、火打袋にちやりんとおさめて、にやりと笑い、

「さて、浅田とやら、このたびの働きは、見事であつたのう。そちのお蔭で国土の重宝はよみがえつた。さらに一両の褒美をとらせる。川に落ちた銭は、いたずらに朽ちるばかりであるが、人の手から手へ渡つた金は、いつまでも生きて世にとどまりて人のまわり持ち。」としんみり言つて、一両の褒美をつかわし、ひらりと馬に乗り、憂々と立ち去つたが、人足たちは後を見送り、馬鹿な人だと言つた。智慧の浅瀬を渡る下々の心には、青砥

の深慮が解しかね、一文惜しみの百知らず、と笑いののしつたとは、いつの世も小人はあさましく、救い難いものである。

とにかくに、手間賃の三両、思いがけないもうけなれば、今宵は一つこれから酒でも飲んで陽気に騒ごうではないかと、下人の意地汚なき、青砥が儉約のいましめも忘れて、いさみ立ち、浅田はれいの気前のよいところを見せて褒美の一両をあっさりとは皆に寄附したので一同いよいよのぼせ上り、生れてはじめての贅沢な大宴会をひらいた。

浅田は何といつても一座の花形である。兄貴のおかげで今宵の極楽、と言われて浅田、よせばよいのに、

「さればさ、あの青砥はとんだ間抜けだ。おれの腹掛けから取り出した錢とも知らないで。」と口をまげてせせら笑った。一座あつと驚き、膝を打ち、さすがは兄貴の発明おそれいった、世が世ならお前は青砥の上にも立つべき器量人だ、とあさはかなお世辞を言い、酒宴は一そう派手に物狂わしくなつて行くばかりであつたが、真面目な人はどこにでもいる。突如、宴席の片隅から、浅田の馬鹿野郎！ という怒号が起つた。小さい男が顔を蒼くして浅田をにらみ、

「さいぜん汝の青砥をだました自慢話を聞き、胸くそが悪くなり、酒を飲む気もしなくな

つた。浅田、お前はひどい男だ。つねから、お前の伶俐りこうぶつた馬面うまつらが癩しやくにさわつていたのだが、これほど、ふざけた奴やつとは知らなかった。程度があるぞ、馬鹿野郎。青砥のせつかくの高潔な志も、お前の無智な小細工で、泥棒どろぼうに追銭おしぜんみたいなばからしい事になつてしまった。人をたぶらかすのは、泥棒よりもなお悪い事だ。恥かしくないか。天命のほどもおそろしい。世の中を、そんなになめると、いまにとんでもない事になるにきまつているのだ。おれはもう、お前たちとの附合つきあいはごめんこうむる。きょうよりのちは赤の他人と思つていただきたい。おれは、これから親孝行をするんだ。笑つちやいけねえ。おれは、こんな世の中のあさましい実相を見ると、なぜだか、ふつと親孝行をしたくなつて来るのだ。これまでも、ちよいちよいそんな事はあつたが、もうもう、きょうというきょうは、あいそが尽きた。さつぱりと足を洗つて、親孝行をするんだ。人間は、親に孝行しなければ、犬畜生と同じわけのものになるんだ。笑つちやいけねえ。父上、母上、きょうまでの不孝の罪はゆるして下さい。「などと、議論は意外のところまで発展して、そうしてその小男は声を放つて泣いて、泣きながら家へ帰り、翌あくる朝は未明に起き柴刈しばり縄なわない草鞋わらじを作り両親の手助けをして、あつぱれ孝子の誉ほまれを得て、時頼公に召出され、めでたく家運隆昌に向つたという、これは後の話。

さて、浅田の狡智こつちにだまされた青砥左衛門尉藤綱は、その夜たいへんの御機嫌ごぎげんで帰宅し、女房子供を一室に集めて、きようこの父が滑川を渡りし時、火打袋をあけた途端に銭十一文を川に落し、国土の重宝永遠に川底に朽ちなん事の口惜しさに、人足どもを集めて手間賃三両を与え、地獄の底までも捜せよと下知したところが、ひとりの発明らしき顔をした人足が、足の指先を以て川底をさぐり、たちまち銭十一文のこらず捜し出し、この者には特に一両の褒美をとらせた、たった十一文の銭を捜すために四両の金を使ったこの父の心底がわかるか、と莞爾かんじと笑い一座を見渡した。一座の者はもじもじして、ただあいまいに首肯した。

「わかるであろう。」と青砥は得意満面、「川底に朽ちたる銭は国のまる損。人の手に渡りし金は、世のまわり持ち。」とさつき河原で人足どもに言い聞かせた教訓を、再びいい気持で繰り返して説いた。

「お父さま、」と俐発りはつそうな八つの娘が、眼をばちくりさせて尋ねた。「落したお金が十一文だという事がどうしてわかりました。」

「おお、その事か。お律は、ませた子だの。よい事をたずねる。父は毎朝小銭を四十文ずつ火打袋にいれてお役所に行くのです。きようはお役所で三文使い、火打袋には三十七文

残つていなければならぬ筈のところ、二十六文しか残つていませんでしたから、それ、落したのは、いくらになるであろうか。」

「でも、お父さまは、けさ、お役所へいらつしやる途中、お寺の前であたしと逢い、非人に施せといつて二文あたしに下さいました。」

「うん、そうであつた。忘れていた。」

青砥は愕然がくぜんとした。落した銭は九文でなければならぬ筈であつた。九文落して、十一文川底から出て来るとは、奇怪である。青砥だつて馬鹿ではない。ひよつとしたら、これはあの浅田とやらしいのつぱりした顔の人足が、何かたくらんだのかも知れぬ、と感附いた。考えてみると、手でさぐるよりも足でさぐつたほうが早く見つかるといふものもふざけた話だ。とにかく明朝、あの浅田とやらしい人足を役所に呼び出し、きびしくきゆうめ糺しら明あしてやろうと、頗るすこぶ面白くない気持でその夜は寝た。

詐術さじゆつはかならず露頭するものようである。さすがの浅田も九文落したのに十一文拾つた事に就いて、どうにも弁明の仕様が無かつた。青砥は烈火の如く怒り、お上をいつわる不届者め、八つ裂きにも致したいところなれども、川に落した九文の銭の行末も気がかりゆえ、まずあれをお前ひとり十年でも二十年でも一生かかって捜し出せ、ふたたびあ

さはかなざるぢえ猿智慧を用い、腹掛けなどから銭を取出す事のないように、丸裸になって捜し出せ、銭九文のこらず捜し出すまでは雨の日も風の日も一日も休む事なく河原におもむき、下役人の監視のもとに川床を残りくまなく掘り返せ、と万雷一時に落ちるが如き大声で言い渡した。真面目な人が怒ると、こわいものである。

その日から浅田は、下役人の嚴重な監視のもとに丸裸となって川を捜した。十日目に一文、二十日経つて一文、川の柳の葉は一枚残らず散り落ち、川の水は枯れてしやうしやう蕭々たる冬の河原となり、浅田は黙々としてくわ鍬をふるって砂利を掘り起し、出て来るものは銭にはあらず、割れ鍋なべ、古釘ふるくぎ、欠け茶碗かぢやわん、それら廃品がむなしく河原に山と積まれ、心得顔した婆ばあがよちよち河原へ降りて来て、わしはいつぞやこの辺に、かんざしを一つ落したが、それはまだ出て来ませんか、と監視の下役人に尋ね、いつごろ落したのだと聞かれて、はつきりしませんが、わしがお嫁入りして間もなくの事だったから、六、七十年にもなりましようか、と言つて役人に叱られ、滑川もいつしか人に裸川と呼ばれて鎌倉名物の一つに数え上げられるようになった頃、すなわち九十七日目に、川筋三百間、鍬打ち込まぬ方寸の土も無くもの見事に掘り返し、やつと銭九文を拾い集めて青砥と再び対面した。

「下郎、思い知ったか。」

と言われて浅田は、おそるるところなく、こうべを挙げて、

「せんだって、あなたに差し上げた銭十一文は、私の腹掛けから取り出したものでござい
ますから、あれは私に返して下さい。」と言ったとやら、ひかれ者の小唄こうたとはこれであろ
うかと、のちのち人の笑い話の種になった。

（武家義理物語、卷一の一、我が物ゆゑに裸川）

義理

義理のために死を致す事、これ弓馬の家のならい、むかし摂州伊丹に神崎式部という筋目正しき武士がいた。伊丹の城主、荒木村重あらかむらしげにつかえて横目役を勤め、年久しく主家を泰山の安きに置いた。主家の御次男、村丸という若殿、御総領の重丸のよろず大人びて気立やさしきに似ず、まことに手にあまる腕白者にて、神崎はじめ重臣一同の苦勞の種であつたが、城主荒木は、優雅な御総領よりも、かえつてこの乱暴者の御次男を鼯ひいきしてその我儘わがままを笑つてお許しになるので、いよいよ増長し、ついに或ある時、蝦夷えぞとはどのよ
うな国か、その風景をひとめ見たい、と途方もない事を言い出し、家来たちがなだめると
尚なほさら更、凶に乗つて駄々だだをこね、蝦夷を見ぬうちはめしを食わぬと言つてお膳ぜんを蹴け飛ばす
仕末であつた。かねて村丸鼯ひいきの城主荒木は、このたびもまた笑つて、よろしい、蝦夷一
覧もよかろう、行つておいで、若い頃の長旅は一生の薬、と言つて事もなげにその我儘の
願いいを聞き容ゆるれてやつた。御供は神崎式部はじめ、家中粒選かちゆうつぷよりの武士三十人。

そのお供の人数の中に、二人の少年が、御次男のお話相手として差加えられていた。一

人は神崎勝太郎とて十五歳、式部の秘蔵のひとり息子で容貌華麗、立居振舞い神妙の天晴れ父の名を恥かしめぬ秀才の若武者、いまひとりとは式部の同役森岡丹後の三人の男の子の中の末子丹三郎とて十六歳、勝太郎に較べて何から何まで見劣りして色は白いが眼尻は垂れ下り、唇厚く真赤で猪八戒ちよはつかいに似ているくせになかなかのおしやれで、額の面炮にきびを気にして毎朝ひそかに軽石でこすり、それがために額は紫色に異様にてかてか光っている。でつぷりと太つて大きく、一挙手一投足のろくさく、武芸はきらい、色情はさかん、いぎたなく横よこずわ坐りに坐つて、何を思い出しているのか時々、にやりと笑つたりして、いやらしいつたら無い子であった。けれどもこの子は、どういうものか若殿村丸のお気にいりで、蛸たこよ蛸よと呼ばれて、いつもお傍そばちかく侍はべつて若殿にけしからぬ事を御指南申したりして、若殿と共にげらげら下品に笑い合つているのである。もとより式部はこの丹三郎を好かなかった。このたびの蝦夷見物のお供にもこの子を加えたく無かったのだが、自分の一子勝太郎が城主の言いつけでお供の一人に差加えられているし、同役の森岡丹後の子を無下にしりぞける事は出来なかつた。同役への義理である。森岡丹後も親の慾目よぐめから末子の丹三郎をそれほど劣つた子とは思っていないらしく、

「神崎どの、このたびは運悪く私が留守番にまわりましたが、私のかわりに末子の丹三郎

が仕合せとお供の端に加えられましたから、まあ、あれの土産話でも、たのしみにして待っている事に致しましょう。それにつけてもあれも初旅、なりばかり大きくてもまだほんの子供ゆえ、諸事よろしくたのみますぞ。」と親の真情、ぴたりと畳に両手をつけてお辞儀をしたのだ。いや、あの子はどうも、とは言われない。その上、若殿から蛸もぜひとの内命があつたのだから、どうしても蛸をお供の人数に差加えないわけにはゆかぬ。しぶしぶ丹三郎を連れて国元を出発したが、京を過ぎて東路あずまじをくだり、草津くさつの宿しゆくに着いた頃には、そろそろ丹三郎、皆の足手まといになつていた。だいいち、ひどく朝寝坊だ。若殿と二人で夜おそくまで、宿の女中にたわむれて賭事かけごとやら狐拳きつねけんやら双六すじろくやら、いやらしく忍び笑しのびわらいで打興うちきようじて、式部は流石さすがに見るに見兼ね、

「あすは早朝の出発ゆえ、もはや、おやすみなさるよう。」と思ひ切つて隣室から強く言つても、若殿は平気で、

「遊山ゆうざんの旅だ。かまわぬ。のう、蛸め。」

「はあ。」と蛸は答えて、にやにや笑っている。そうして、翌朝、蛸は若殿よりもおそく起きる。この丹三郎ひとりの朝寝坊のために、一行の宿からの出発が、いつもおくれる。若殿は、のんきに、

「捨て置き。あとから追いつく。」と言い、蛸ひとりを宿に置いてきつさと発足しようとなさるが、神崎式部は丹三郎の親の丹後から、あの子をよろしくと、一言たのまれているのだ。捨て置いて発足するわけには行かぬ。わが子の勝太郎に言いつけて、丹三郎を起させる。勝太郎は丹三郎よりも一つ年下である。それゆえすこし遠慮の言葉使いで丹三郎を起す。

「もし、もし。御出発でございます。」

「へえ？ ばかに早いな。」

「若殿も、とうにお仕度がお出来になりました。」

「若殿は、あれから、ぐつすりお休みになられたらしいからな。おれは、あれから、いろいろな事を考えて、なかなか眠られなかった。それに、お前の親爺おやしのいびきがうるさくてな。」

「おそれいます。」

「忠義もつらいよ。おれだって、毎夜、若殿の遊び相手をやらされて、へとへとなんだよ。」

「お察し申して居おります。」

「うん、まったくやり切れないんだ。たまには、お前が代ってくれてもよきそうなものだ。」

「は、お相手を申したく心掛けて居りますが、私は狐拳など出来ませんので。」

「お前たちは野暮だからな。固いばかりが忠義じゃない。狐拳くらい覚えて置けよ。」

「はあ、」と気弱く笑って、「それにしても、もう皆様が御出発でございますから。」

「何が、それにしても、だ。お前たちは、おれを馬鹿にしているんだ。ゆうべも、その事を考えて、くやしくて眠れなかつたんだ。おれも親爺と一緒に来ればよかつた。親から離れて旅に出ると、どんなに皆に気がねをしなけりやならぬものか、お前にはわかるまい。」

おれは国元を出発してこのかた、肩身のせまい思いばかりしている。人間って薄情なものだ。親の眼のとどかないところでは、どんなにでもその子を邪険に扱うんだからな。いや、お前たちの事を言っているんじゃない。お前たち親子は立派なものさ。立派すぎて、おつりが来らあ。このたびの蝦夷見物がすんだなら、おれはお前たち親子の事を逐一、国元の殿様と親爺にお知らせするつもりだ。おれには、なんでもわかつているんだ。お前の親爺は、ずいぶんお前を可愛^{かわい}がっているらしいじゃないか。隠^{ひそ}さなくたっていい。ゆうべこの宿に着いた時、お前の親爺は、これ勝太郎、足の豆には焼^{しやうちゆう}酎でも吹いて置け、と言っ

たのをおれは聞いたぞ。おれには、あんな事は言わない。皆の見ている前では、いやにおれに親切にしてみせるが、ヘン、おれにはちゃんとわかつているんだ。実の親子の情は、さすがに争われないものだ。焼酎でも吹いて置け、か。あとでその残りの焼酎を、親子二人で仲良く飲み合つたらう、どうだ。おれには一滴も酒を飲ませないばかりか、狐拳さえやめさせようとしやがるんだから面白くないよ。ゆうべは、つくづく考えた。ごめんこうむつておれはもう少し寝るよ。」

ふすまこ 襖越しに神崎式部はこれを聞いていた。よつぽどこのまま捨て置いて発足しようかと

思った。本当に、うつちやつて行つたほうがよかつたのだ。そうすれば、のちのさまざまの不幸が起らずにすんだのかも知れない。けれども、式部は義理を重んずる武士であつた。諸事よろしくたのむ、とびたりと畳に両手をついて頼んだ丹後の声が、姿が、忘れられぬ。式部はその日も黙つて、丹三郎の起床を待つた。

丹三郎の不仕鱈ふしだらには限りが無かつた。草津、水口みなくち、土山つちやまを過ぎ、鈴鹿峠すずかとうげにさしか

かつた時には、もう歩けぬとわめき出した。もとから乗馬は不得手で、さりとてその自分の不得手を人に看破されるのも口惜くやしく無理して馬に乗つてはみたが、どうにもお尻しりが痛くてたまらなくなつて、やつぱり旅は徒歩に限る、どうせ気散じの遊山旅だ、馬上の旅は

固苦しい、野暮である、と言って自分だけでは体裁が悪いので勝太郎にも徒歩をすすめて馬を捨てさせ、共に若殿の駕籠かごの左右に附添ってここまで歩いて来たのだが、峠にさしかかって急に、こんどは徒歩も野暮だと言いはじめた。

「こうして、てくてく歩いているのも気のきかない話じゃないか。」蝟は駕籠に乗って峠を越したかったのである。

「やつぱり、馬のほうがいいでしょうか。」勝太郎には、どっちだつてかまわない。

「なに、馬？」馬は閉口だ。とんでもない。「馬も悪くはないが、しかし、まあ一長一短というところだろうな。」あいまいに誤魔化ごまかした。

「本当に、」と勝太郎は素直に首肯うなずいて、「人間も鳥のように空を飛ぶ事が出来たらいいと思う事がありますね。」

「馬鹿な事を言っている。」丹三郎はせせら笑い、「空を飛ぶ必要はないが、」駕籠に乗りたいたのだ。けれどもそれをあからさまに言う事は流石に少しはばかられた。「空を飛ぶ必要はないが、」とまた繰返して言い、「眠りながら歩く、という事は出来ないものかね。」と遠廻とおまわしに謎なぞをかけた。

「それは、むずかしいでしょうね。」勝太郎には、丹三郎の底意がわからぬ。無邪気に答

える。「馬の上なら、眠りながら歩くという事も出来ませけれど。」

「うん、あれは。」あれは、あぶない。蛸には、馬上で眠るなんて芸当は出来ない。眠つたら最後、落馬だ。「あれは、また、野暮なものだ。眼が覚めて、ここはどこか、と聞いても、馬は答えてくれないからね。」駕籠だと、駕籠かきが、へえ、もうそろそろ桑名です、と答えてくれる。ああ、駕籠に乗りたい。

「うまい事をおっしゃる。」勝太郎には、蛸の謎が通じない。ただ無心に笑っている。

丹三郎はいまいましてに勝太郎を横目で睨にらんで、

「お前もまた、野暮な男だ。思いやりというものがない。」とあらたまつた口調で言った。「はあ？」と勝太郎はきよとんとしている。

「見ればわかるじゃないか。おれはもう、歩けなくなっているのだ。おれはこんなに太っているから股またずれが出来て、人に知られぬ苦勞をして歩いているのだ。見れば、わかりそうなものだ。」と言って急に顔を苦しげにしかめ片足をひきずって歩きはじめた。

「肩を貸してやれ。」とお駕籠の後に扈こじゆう従したがっていた神崎式部は、その時、苦笑して勝太郎に言いつけた。

「はい。」と言って勝太郎は、丹三郎の傍に走り寄り、蛸の右手を執とつたら、蛸は怒って、

「ごめんこうむる。こう見えても森岡丹後の子だ。お前のような年少の者の肩にしなだれかかつて峠を越えたという風聞がもし国元に達したならば、父や兄たちの面目が丸つぶれじゃないか。お前たち親子はぐるになつて、森岡の一家を嘲弄する気なのであろう。」とやけくそみたいに、わめき立てた。神崎親子は、顔色を変えた。

「式部、」と駕籠の中から若殿が呼んで、「蛸にも駕籠をやれ。」と察しのいいところを見せた。

「は、ただいま。」と式部は平伏する。蛸は得意だ。

それから、関、亀山、四日市、桑名、宮、岡崎、赤坂、御油、吉田、蛸は大威張り

で駕籠にゆられて居眠りしながら旅をつづけた。宿に着けば相変らず夜ふかしと朝寝である。この丹三郎ひとりのために、国元を発足した時の旅の予定より十日ちかくもおくれて、卯月のすえ、ようようきようの旅泊りは駿河の国、島田の宿と、いそぎ掛川を立ち、小夜の中山にさしかかった頃から豪雨となつて途中の菊川も氾濫し濁流は橋をゆるがし道を越え、しかも風さえ加つて松籟ものすごく、一行の者の袖合羽の裾吹きかえされて千切れんばかり、這うようにして金谷の宿にたどりつき、ここにて人数をあらため一行無事なるを喜び、さて、これから名高い難所の大井川を越えて島田の宿に渡らなければな

らぬのだが、式部は大井川の岸に立つて川の気色を見渡し、

「水かさ刻一刻とつゝの様子なれば、きょうはこの金谷の宿に一泊。」とお供の者どもに言いつけた。

けれども、乱暴者の若殿には、式部のこの用心深い処置が気にいらなかった。川を眺めてせせら笑い、

「なんだ、これがあの有名な大井川か。淀川よどがわの半分も無いじゃないか。国元の猪名川いながわよりも武庫川むこがわよりも小さいじゃないか。のう、蛸。これしきの川が渡れぬなんて、式部も老も碌うろくしたようだ。」

「いかにも、」と蛸は神崎親子を横目で見てにやりと笑い、「私などは国元の猪名川を幼少の頃より毎日のように馬で渡つてなれて居りますので、こんな小さい川が、たといどんなに水を増してもおそろしいとは思いませんが、しかし、生れつき水癩癩みずてんかんと申して、どのように弓馬の武芸に達していても、この水を見るとおそろしくぶるぶる震えるという奇病があつて、しかもこれは親から子へ遺伝するものだそうぞうで。」

若殿は笑つて、

「奇妙な病気もあるものだ。まさか式部は、その水癩癩とやらいう病気でもあるまいが、

どうだ、蝟め、われら二人抜け駈けてこの濁流に駒をすすめ、かの宇治川先陣、佐々木と
 梶原の如く、相競つて共に向う岸に渡つて見せたら、臆病の式部はじめ供の者たち
 も仕方なく後からついて来るだろう。なんとしてもきょうのうちに、この大井川を渡つて
 島田の宿に着かなければ、西国武士の名折れだぞ。蝟め、つづけ。」と駒に打ち乗り、濁
 流めがけて飛び込もうとするので式部もここは必死、篠つく雨の中を蓑も笠もほうり投げ
 て若殿の駒の轡に取り縋り、

「おやめなさい、おやめなさい。式部かねて承るに大井川の川底の形状変転常なく、その
 瀬その淵の深淺は、川越しの人夫さえ踏違えることしばしば有りとの事、いわんや他国
 のわれら、拔山の勇ありといえども、血氣だけでは、この川渡ることむずかしく、式部
 はきよう一日、その水癩癩とやら奇病にでも何にでも相成りますから、どうか式部の奇病
 をあわれに思召して、川を越える事はあすになさつて下さい。」と涙を流して懇願した。
 まことの臆病者の丹三郎は、口ではあんな偉そうな事を言つたものの、蝟め、つづけ！
 と若殿に言われた時には、くらくらと眩暈がして、こりやもうどうしようかと、うろろう
 したが、式部が若殿をいさめてくれたので、ほつとして、真青な顔に奇妙な笑いを無理に
 浮べ、「ちえ、残念。」と言つた。

それがいけなかった。その出鱈目でたらめの言葉が若殿の気持をいつそう猛りたけ立たせた。

「蛸め。式部は卑怯ひきようだ。かまわぬ、つづけ！」と式部の手のゆるんだすきを見て駒ひに鞭むちあて、暴虎馮河ぼうこひようが、ざんぶと濁流に身をおどらせた。式部もいまはこれまでと観念し、

「それ！ 若殿につづけ。」とお供の者たちに烈はげしく下知した。いずれも屈強の供の武士三十人、なんの躊躇ちゆうちよも無くつぎつぎと駒を濁流に乗り入れ、大浪おなみをわけて若殿のあとを追った。

岸には、丹三郎と跡見役の式部親子とが残った。丹三郎は、ぶるぶる震えながら勝太郎の手を固く握り、

「若殿は野暮だ。思いやりも何も無い。おれは実は馬は何よりも苦手なのだ。何もかも目茶苦茶だ。」と泣くような声で訴えた。

式部は静かにあたりを見廻し、跡に遺漏のもの無きを見とどけ、さて、丹三郎に向い、「これも皆、あなたの言葉から起った難儀です。でもまあいまは、そんな事を言っていたって仕様がありません。すぐに若殿の後を追いまししょう。わたしたちは果して生きて向う岸に行き着けるかどうか、この大水では、心もとない。けれども、わしは国元を出る時、あなたの親御の丹後どのから、丹三郎儀はまだほんの子供、しかも初旅の事ゆえ、諸事よろ

しくたのむと言われました。その一言が忘れかね、わしはきょうまで我慢に我慢を重ねて、あなたの世話を見て来ました。いまこの濁流を渡つて、あなたの身にもしもの事があつたなら、きょうまでのわしの苦勞もそれこそ水の泡あわになります。馬は一ばん元氣のいいのを、あなたのために取つて置きました。せがれの勝太郎を先に立て、瀬踏みをさせますから、あなたは何でもただ馬の首にしがみついて勝太郎の後について行くといい。すぐあとに、わしがついて守つて行きますから、心配せず、大浪をかぶつてもあわてず、馬の首から手を離したりせぬように。」とおだやかに言われて流石の馬鹿も人間らしい心にかえつたか、「すみません。」と言つて、わつと手放して泣き出した。

諸事頼むとの一言、この事なりと我が子の勝太郎を先に立て、次に丹三郎を特に吟味して選び置きし馬に乗せて渡らせ、わが身はすぐ後にひたと寄添つてすすみ渦巻うずまく激流を乗り切つて、難儀の末にようやく岸ちかくなり少しく安堵あんどせし折も折、丹三郎いささかの横浪をかぶつて馬の鞍覆くらつがえり、あなやの小さい声を残してはるか流れて浮き沈み、騒ぐ間もなくはや行方しれずになつてしまつた。

式部、呆然ぼうぜんたるうちに岸に着き、見れば若殿は安泰、また我が子の勝太郎も仔細しさいなく岸に上つて若殿のお傍はべに侍つてゐる。

世に武家の義理ほどかなしきは無し。式部、覚悟を極めて勝太郎を手招き、

「そちに頼みがある。」

「はい。」と答えて澄んだ眼で父の顔を仰ぎ見ている。家中随一の美童である。

「流れに飛び込んで死んでおくれ。丹三郎はわしの苦勞の甲斐も無く、横浪をかぶつて鞍がくつがえり流れに吞まれて死にました。そもそもあの丹三郎儀は、かの親の丹後どのより預り来れる義理のある子です。丹三郎ひとりがおぼれ死んで、お前が助かったとあれば、丹後どのの手前、この式部の武士の一分が立ちがたい。ここを聞きわけておくれ。時刻をうつつさずいますぐ川に飛び込み死んでおくれ。」と面を剛くして言い切れれば、勝太郎さすがは武士の子、あ、と答えて少しもためらうところなく、立つ川浪に身を躍らせて相果てた。

式部うつむき涙を流し、まことに武家の義理ほどかなしき物はなし、ふるさとを出でし時、人も多きに我を扱びて頼むとの一言、そのままに捨てがたく、万事に劣れる子ながらも大事に目をかけここまで来て不慮の災難、丹後どのに顔向けなりがたく、何の罪とがも無き勝太郎をむぎむぎ目前に於いて死なせたる苦しき、さりとは、うらめしの世、丹後どのには他の男の子ふたりあれば、歎きのうちにもまぎれる事もありなんに、それがしに

は勝太郎ひとり。国元の母のなげきもいかばかり、われも寄る年波、勝太郎を死なせてい
 まは何か願いの楽しみ無し、出家、と観念して、表面は何気なく若殿に仕えて、首尾よく
 蝦夷見物の大役を果し、その後、城主にお暇いとまを乞い、老妻と共に出家して播州ばんしゅうの清水
 の山深くかくれたのを、丹後その経緯を聞き伝えて志に感じ、これもにわかにお暇いとまを乞い
 請うけ、妻子とも四人いまさらこの世に生きて居られず、みな出家して勝太郎の菩提ぼだいをとむ
 らったとは、いつの世も武家の義理ほど、あわれにして美しきは無しと。

(武家義理物語、卷一の五、死なば同じ浪なみまくら枕まくらとや)

女賊

後柏原天皇大永年間、陸奥一円にかくれなき瀬越の何がしという大賊、仙台名取川の上流、笹谷峠の附近に住み、往来の旅人をあやめて金銀荷物押領し、その上、山賊にはめずらしく、吝嗇の男で、むだ使いは一切つつしみ、三十歳を少し出たばかりの若さながら、しこたまためて底知れぬ大長者になり、立派な口髭を生やして拳措動作も重々しく、山賊には附き物の熊の毛皮などは着ないで、紬の着物に紋附きのお羽織をひっかけ、謡曲なども少ししたしなみ、そのせいか言葉つきも東北の方言と違っていて、何々にて候、などといかめしく言い、女ぎらいか未だに独身、酒は飲むが、女はてんで眼中に無い様子で、かつて一度も好色の素振りを見せた事は無く、たまに手下の者が里から女をさらって来たりすると眉をひそめ、いやしき女にたわむれるは男子の恥辱に候、と言ひ、ただちに女を里に返させ、手下の者たちが、親分の女ぎらいは玉に疵だ、と無遠慮に批評するのを聞いてにやりと笑い、仙台には美人が少く候、と呟いて何やら溜息をつき、山賊に似合わぬ高邁の趣味を持つている男のようにも見えた。この男、或る年の春、容

貌見にくからぬ手下五人に命じて熊の毛皮をぬがせ、頬被りを禁じて紋服を着せ、仙台
 平の袴をはかせ、これを引連れて都にのぼり、自分は東の田舎大尽の如くすべて鷹揚
 に最上等の宿舎に泊り、毎日のんきに京の見物、日頃けちくさくため込んだのも今日こ
 の日の為らしく、惜しげも無く金銀をまき散らし、やがてもの言わぬ花にも厭きて、島
 原に繰り込み、京で評判の名妓をきら星の如く大勢ならべて眺め、好色の手下の一人は、
 うむと呻いて口に泡を噴きどうとうしるに倒れてそれお水それお薬、お袴をおぬぎなさつ
 たら、などと大騒ぎになったのも無理からぬほど、まばゆく見事な景趣ではあつたが、大
 尽は物憂そうな顔して溜息をつき、都にも美人は少く候、と呟く。広い都も、人の噂のた
 めに狭く、この山賊の奢りは逸早く京中に拡まり、髭そろうの大尽と言われて、路で
 逢う人ことごとくがこの男に会釈するようになったが、この男一向に浮かぬ顔して、や
 がて島原の遊びにもどうやら厭きた様子で、毎日ぶらりぶらりと手下を引連れて都大路を
 歩きまわり、或る日、古い大きな家の崩れかかった土堀のわれ目から、ちらと見えた女の
 姿に足をとどめ、手にしていた扇子をはたと落して、小山の動くみたいに肩で烈しく溜息
 をつき、シばらスイ、と思わず東北訛をまる出しにして呻き、なおもその、花盛りの梨の
 木の下でその弟とも見える上品な男の子と手鞠をついて遊んでゐる若い娘の姿に、阿呆の

如く口をあいて見とれていた。翌る日、髭そうろうの大尽は、かの五人の手下に言いふくめて、金銀綾錦あやにしきのたぐいの重宝をおびただしく持参させ、かの土塀の家に遣し、お姫様を是非とも貰い受けたしと頗る唐突ながら強硬の談判を開始させた。その家の老主人は、いささか由緒ゆいしよのある公卿くげの血筋を受けて、むかしはなかなか羽振りのよかつた人であるが、名誉心が強すぎて、なおその上の出世を望み、附合いを派手にして日夜頭官きょううおに響きやう応うし、かえつて馬鹿にされておまけに財産をことごとく失い、何もかも駄目だめになり、いまは崩れる土塀を支える力も無く中風の気味さえ現われて来て、わななく手でさてもこの世は夢まぼろしなどとへたくその和歌を鼻紙の表裏に書きしたためて、その日その日の憂うさを晴らしている有様だったので、この突然の申込みにはじめは少からず面くらつたものの、さて、眼前に山と積まれた金銀財宝を眺めて、これだけあれば、ふたたび大官に響きやう応うし、華やかに世に浮び上る事が出来るぞと、れいの虚栄心がむらむらと起り、髭そうろうの大尽といえ、いま此この京でも評判の男、なんでも遠いあずまの大金持ちの若旦那わかだんなだとかいう話だ、田舎者だつて何だつて金持ちなら結構、この縁談は悪くない、と貧すればどん貧すの例にもれず少からず心が動いて、その日はお使者に大いに愛嬌あいきようを振りまき、確答は後日という事にして、とにかくきょうのお土産の御礼にそちらの御主人の宿舎へ明日

参上致します、という返辞。手下たちは、しめた、あの工合ぐあいではもう大丈夫、と帰る途み
ちみちうなす
 々々首肯ちみちうなすき合あひ、主人にその様子を言上すれば、山賊の統領はにやりと凄すこく笑い、案外も
 ろく候、と言つた。その翌る日、土塀の老主人は、烏帽子えぼしなどかぶつてひどくもつたいぶ
 った服装で山賊の京の宿舎を訪ね、それこそほんものの候言葉で、昨日のお礼を申し、統
 領の鷹揚な挙措や立派な口髭に一目で惚ほれ込み、お礼だけ言う筈はずのところを、つい、ふつ
 つかな娘ながら、とこちらのほうから言い出して、山賊の統領もさすがに都の人の軽薄に
 苦笑して、それでもその日の饗応は山の如く、お土産も前日にまさる多額のもので、土塀
 のあるじはただもう雲中を歩む思いで烏帽子を置き忘れて帰宅し、娘を呼んで、女三さん界がい
 に家なし、ここはお前の家ではない、お前の弟がこの家を継ぐのだからお前はこの家には
 不要である、女三界に家なしとはここのとことろだ、とひどい乱暴な説教をして娘を泣かせ、
 何を泣くか、お父さんはお前のために立派な婿むこを見つけ来てあげたのに、めそめそ泣く
 とは大不孝、と中風の気味で震える腕を振りあげて娘を打つ真似まねをして、都の人は色は白
 いが貧乏でいけない、あずまの人は毛深くて間の抜けた顔をしているが女にはあまいよう
 だ、行きなさい、すぐに山奥へでもどこへでも行きなさい、死んだお母さんもよろこぶだ
 ろう、お父さんの事は心配するな、わしはこれからまた一旗挙げるのだ、承知か、おお、

承知してくれるか、女三界に家なし、どこにいたって駄目なものだよ、などと変な事まで口走り、婿の氏うしすじ素性をろくに調べもせず、とにかくいま都で名高い髭さうろうの大尽だから間違いないと軽率にひとり合点がてんして有頂天のうちはこの縁談をとりきめ、十七の娘は遠いあずまのそれも蝦夷えぞの土地と聞く陸奥へ嫁とつがなければならぬ身の因果を歎なげき、生きた心地も無くただ泣きに泣いて駕籠かごに乗せられ、父親ひとりは浅間しく大はしやぎで、あやうい腰つきで馬に乗り都のはずれまで見送り、ひたすら自分の今後の立身出世を胸中に思い描いてわくわくして、さらば、さらば、とわかれの挨拶あいさつも上の空で言い、家へ帰って五日目に心臓痲痺まひを起して頓死とんししたとやら、ひとの行末は知れぬもの。一方、十七の娘は、父のあわれな急死も知らず駕籠にゆられて東路あずまじをくだり、花婿の髭をつくづく見ては言いいようのない恐怖におそわれて泣き、手下の乱暴な東北言葉に胆きもをつぶして泣き、江戸を過ぎてようよう仙台ちかくなつて春とはいえ未だ山には雪が残っているのを見て泣き、山賊たちをひどく手こずらせて、古巢ふるさいの山寨さんさいにたどり着いた頃には、眼を泣きはらして猿さるの顔のようになり、手下の山賊たちは興覚めたが、統領はやさしくみずから看護して、その眼のなおった頃には娘も、統領に少なくなつて落ちつき、東北言葉もだんだんわかるようになった、山賊の手下たちの無智むちな冗談じゆたんに思わず微笑ほほえみ、やがて夫の悪い渡世を知るに

及んで、ぎくりとしたものの、女三界に家なし、ここをのがれても都の空の方角さえ見当
 つかず、女はこうなると度胸がよい、ままよと観念して、夫には優しくされ手下の者たち
 には姐御あねぢなどと言われてかかずかれると、まんざら悪い気もせず、いつとはなしに悪にそ
 まり、亭主ていしゅのする事なす事なんでも馬鹿ばからしく見えて仕様のない女房にようぼうもあり、また、
 亭主の行為がいちいち素晴らしい英雄的なものに見えてたまらない女房もあり、いずれも
 悪妻、この京育ちの美女は後者に属しているらしく、夫の憎むべき所業も見馴みなれるに随したがい
 何だか勇しくたのもしく思われて来て、亭主が一仕事して帰るといそいそ足など洗ってや
 り、きよようの獲物は何、と笑って尋ね、旅人から奪って来た小袖こそでをひろげて、これは私に
 は少し派手よ、こんどはもう少し地味なのをたのむわ、と言ってけろりとして、手下のもの
 むごい手柄てがらばなし話を眼を細めて聞いてよろこび、後には自分も草鞋わらじをはいて夫について行き、
 平気で悪事の手伝いをして、いまは根からのあさましい女山賊になりさがり、顔は以前に
 変らず美しかったが眼にはいやな光りがあり、夫の山刀を井戸端いどばたにしゃがんで熱心に研と
 でいる時の姿などには鬼女のような凄すしい気配が感ぜられた。やがてこの鬼女も身ごもり、
 生れたのは女の子で春枝と名づけられ、色白く唇くちびる小さく赤い、京風の美人、それから二年
 経たつて、またひとり女の子が生れ、お夏と呼ばれて、父に似て色浅黒く眼が吊つり上ったき

かぬ氣の顔立ちの子で、この二人は自分の母が京の公卿の血を受けたひとだという事など知る筈もなく、氏より育ちとはまことに人間のたより無さ、生れ落ちたこの山奥が自分たちの親代々の故郷とのんきに合点して、鬼の子らしく荒々しく山坂を駈^かけ廻^{まわ}って遊び、その遊びもままごとなどでは無く、ひとりには旅人、ひとりには山賊、おい待て、命が惜しいか金が惜しいかとひとりが言えば、ひとりは助けて！ と叫^{がけ}んでけわしい崖^{がけ}をするする降りて逃げるを、待て待て、と追つてつかまえ大笑いして、母親はこれを見て悲しがるわけもなく、かえつて薙^{みぎなた}刀など与えて旅人をあやめる稽古^{けいこ}をさせ、天を恐れぬ悪業、その行末もおそろしく、果せる哉^{かな}、春枝十八お夏十六の冬に、父の山賊に天罰下り、雪崩^{なだれ}の下敷になつて五体の骨々微塵^{みじん}にくだけ、眼もあてられぬむごたらしい死にざまをして、母子なげく中でも、手下どもは悪人の本性をあらわして親分のしこたまためた金銀財宝諸道具食料ことごとく持ち去り、母子はたちまち雪深い山中で暮しに窮した。

「何でもないさ。」と勝氣のお夏は威勢よく言つて母と姉をはげまし、「いままで通り、旅人をやつつけようよ。」

「でも、」と妹にくらべて少しおとなしい姉の春枝は分別ありげに、「女ばかりじゃ、駄目よ。かえつてあたしたちのほうで着物をはぎとられてしまふわよ。」

「弱虫、弱虫。男の身なりをして刀を持って行けばなんでもない。やいこら、とこんな工合いに男のひとみたいな太い声で呼びとめると、どんな旅人だつて震え上るにきまつている。でも、おさむらいはこわいな。じいさんばあさんか、女のひとり旅か、にやけた商人か、そんな人たちを選んでおどかしたら、きつと成功するわよ。面白じやないの。あたしは、あの熊の毛皮を頭からかぶつて行こう。」無邪氣と悪魔とは紙一重である。

「うまくいくといいけど、」と姉は淋しげに微笑んで、「とにかくそれじゃ、やつて見ましょう。あたしたちは、どうでもいいけど、お母さんにお怪我があつては大変だから、お母さんはお留守番して、あたしたちの獲物をおとなしく待つているのよ。」と母に言い、山育ちの娘も本能として、少しは親を大事にする氣持があるらしく、その日から娘二人は、山男の身なりで、おどけ者の妹は鍋墨で父にそっくりの口髭など描いて出かけ、町人里人の弱そうな者を捜し出してはおどし、女心はこまかく、懐中の金子はもとより、にぎりめし、鼻紙、お守り、火打石、爪楊子のはてまで一物も余さず奪い、家へ歸つて、財布の中の金銀よりは、その財布の縞柄の美しきを喜び、次第にこのいまわしき仕事にはげみが出て来て、もはや心底からのおそろしい山賊になつてしまったものの如く、雪の峠をたまたに通る旅人を待ち伏せているだけでは獲物が少なくてつまらぬなどと、すっかり大胆

になつて里近くまで押しかけ、里の女をつまらぬ櫛くし笄こうがいでも手に入れると有頂天になり、姉の春枝は既に十八、しかも妹のお転婆てんぱにくらべて少しやさしく、自身の荒くれた男姿を情無く思う事もあり、熊の毛皮の下に赤い細帯などこつそりしめてみたりして、さすがにわかい娘の心は動いて、或る日、里近くで旅の絹商人をおどして得た白絹二反、一反ずつわけていそいそ胸に抱いて夕暮の雪道を急ぎ帰る途中に於いて、この姉の考えるには、もうそろそろお正月も近づいたし、あたしは是非とも晴衣はれぎが一枚ほしい、女の子はたまには綺麗きれいに着飾らなければ生きている甲斐かひが無い、この白絹を藤色ふじいろに染め、初春の着物を仕立てたいのだが裏地が無い、妹にわけてやった絹一反あれば見事な裕あわせが出来ると、と矢もたてもたまらず、さいぜんわけてやった妹の絹が欲しくなり、

「お夏や、お前この白絹をどうする気なの？」と胸をどきどきさせながら、それとなく聞いてみた。

「どうするって、姉さん、あたしはこれで鉢はちまき巻まきをたくさんこしらえるつもりなの。白絹の鉢巻は勇しくつて、立派な親分さんみたいに見えるわよ。お父さんも、お仕事の時には絹の白鉢巻をしてお出かけになったわね。」とたわい無い事を言っている。

「まあ、そんな、つまらない。ね、いい子だから、姉さんにそれをゆずってくれない？」

こんど、何か面白いものが手にはいつた時には姉さんは、みんなお前にあげるから。」
 「いやよ。」と妹は強く首を振った。「いや、いや。あたしは前から真白な鉢巻をほしい
 と思つていたのよ。旅人をおどかすのに、白鉢巻でもしてないと氣勢があらなくて工合
 いがわるいわ。」

「そんな馬鹿な事を言わないで、ね、後ごしやう生だから。」

「いや！ 姉さん、しつっこいわよ。」

へんに気まづくなつてしまった。けれども姉はそんなに手きびしく断られるといよいよ
 総身が燃え立つように欲しくなり、妹に較くらべておとなしいとはいふものの、普段おとなし
 い子こそ思いつめた時にかえつて残酷のおそろしい罪を犯す。殊ことにも山賊の父から兇きやうあ

悪くの血を受け、いまは父の真似して女だてらに旅人をおどしてその日その日を送り迎え
 している娘だ。胸がもやもやとなり、はや、人が変り、うわべはおだやかに笑いながら、

「ごめんね、もう要らないわよ。」と言つてあたりを見廻し、この妹を殺して絹を奪おう、
 この腰の刀で旅人を傷つけた事は一度ならずある、ついでに妹を斬きつて捨てても、罪は同
 じだ、あたしは何としても、晴衣を一枚つくるのだ、こんどに限らず、帯でも櫛でもせつ
 かくの獲物をこんな本当の男みたいな妹と二人でわけるのは馬鹿らしい、むだな事だ、に

くい邪魔、突き刺して絹を取り上げ、家へ帰ってお母さんに、きようは手剛い旅人に逢い、
可哀想かわいそうに妹は殺されましたと申し上げれば、それですむ事、そうだ、少しも早くも妹の
油断を見すまし、刀の柄つかに手を掛けた、途端に、

「姉さん！　こわい！」と妹は姉にしがみつき、

「な、なに？」と姉はうろたえて妹に問えば妹は夕闇ゆうやみの谷底を指差し、見れば谷底は里
人の墓地、いましも里の仏を火葬のさいちゆう、人焼く煙は異様に黒く、耳をすませば、
ぱちぱちはぜる気味悪い音も聞えて、一陣の風はただならぬ匂においを吹き送り、さすがの女
賊たちも全身鳥肌とりはだ立って、固く抱き合い、姉は思わずお念仏を称とえ、人の末は皆このよ
うに焼かれるのだ、着物も何もはかないものだとふつと人の世の無常を観じて、わが心の
恐しさに今更ながら身震いして、とかくこの一反の絹のためさもしい考えを起すのだ、何
も要らぬと手に持っている反物を谷底の煙めがけて投げ込めば、妹もすぐに投げ込み、わ
つと泣き出して、

「姉さん、ごめん、あたしは悪い子よ。あたしは、姉さんをたつたいままで殺そうと思っ
ていたの。姉さん！　あたしだって、もう十六よ。綺麗な着物を欲しいのよ。でも、あた
しはこんな不器量な子だから、お洒落しゃれをすると笑われるかと思つて、わざと男の子みたい

な事ばかり言っていたのよ。ごめんね。姉さん、あたしはこのお正月に晴衣が一枚ほしくて、あたしの絹を紅梅に染めて、そうして姉さんの絹を裏地にしようと思って、姉さん、あたしはいけない子よ、姉さんを刀で突いてそうしてお母さんには、姉さんが旅人に殺されたと申し上げるつもりでいたの。いまあの火葬の煙を見たら、もう何もかもいやになって、あたしはもう生きて行く気がしなくなつた。」と意外の事を口走るので、姉は仰天して、

「何を言うの？ ゆるすもゆるさぬも、それはあたしの事ですよ。あたしこそ、お前を突き殺して絹を奪おうと思つて、あの煙を見たら悲しくなつて、あたしの反物を谷底へ投げ込んだのじゃないの。」と言つて、さらに妹を固く抱きしめてこれも泣き出す。

かつは驚き、かつは恥じ、永からぬ世に生れ殊に女の身としてかかる悪逆の暮し、後世ごせのほども恐ろし、こんにちこれぎり浮世の望みを捨てん、と二人は腰の刀も熊の毛皮も谷底の火焰かえんに投じて、泣き泣き山寨に帰り、留守番の母に逐一事情を語り、母にもお覚悟のほどを迫れば、母も二十年の悪夢から醒めさ、はじめて母のいやしからぬ血筋を二人に打ち明け、わが身の現在のあさましさを歎き、まつさきに黒髪を切り、二人の娘もおくれじと剃髪ていはつして三人比丘尼びくに、汚濁の古巢を焼き払い、笹谷峠のふもとの寺に行き老僧に向つて

懺悔ざんげしその衣ころもの裾すそにすがつてあけくれ念仏を称え、これまであやめた旅人の菩提ぼだいを弔とむらつたとは頗すこぶる殊勝しゆせうに似たれども、父子二代の積せき悪あくはたして如にょらい来の許たまし給たまうや否いなや。

(新可笑記しんかせうき、卷五の四、腹からの女追剥をんなおひはぎ)

赤い太鼓

むかし都の西陣にしじんに、織物職人の家多く、軒をならべておのおの織物の腕を競い家業にはげんでいる中に、徳兵衛とくべえとて、名こそ福德の人に似ているが、どういうものか、お金が残らず胆きもを冷やしてその日暮し、晩酌ばんしゃくも二合を越えず、女房にようぼうと連添うて十九年、他の女ほかにお酌をさせた経験も無く、道楽といえ、たまに下職したしやくを相手に将棋をさすくらしいもので、それもひまを惜しんで目まぐるしい早将棋一番かぎり、約束の仕事の日限を違たがえた事はいちども無く万事に油断せず精出して、女房も丈夫、子供も息災、みずからは二十はたちの時に奥歯一本虫に食われて三日病んだ他には病気というものを知らず、さりとしてけちで世間の附つき合いの義理を欠くというわけではなく職人仲間りちぎものに律儀者の評判を取り、しかも神仏の信心深く、ひとつとして悪事なく、人生四十年を過して来たものの、どういうわけか、いつも貧乏で、世の中には貧乏性といってこのような不思議はままある事ながら、それにしても、徳兵衛ほどの善人がいつまでも福の神に見舞われぬとは、浮世にはわからぬ事もあるものだ、町内の顔役たちは女房に寝物語してひそかにわが家の内福に安あ

堵んどするとうような有様であった。そのうちに徳兵衛の貧乏いよいよ迫り、ことしの暮は夜逃げの他に才覚つかず、しのびしのび諸道具売払うを、町内の顔役たちが目ざとく見つけ、永年のよしみ、捨て置けず、それとなく徳兵衛に様子を聞けば、わずか七、八十兩の借金に首がまわらず夜逃げの覚悟と泣きながら言う。顔役は笑い、

「なんだ、たかが七、八十兩の借金で、先代からのこの老舗しにせをつぶすなんて法は無い。ことしの暮は万事わたしが引受けますから、もう一度、まあ、ねばってみなさい。来年こそは、この身代しんだいにも一花咲かせて見せて下さい。子供さんにも、お年玉を奮発して、下職への仕着しきせも紋無しあよぎの浅黄あやぎにするといまからでも間に合いますから、お金の事など心配せず、まあ、わたしたちに委まかせて、大船に乗った気で一つ思い切り派手に年越しをするんだね。お内儀も、そんな、めそめそしないで、せつかくのいい髪をもつたいたい、ちゃんと綺麗きれいに結むすって、おちめを人に見せないところが女房の働き。正月の塩しお鮭さけもわしの家で三本買って置いたから、一本すぐにとどけさせます。笑う門には福が来る。どうも、この家は陰気でいけねえ。さあ、雨戸をみんなあけて、ことしの家中の塵ちり芥あくたをさつぱりと掃き出して、のんきに福の神の御入来を待つがよい。万事はわたしが引受けました。」と景気の良い事ばかり言い、それから近所の職人仲間と相談の上、われひと共にいそがしき十

二月二十六日の夜、仲間十人おのおの金子十両と酒肴を携え、徳兵衛の家を訪れ、一升ますの榼を出させて、それに順々に十両ずつばらりばらりと投げ入れて百両、顔役のひとりには福の神の如く陽気に笑い、徳兵衛さん、ここに百両あります、これをもとでに千両かせいでごらんさい、と差し出せば、またひとりの顔役は、もつともらしい顔をして榼を神かみ棚だなにあげ、ばんばんと拍かし手わてを打ち、えびす大黒にお願い申す、この百両を見覚え置き、利に利を生ませて来年の暮には百倍千倍にしてまたこの家に立ち戻らせ給え、さもなくば、えびす大黒もこの金横領のとがにとして繩なわを打ち、川へ流してしまいます、と言え、また大笑いになり、職人仲間の情愛はまた格別、それより持参の酒肴にて年忘れの宴、徳兵衛はうれしく、意味も無く部屋中をうろうろ歩きまわり重箱を蹴飛ばし、いよいよ恐縮して、あちらこちらに矢鱈やたらにお辞儀して廻り、生れてはじめて二合以上の酒を飲ませてもらい、とうとう酔い泣きをはじめ、他の職人たちも、人を救ったというしびれるほどの興奮から、ふだん一滴も酒を口にせぬ人まで、ぐいぐいと飲み酒乱の傾向を暴露して、この酒は元来わしが持参したものだ、飲まなければ損だ、などとまことに興覚めないやしい事まで口走り、いきな男は、それを相手にせず、からだを前後左右にゆすぶって小唄こうたをうたい、鬚ひげ面の男は、声をひそめて天下国家の行末を憂い、また隅すみの小男は、大声でおのれ

の織物の腕前を誇り、他のやつは皆へたくそ也とのしり、また、頬被りして壁塗り踊りと称するへんてつも無い踊りを、誰も見ていないのに、いやに緊張して口をひきしめいつまでも呆れるほど永く踊りつづけている者もあり、また、さいぜんから襖によりかかつて、顔面蒼白、眼を血走らせて一座を無言で睨み、近くに坐っている男たちを薄気味悪がらせて、やがて、すつくと立ち上ったので、すわ喧嘩と驚き制止しかかれれば、男は、ううと呻いて廊下に走り出て庭先へ、げえと吐いた。酒の席は、昔も今も同じ事なり、しまいには、何が何やら、ただわあとなつて、骨の無い動物の如く、互いに背負われるやら抱かれるやら、羽織を落し、扇子を忘れ、草履をはきちがえて、いや、めでたい、めでたい、とうわごとみたいと言いながらめいめいの家へ帰り、あとには亭主ひとり、大風の跡の荒野に伏せる狼の形で大駟で寝て、女房は呆然と部屋のままなかに坐り、とにかく後片付けは明日と定め、神棚の柵を見上げては、うれしき胸にこみ上げ、それにつけても戸じまりは大事と立って、家中の戸をしめて念いりに錠をおろし、召使い達をさきに寝かせて、それから亭主の徳兵衛を静かにゆり起し、そんな大駟で楽寝をしている場合ではありません、ご近所の有難いお情を無にせぬよう、今夜これから、ことしの諸払いの算用を、ざつとやって見ましよう、と大福帳やら算盤を押しつけければ、亭主は眼をしづくあ

けて、泥^{でいすい}酔^いの夢にも債鬼に苦しめられ、いまふつと眼がさめると、われは百両の金持なる事に氣附いて、勇氣百千倍、むつくり起き上り、

「よし来た、算盤よこせ、畜生め、あの米屋の八右衛門^{はちえもん}は、わしの先代の別家なのに、義理も恩も人情も忘れて、どこよりもせわしく借りを責め立てやがって、おのれ、今に見ろと思つていたが、畜生め、こんど来たら、あの皺^{しわづら}面に小判をたたきつけて、もう来年からは、どんなにわしにお世辞を言つても、聞かぬ振りして米は八右衛門の隣りの与七の家から現金で買つて、帰りには、あいつの家の前で小便でもして来る事だ。とにかく、あの神棚の榊をおろせ。久しぶりで山吹の色でも拝もう。」と大あくらで威勢よく言い、女房もいそいそと立つて神棚から一升榊をおろして見ると、榊はからつぽ、一枚の小判も無い。夫婦は仰天して、榊をさかさにしたり叩^{たた}いてみたり、そこら中を這^はい廻^{まわ}つてみたり、神棚を全部引下して、もつたいたなくも御神体を裏がえしたりひっくりかえしたり、血まなこで搜しても一枚の小判も見当らぬ。

「いよいよ無いにきまつた。」と亭主は思い切つて、「もうよい、搜すな。榊一ぱいの小判をまさか鼠^{ねずみ}がそつくりひいて行つたわけでもあるまい。福の神に見はなされたのだ。よくよく福運の無い家と見える。」と言つたが口惜^{くや}しき、むらむらと胸にこみあげ、「いい

笑い草だ。八右衛門の勘定はどうなるのだ。むだな喜びをしただけに、あとのつらさが、こたえるわい。」と腹をおさえて涙を流した。

女房もおろおろ涙声になつて、

「まあ、どうしましょう。ひどい、いたずらをなさる人もあるものですねえ。お金を下さつてよろこばせて、そうしてすぐにまた取り上げるとは、あんまりですわねえ。」

「何を言う。そなたは、あの、誰か盗んだとも思っているのか。」

「ええ、疑うのは悪い事だけれども、まさか小判がひとりでふつと溶けて消えるわけは無し、宵よいからこの座敷には、あの十人のお客様のほかに出入りした人も無し、お帰りになるとすぐにあたしが表の戸に錠をおろして、——」

「いやいや、そのようなおそろしい事を考えてはいけない。小判は神隠しに遭つたのだ。わたしたちの信心の薄いせいだ。あのように情深いご近所のお方たちを疑うなどは、とんでもない事だ。百両のお金をちらと拝ませていただいただけでも、有難いと思わなければならぬ。それに、生れてはじめてあれほどの大酒を飲む事も出来たし、もともとお金は無いものとおきらめて、」と分別ありげな事を言いながらも、明日からの暮しを思うと、地獄へまっさかさまに落ち込む心地こころちで、「ああ、それにしても、一夜のうちに笑つたり泣いた

り、なんてまあ馬鹿らしい身の上になったのだろう。」と鼻をすする。

女房はたまらず泣き崩れて、

「いいなぶりものにされました。百両くださると見せかけて、そつとお持ち帰りになって、いまごろは赤い舌を出して居られるのに違いない。ええ、十人が十人とも腹を合せて、あたしたちに百両を見せびらかし、あたしたちが泣いて拝む姿を楽しみながら酒を飲もうという魂胆だったのですよ。人を馬鹿にするにもほどがある。あなたは、口惜しくないのですか。あたしはもう恥ずかしくて、この世に生きて居られない。」

「恩人の悪口は言うな。この世がいやになったのは、わしも同様。しかし、人を恨んで死ぬのは、地獄の種だ。お情の百両をわが身の油断から紛失した申しわけに死ぬのなら、わしにも覚悟はあるが。」

「理窟はどうだって、いいじゃないの。あたしは地獄へ落ちたっていい。恨み死を致します。こんなひどい仕打ちをされて、世間のもの笑いになってなお生き延びるなんて事はどうも出来ません。」

「よし、もう言うな。死にやいいんだ。かりそめにも一夜の恩人たちを訴えるわけにもいかず、いや疑う事さえ不埒な事だ、さりとてこのまま生き延びる工夫もつかず、女房、何

も言わずに、わしと一緒に死のうじやないか。この世ではそなたにも苦勞をかけたが、夫婦は二世と言うぞ。」

一寸さきは闇の世の中、よろこびの宴の直後に、徳兵衛夫婦は死ぬる相談、二人の子供も、道づれと覚悟を極め、女房は貧のうちにも長持の底に残してあつた白小袖しろこそでに身を飾り、鏡に向い若い時から人にほめられた黒髪を撫なでつけながら、まことに十九年のなじみ此のあけぼのの夢と歎なげき、氣を取り直して二人の子供をしずかに引起せば、上の女の子は、かかさま、もうお正月か、と寝呆ねぼけ、下の男の子は、坊の独楽こまはきよう買つてくれるかと言いう。夫婦は涙に目くらみ、ものも言えず、子供を仏壇の前に坐らせ、わななきわななき御燈明おしょうみょうをあげ、親子四人、先祖の靈に手を合せて、いまはこれまでと思いうところに、子守女どたばたと走り出て、二人の子供を左右にひしとかかえて頼たのずりして、あんまりだ、あんまりだ、旦那だんなさまたちは何をなさるだ、われはさつきからお前様たちの話を残らず聞いていただ、死ぬならお前様たちだけで死ねばいいだ、こんな可愛かわいい坊ちやま嬢ちやまに何の罪とがあるだ、むごい親だ、あんまりだ、坊ちやま嬢ちやまは、おらがもらつて育てるだ、死ぬならお前様たちだけでさつきと死ねばいいだ、とあたりはばからぬ大声で泣きわめいて、隣近所の人もその騒さわぎに起き出して、夫婦の自害もうやむやになり、顔役は

やがて事情を聞いて驚き、これは大事とひとり思案し、いかにも夫婦の言うとおり、あの夜われら十人のほか部屋に出入りした人は無し、小判が風に吹き飛んだという例も聞かず、まさかわれら腹黒くしめし合せ、あの夫婦をなぶりものにするなんてのは滅相めつそうも無い事、十人が十人とも義に勇んであのいそがしい年末の一夜、十両の合力ごうりきを気前よく引受けたのだ、誰をも疑うわけに行かぬ、下手な事を言い出したら町内の大騒動、わが身の潔白を示そうとして腹を切る男など出て来ないとも限らぬ、さりとて百両といえ少からぬ金額、あの夫婦の行末も気の毒、このまま捨て置くわけにも行くまい、とにかくこの事件はわれらが手に余ると分別を極め、ひそかに役人に訴え申し、金の詮議せんぎを依頼した。

この不思議な事件の吟味を取扱った人は、時の名判官板倉殿、年内余日も無く皆々渡世のさわりもあるべし、正月二十五日に詮索をはじめ、そのあいだ、かの十人の者ひとりも他国つかまつ仕るな、という仰せおほがあり、やがて初春の二十五日に、お役所からお達しがあり、かの十人の者ども各々おのおのその女房を召連れてまかり出さずべし、もし女房無き者は、その姉妹、あるいは姪めい伯母、かねて最も近親の女をひとり同道して出頭致すべしとの上意。情をかけてこんな迷惑、親爺おやしの遺言に貧乏人とは附合うなどあったが、なるほどこのところだ、十両の大金を捨て、そのうえお役所へ呼び出されるとはつまらぬ、とかく情は損のもの

と也、と露骨な卑しい愚痴を言うものもあり、とにかく女房を連れておそるおそるお白洲しろすに出ると、板倉殿は笑いながら十人の者に鬪引きくじをさせて、一、二の順番をきめ、その順序のとおりにに十組の名を大きな紙に書きしたためて番附を作り、お役所の前に張出させて、さて威儀を正していかめしく申し渡すよう、

「このたび百両の金子紛失の件、とにかくにも、そちたちの過怠、その場に居合せながら大金の紛失に気附かざりしとは、察するところ、意地汚く酒を過し、大酔に及んだがためと思われる。飲酒の戒いましめもさる事ながら、人の世話をするなら、素知らぬ振りしてあつさりやったらよからう。救われた人を眼の前に置いてしつこく、酒など飲んでおのれの慈善をたのしむなどは浅間しい。早く夫婦二人きりにさせて諸支払いの算用をさせるようにしむけてやるのが、まことの情だ。なまなかの情は、かえって人を罪におとす。以後は気を付けよ。罰として、きょうからあの表に張り出してある番附の順序に従って一日に一組ずつ、ここにある太鼓に棒をとおして、それぞれ女房と二人でかつぎ、役所の門を出て西へ二丁歩いて、杉林すぎばやしの中を通り抜け、さらに三丁、畑の間の細道を歩き、さらに一丁、坂をのぼって八幡宮はちまんぐうに参り、八幡宮のお札ふだをもらって同じ道をまっすぐに帰って来るよう、固く申しつける。」との事で、一同これは世にためし無き異なお仕置きと首をかしげ

たが、おかみのお言いつけなれば致し方なく、ばかばかしくもその日から、夫婦で太鼓を
 かついで八幡様へお参りして来なければならなくなった。耳ざとい都の人にはいち早くこ
 の珍妙の裁判の噂がひろまり、板倉殿も耄碌したか、紛失の金子の行方も調べずに、た
 だ矢鱈に十人を叱つて太鼓をかつがせお宮参りとは、滅茶苦茶だ、おおかた智慧者の板倉
 殿も、このたびの不思議な盗難には手の下し様が無く、やけっぱちで前代未聞の太鼓のお
 仕置きなど案出して、いい加減にお茶を濁そうという所存に違いない、と物識り顔で言う
 男もあれば、いやいやそうではない、何事につけても敬神崇仏、これを忘れるなという深
 いお心、むかし支那に、夫婦が太鼓をかついでお宮まいりをして親の病気の平癒を祈願し
 たという美談がある、と真面目な顔で嘘を言う古老もあり、それはどんな書物に出ていま
 す、と突込まれて、それは忘れたがとにかくある、と平気で嘘の上塗りをして、年寄りの
 話は黙つて聞け、と怒つてぎよろりと睨み、とにかく都の評判になり、それ見に行けとお
 役所の前に押しかけ、夫婦が太鼓をかついでしずしずと門から出て来ると、わあつと歓声
 を挙げ、ばんざいと言う者もあり、よう御兩人、やけます、と黄色い声で叫ぶ通人もあり、
 いずれも役人に追い払われ、このたびのお仕置きは、諸見物の立寄る事かたく御法度、と
 きびしく申しわたされ、のこり惜しそうに、あとを振り返り振り返り退散して、夫婦はそ

れどころで無く大不平、なんの因果で、こんな太鼓をかついでこのこ歩かなければならぬのか、思えば思うほど、いまいまして、ことにも女は、はじめから徳兵衛の事などかくべつ可哀想かわいそうとも思わず、一銭の金でも惜しい大晦日おおみそかに亭主が勝手に十両などという大金を持ち出し、前後不覚に泥酔して帰宅して、何一ついいことが無かった上に亭主と共に白洲に呼び出され、太鼓なんか担かつがせられて諸人の恥さらしになるのだから、面白くない事おびただし。おまけにこの太鼓たるや、気まりの悪いくらい真赤な塗胴で、天女の舞う図の金蒔きんまきえ絵がしてあつて、陽ひを受けて燦さんぜん然と輝き、てれくさくつて思わず顔をそむけたいくらい。しかも大きさは四斗樽しとたるほどあつて、棒を通して二人でかついでも、なかなか重い。女房はじめは我慢して神妙らしく担いでいても、町はずれに出て、杉林にさしかかる頃からは、あたりに人ひとりいないし、そろそろ愚痴が出て来る。

「ああ、重い。あなたは、どうなの？ 重くないの？ ばかにうれしそうに歩いているわね。お祭りじゃないんですよ。子供じゃあるまいし、こんな赤い太鼓をかついでお宮まいりだなんて、板倉様も意地が悪い。もうもう、あたしは、人の世話なんてごめんですよ。あなたたちは、人の世話にかこつけて、お酒を飲んで騒ぎたいのでしょうか？ ばかばかしい。おまけにこんな赤い太鼓をかつがせられて、いい見せ物にされて、——」

「まあ、そう言うな。ものは考え様だ。どうだい、さっきの、お役所の前の人出は。わしは生れてから、あんなに人にはや囃された事は無い。人気があるぜ、わしたちは。」

「何を言つてるの。道理であなたは、けさからそわそわして、あの着物、この着物、と三度も着かえて、それから、ちよつと薄化粧なさつてたわね。そうでしょう？ 白状しなさい。」

「馬鹿な事を言うな。馬鹿な。」と亭主はろうばい狼狽して、「しかし、いい天気だ。」とよそ話をした。

また翌日の一組は、れいの発起人の顔役とその十八の娘。

「お父さん、」と十八の娘は、いまは亡なき母にかわつて家事の担当、父の身のまわりの世話を焼いているので、鼻息が荒い。「亡なくなったお母さんが、あたしたちのこんないいか恰つこ好うを見て、草葉の蔭かげで泣いていらつしやるでしょうねえ。お父さんは、まあ、自業自得で仕方がないとしても、あたしにまで、こんな赤い太鼓の片棒かつがせて、チンドン屋みたいな事をさせてさ、お母さんはきつと、お父さんをうらんで、化けて出るわよ。」

「おどかしちゃいけねえ。何も、わしだつて好きでかついでいるわけじゃないし、また、年頃のお前にこんな判じ物みたいなものを担がせるのも、心苦しいとは思っている。」

「あんな事を言っている。心苦しいだなんて、そんな気のきいた言葉はどこで覚えて来たの？ おかしいわよ。お父さんには、この太鼓がよく似合っているよ。お父さんは派手好きだから、赤いものが、とてもよく似合うわ。こんど、真赤なお羽織を一枚こしらえてあげましょうね。」

「からかつちやいけねえ。だるまじやあるまいし、赤い半纏はんでんなんてのはお祭りにだつて着て出られるわけのものじゃない。」

「でも、お父さんは年中お祭りみたいにそわそわしている、あんなのをお祭り野郎ってんだと陰口たたいていた人があつたわよ。」

「誰だだれ、ひでえ奴だやつ、誰がそんな事を言つたんだ。そのままにはして置けねえ。」

「あたしよ、あたしが言つたのよ。何のかのと近所に寄合いをこしらえさせてお祭り騒ふざぎをしようたくらんでばかりいるんだもの。いい気味だわ。ばちが当つたんだわ。お奉ぶぎよ行様は、やっぱりえらいな。お父さんのお祭り野郎を見抜いて、こらしめのため、こんな真赤なお祭りの太鼓をかつがせて、改心させようと思つていらつしやるのに違いない。」

「こん畜生！ 太鼓をかついでいなければ、ぶん殴つてやるんだが、えい、徳兵衛ふびんさに、持前の親分肌はだのところを見せてやつたばかりに、つまらねえ事になった。」

「持前だつて。親分肌だつて。おかしいわよ、お父さん。自分でそんな事を言うのは、耄碌の証拠よ。もつと、しつかりしなさいね。」

「この野郎、黙らんか。」

またその翌日の夫婦は、

「あなたも、しかし、妙な人ですね。ふだんあんなにけちで、お客さんの煙草たばこばかり吸っているほどの人が、こんどに限つて、馬鹿にあつさり十両なんて大金を出したわね。」

「そりやあね、男の世界はまた違ったものさ。義を見てせざるは勇なき也。常日つねひごろ頃の儉約も、あのような慈善に備えて、——」

「いい加減を言つてるわ。あたしや知っていますよ。あなたは前から、あの徳兵衛さんのおかみさんを、へんにほめていらつしやつたわね。思おぼしめ召しがあるんじゃない？ いいとしをして、まあ、そんな鬼がくしやみして自分でおどろいてるみたいな顔をして、思召あきしも呆れるじゃないの、いいえ、あたしや知っていますよ、あなた、としを考えてごらんない、孫が三人もあるくせに、お隣りのおかみさんにへんな色目を使つたりなんかして、あなたはそれでも人間ですか、人間の道を知っているのですか、いいえ、あたしには、わかつていますよ、おかげでこんな重い太鼓なんか担がせられて、あいたたた、あたしやま

た神経痛が起つて来た。あしたから、あなたが、ごはんをたくのですよ。薪まきも割つてもらわなくちやこまるし、糠味ぬかみそ噌もよく掻かきまわして、井戸は遠いからいい気味だ、毎朝手桶ておけに五はいくんで来て台所の水甕みずがめに、あいたたた、馬鹿な亭主を持ったばかりに、あたしは十年寿命をちぢめた。」と喚わめき、その翌あぐる日の組も同じ事、いずれも女は不平たらたら、男はひとしく口汚くののしられて、女子と小人は養がたい難しと眼をかたくつぶつて観念する者もあり、家へ帰つて矢庭やにわに女房をぶん殴つて大立廻りを演じ離縁騒のろぎをはじめた者もあり、運悪く大雪の日の番に当つた一組は、ひとしお女房の歎なげきやら呪のろいやらが猛烈を極め、共に風邪をひき、家へ帰つて床を並べて寝込んでしまつて咳せきにむせかえりながらも烈はげしく互いに罵倒ばとうし合い、太鼓の仕置きも何の事は無い、女の口の悪さを暴露したという結果に終つただけのようであつた。十組のお仕置きが全部すんでから、また改めて皆にお呼び出しがあり、一同不機嫌ふきげんのふくれつらでお白州にまかり出ると、板倉殿はにこにこ笑い、「いや、このたびは御苦勞であつた。太鼓の担かぎ賃として、これは些さ少しょうながら、それがしからの御礼だ。失礼ではあろうが、笑つて受取つてもらいたい。風邪をひいて二、三日寝込んだ夫婦もあつたとか、もはや本服したろうが、お見舞いとして別に一封包んで置いた。こだわり無く収めていただきたい。このたび仲間の窮迫を見かねて金十両ずつ出し合

った救つたとは近頃めずらしい美拳、いつまでもその心掛けを忘れぬよう。それにもか
 わらず、あのような重い太鼓をかつがせ、その上、男どもは、だいぶ女連にやられていた
 ようで、気の毒に思っている。まあ、何事も水に流して、この後は仲良く家業にはげむよ
 う。ところで、この中の一組、太鼓をかついで杉林にさしかかった頃から女房が悪鬼に憑つ
 かれたように物狂わしく騒ぎ立て、亭主の過去のふしだらを一つ一つ挙げてののしり、亭
 主が如何いかになだめても静まらず、いよいよ大声で喚き散らすゆえ、亭主は困却し果て、杉
 林を抜けて畑にさしかかった頃、あたりをはばかりる小さい声で、騒ぐな、うらむな、太鼓
 の難儀もいましばしの辛抱、百両の金は、わたしたちのもの、家へ帰ってから戸棚とだなの引出し
 をあけて見ろ、と不思議な事を言った。言った者には、覚えのある筈はず。いや、それがしは
 神通力も何も持っていない。あの赤い太鼓は重かったであろう。あの中に小坊主こぼうずひとりい
 れて置いた。委細はその小坊主から聞いて知った。言った者を、いまここで名指しをする
 のは容易だが、この者とて、はじめは真の情愛を以てもつこのたびの美拳に参加したのに違
 なく、酒の酔いに心が乱れ、ふつと手をのばしただけの事と思われる。命はたすける。お
 かみの慈悲に感じ、今夜、人目を避けて徳兵衛の家の前にかの百両の金子を捨てよ。然しか
 後は、当人の心次第、恥を知る者ならば都から去れ。おかみに於おいては、とやかくの指図

無し。一同、立て。以上。」

（本朝桜陰比事、卷一の四、太鼓の中は知らぬが因果）

粹人

「ものには堪かん忍にんという事がある。この心掛けを忘れてはいけない。ちつとは、つらいだろうが我慢をするさ。夜の次には、朝が来るんだ。冬の次には春が来るさ。きまり切っているんだ。世の中は、陰陽、陰陽、陰陽と続いて行くんだ。仕合せと不仕合せとは軒続きさ。ひでえ不仕合せのすぐお隣りは一陽来復の大吉さ。ここの道理を忘れちゃいけない。来年は、これあ何としても大吉にきまつた。その時にはお前も、芝居の変り目ごとかごに駕籠かごで出掛けるさ。それくらいの贅ぜいたく沢たくは、ゆるしてあげます。かまわないから出掛けなさい。」などと、朝飯を軽くすましてすぐ立ち上り、つまらぬ事をもっともらしい顔おみそかして言いながら、そそくさと羽織をひっかけ、脇差わきざしさし込み、きようは、いよいよ大晦日おみそか、借金だらけのわが家から一刻も早くのがれ出るふんべつ。家に一銭でも大事の日なのに、手箱の底を搔かいて一歩金いちぶぎん二つ三つ、小粒銀三十ばかり財布に入れて懐中にねじ込み、「お金は少し残して置いた。この中から、お前の正月のお小遣いをのけて、あとは借金取りに少しづつばらまいてやって、無くなったら寝ちまえ。借金取りの顔が見えないように、あちら

向きに寝ると少しは気が楽だよ。ものには堪忍という事がある。きょう一日の我慢だ。あちら向きに寝て、死んだ振りでもしているさ。世の中は、陰陽、陰陽。」と言い捨てて、小走りに走って家を出た。

家を出ると、急にむずかしき顔して衣紋えもんをつくろい、そり身になつてそろりそろりと歩いて、物持の大旦那おおだんながしもじもの景気、世のうつりかわりなど見て廻まわつているみたいな余裕ありげな様子である。けれども内心は、天神様や観音様、南無八幡大菩薩なむはちまんたいぼさつ、不動明王まりしてん摩利支天まりしてん、べんてん大黒、仁王におうまで滅茶苦茶めっちゃにありとあらゆる神仏のお名を称とえて、あわれきよう一日の大難のがれさせ給たまえ、たすけ給えと念じて眼めのさき真暗、全身鳥肌とりはだ立つて背筋から油汗がわいて出て、世界に身を置くべき場所も無く、かかる地獄の思いの借財者の行きつくところは一つ。花街である。けれどもこの男、あちこちの茶屋に借りがある。借りのある茶屋の前は、からだをななめにして蟹かにのように歩いて通り抜け、まだいちども行つた事の無い薄汚い茶屋の台所口からぬつとはいり、

「婆はいるか。」と大きく出た。もともとこの男の人品じんぴん骨柄こつがらは、いやしくない。立派な顔をしている男ほど、借金を多くつくつていゝものである。悠然ゆうぜんと台所にあがり込み、

「ほう、ここはまだ、みそかの支払いもすまないと見えて、あるわ、あるわ、書附かきつけが。」

ここに取りちらかしてある書付け、全部で、三、四十両くらいのものか。世はさまさま、
 三、四十両の支払いをすます事も出来ずに大晦日を迎える家もあり、また、わしの家
 のように、呉服屋の支払いだけでも百両、お金は惜しいと思わぬが、奥方のあんな衣裳
 道楽は、大勢の使用人たちの手前、しめしのつかぬ事もあり、こんどは少しひかえてもら
 わなくては困るです。こらしめのため、里へかえそうかなどと考えているうちに、あい
 くと懐妊で、しかも、きょうこの大晦日のいそがしい中に、産気づいて、早朝から家中
 が上を下への大混雑。生れぬさきから乳母を連れて来るやら、取揚婆を三人も四人も集
 めて、ばかばかしい。だいたい、大長者から嫁をもらったのが、わしの不覚。奥方の里か
 ら、けさは大勢見舞いに駈けつけ、それ山伏、それ祈禱、取揚婆をこつちで三人も四人も
 呼んで来てあるのに、それでも足りずに医者連れて来て次の間に控えさせ、これは何や
 ら早め薬とかいって鍋でぐつぐつ煮てござる。安産のまじないに要るとか言つて、子安
 貝、海馬、松茸の石づき、何の事やら、わけのわからぬものを四方八方に使いを走ら
 せて取寄せ、つくづく金持の大袈裟な騒ぎ方にあいそがつきました。旦那様は、こんな時
 には家にいぬものだと言われて、これさいわい、すたころここへ逃げて来ました。まるで
 これでは、借金取りに追われて逃げて来たような形です。きょうは大晦日だから、そんな

男もあるでしょうね。気の毒なものだ。いったいどんな気持だろう。酒を飲んでも酔えないでしょうね。いやもう、人さまさま、あはははは。」と力の無い笑声を発し、「時にどうです。言うも野暮だが、もちろん大晦日の現金払いで、子供の生れるまで、ここで一日あそばせてくれませんか。たまには、こんな小さい家で、こっそり遊ぶのも悪くない。おや、正月の鯛たいを買いましたね。小さい。家が小さいからって遠慮しなくていいでしょう。何も縁起えきものだ。もつと大きいのを買ったらどう？」と軽く言つて、一歩金一つ、婆の膝ひざの上に投げてやった。

婆は先刻から、にこにこ笑つてこの男の話に相あいづち槌づちを打っていたが、心の中で思うよう、さしてさて馬鹿ばかな男だ、よくもまあそんな大嘘おおうそがつけたものだ、お客の口先を真に受けて私たちの商売が出来るものか。酔狂のお旦那がわざと台所口からはいつて来て、私たちがまごつかせて喜ぶという事も無いわけではないが、眼つきが違いますよ。さつき、台所口から覗のぞいたお前さんの眼つきは、まるで、とがにんの眼つきだった。借金取りに追われて来たのさ。毎年、大晦日になると、こんなお客が二、三人あるんだ。世間には、似たものがたくさんある。玉虫色のお羽織しらつかに白柄しらつかの脇差、知らぬ人が見たらお歴々と思うかも知れないが、この婆の目から見ると無用の小細工。おおかた十五も年上の若い女にようぼう房ぼうをわ

ずかの持参金を目当てにもらい、その金もすぐ使い果し、ぶよぶよ太つて白髪頭の女房が横坐りに坐つて鼻の頭に汗を掻きながら晩酌の相手もすさまじく、稼ぎに身がはいらず質八置いて、もつたいなくも母親には、黒米の碓をふませて、弟には煮豆売りに歩かせ、売れ残りの酸くなつた煮豆は一家のお惣菜、それも母御の婆さまが食べすぎると言つて夫婦でじろりと睨むやつさ。それにしても、お産の騒ぎとは考えた。取揚婆が四人もつめかけ、医者は次の間で早め薬とは、よく出来た。お互いに、そんな身分になりたいものさね。大阿呆め。お金は、それでもいくらか持つていようだし、現金払いなら、こちらは客商売、まあ、ごゆるりと遊んでいらつしやい。とにかく、この一步金、いただいて置きましょう、贖金でもないようだ。

「やれうれしや、」と婆はこぼれるばかりの愛嬌を示して、一步金を押しいただき、「鯛など買わずに、この金は亭主に隠して置いて、あたしの帯でも買しましょう。おほほほ。ことしの年の暮は、貧乏神と覚悟していたのに、このような大黒様が舞い込んで、これで来年中の仕合せもきまりました。お札を申し上げますよ、旦那。さあ、まあ、どうぞ。いやですよ、こんな汚い台所などにお坐りになっていらしては。洒落すぎますよ。あんまり恐縮で冷汗が出るじやありませんか。なんぼ何でも、お人柄にかかわりますよ。ど

うも、長者のお旦那に限って、台所口がお好きで、困ってしまいます。貧乏所帯の台所がよつぽどもの珍らしいと見える。さ、粹すいにも程度がございます。どうぞ、奥へ。」世におそろしきものは、茶屋の婆のお世辞である。

お旦那は、わざとはに cand 頭を搔き、いやもう婆にはかなわぬ、と言つてなよなよと座敷に上り、

「何しろたべものには、わがままな男ですから、そこは油断なく、たのむ。」と、どうにもきざな事を言つた。婆は内心いよいよ呆あきれて、たべものの味がわかる顔かよ。借金で首がまわらず青息吐息で、火を吹く力もないような情ない顔つきをしている癖に、たべものにわがままは大笑いだ。かゆの半杯も喉のどには通るまい。料理などは、むだな事だ、と有合せの卵二つを銅壺どうこに投げ入れ、一ばん手数のかからぬ料理、うで卵にして塩を添え、酒と一緒に差出せば、男は、へんな顔をして、

「これは、卵ですか。」

「へえ、お口に合いますか、どうですか。」と婆は平然たるものである。

男は流石さすがに手をつけかね、腕組みして洗面せんめんつくり、

「この辺は卵の産地か。何か由緒ゆいしよがあれば、聞きたい。」

婆は嘖き出したいのを怵^{こら}えて、

「いいえ、卵に由緒も何も。これは、お産に縁があるかと思つて、婆の志。それにまた、おいしい料理の食べあきたお旦那は、よく、うで卵など、酔興に召し上りますので、おほほ。」

「それで、わかつた。いや、結構。卵の形は、いつ見てもよい。いつその事、これに目鼻をつけてもらいましたようか。」と極めてまずい洒落を言つた。婆は察して、売れ残りの芸者ひとりを呼んで、あれは素性の悪い大馬鹿の客だけれども、お金はまだいくらか持つているようだから、大晦日の少しは稼ぎになるだろう、せいぜいおだててやるんだね、と小声で言いふくめて、その不細工の芸者を客の座敷に突き出した。男は、それとも知らず、

「よう、卵に目鼻の御入来。」とはしやいで、うで卵をむいて、食べて、口の端に卵の黄味をくつつけ、或^{ある}いはきようは惚^ほれられるかも知れぬと、わが家の火の車も一時わすれて、お酒を一本飲み、二本飲みしているうちに、何だかこの芸者、見た事があるような気がして来た。馬鹿ではあるが、女に就いての記憶は悪強い男であつた。女は、大晦日の諸支払いの胸算用をしながらも、うわべは春の如^{ごと}く、ただ矢鱈^{やたら}に笑つて、客に酒をすすめ、

「ああ、いやだ。また一つ、としをとるのよ。ことしのお正月に、十九の春なんて、お客

さんにからかわれ、羽根を突いてもたのしく、何かいい事もあるかと思つて、うかうか暮
しているうちに、あなた、一夜明けると、もう二十はたちじやないの。はたちなんて、いやねえ。
たのしいのは、十代かぎり。こんな派手な振ふり袖そでも、もう来年からは、おかしいわね。あ
あ、いやだ。」と帯をたたいて、悶もたえて見せた。

「思い出した。その帯をたたく手つきで思い出した。」男は記憶力の馬鹿強いところを発
揮した。「ちようどいまから二十年前、お前さんは花屋の宴会でわしの前に坐り、いまど
同じ事を言い、そんな手つきで帯をたたいたが、あの時にもたしか十九と言つた。それか
ら二十年経たっているから、お前さんは、ことし三十九だ。十代もくそもない、来年は四十
代だ。四十まで振袖を着ていたら、もう振袖に名残なごりも無からう。からだが小さいから若く
見えるが、いまだに十九とは、ひどいじゃないか。」と粹人も、思わず野暮の高声になつ
て攻めつけると、女は何も言わずに、伏目になつて合掌した。

「わしは仏さんではないよ。縁起でもない。拝むなよ。興覚めるね。酒でも飲もう。」手
をたたいて婆を呼べば、婆はいち早く座敷の不首尾に氣附いて、ことさらに陽気に笑いな
がら座敷に駈けつけ、

「まあ、お旦那。おめでとうございます。どうしても、御男子ときまりました。」

「何が。」と客はげげんな顔。

「のんきでいらつしやる。お宅のお産をお忘れですか。」

「あ、そうか。生れたか。」何が何やら、わけがわからなくなつて来た。

「いいえ、それはわかりませんが、いまね、この婆がたみざん置算うらなで占つてみたところ、あなた、三度やり直しても同じ事、どうしても御男子。私の占いは当たりますよ。旦那、おめでとうございます。」と両手についてお辞儀をした。

客は、まぶしそうな顔をして、

「いやいや、そう改つてお祝いを言われても痛みいる。それ、これはお祝儀しゅうぎ。」と、またもや、財布から、一歩金一つ取り出して、婆の膝元に投げ出した。とても、いまいましい気持である。

婆は一歩金を押しいただき、

「まあ、どうしましょうねえ。暮から、このような、うれしい事ばかり。思えば、きょう、あけがたの夢に、千羽の鶴つるが空に舞い、四海しかいなみ波押しわけて万亀ばんきが泳ぎ、」と、うつとりと上目使いして物語をはじめながら、お金を帯の間にしまい込んで、「あの、本当でございませよ、旦那。眼がさめてから、やれ不思議な有難い夢よ、とひどく気がかりになってい

たところにあなた、いきなお旦那が、お産のすむまで宿を貸せと台所口から御入来ですものねえ、夢は、やつぱり、正夢まさゆめ、これも、日頃のお不動信心のおかげでございましょうか。おほほ。」と、ここを先途せんじと必死のお世辞。

あまりと言えば、あまりの齒の浮くような見え透いたお世辞ゆえ、客はたすからぬ気持ちで、

「わかった、わかった。めでたいよ。ところで何か食うものはないか。」と、にがにがしげに言い放った。

「おや、まあ、」と婆は、大袈裟にのけぞって驚き、「どうかと心配して居おりましたのに、卵はお気に召したと見え、残らずおあがりになってしまった。すいなお方は、これだから好きさ。たべものにあきたお旦那には、こんなものが、ずいぶん珍らしいと見える。さ、それでは、こんど何を差し上げましょうか。数の子など、いかが？」これも、手数がかからなくていい。

「数の子か。」客は悲痛な顔をした。

「あら、だって、お産にちなんで数の子ですよ。ねえ、つぼみさん。縁起ものですよものねえ。ちよつと洒落た趣向じやありませんか。お旦那は、そんな酔興なお料理が、いちばん

好きだつてさ。」と言ひ捨てて、素早く立ち去る。

旦那は、いよいよ、むずかしい顔をして、

「いまあの婆は、つぼみさん、と言つたが、お前さんの名は、つぼみか。」

「ええ、そうよ。」女は、やぶれかぶれである。つんとして答える。

「あの、花の蕾つぼみの、つぼみか。」

「くだいわねえ。何度言つたつて同じじやないの。あなただつて、頭の毛が薄いくせに何を言つてるの。ひどいわ、ひどいわ。」と言つて泣き出した。泣きながら、「あなた、お金ある?」と露骨な事を口走つた。

客はおどろき、

「すこしは、ある。」

「あたしに下さい。」色気も何もあつたものでない。「こまっているのよ。本当に、ことしの暮ほど困つた事は無い。上の娘をよそにかたづけ、まず一安心と思つていたら、それがあなた、一年経つか経たないうちに、乞食こじきのような身なりで赤子をかかえ、四、五日まえにあたしのところへ帰つて来て、亭主が手拭てぬぐいをさげて銭湯へ出かけて、それつきり他の女ほかのところへ行つてしまつた、と泣きながら言うけれど、馬鹿らしい話じやありません

んか。娘もぼんやりだけど、その亭主もひどいじゃありませんか。育ちがいいとかいつて、のつぱりした顔の、俳諧はいかいだか何だかお得意なんだそうで、あたしは、はじめっから気がすすまなかつたのに、娘が惚れ込んでしまっているものだから、仕方なく一緒にさせたら、銭湯へ行つてそのまま家へ帰らないとは、あんまり人を踏みつけていますよ。笑い事じゃない。娘はこれから赤子をかかえて、どうなるのです。」

「それでは、お前さんに孫もあるのだね。」

「あります。」とにこりともせず言い切つて、ぐいと振り挙げた顔は、凄すげかつた。「馬鹿にしないで下さい。あたしだって、人間のはしくれです。子も出来れば、孫も出来ます。なんの不思議も無いじゃないか。お金を下さいよ。あなた、たいへんなお金持だつていうじゃありませんか。」と言つて、頬ほおをひきつらせて妙に笑つた。

粹人には、その笑いがこたえた。

「いや、そんなでもないが、少しなら、あるよ。」とうろたえ気味で、財布から、最後の一步金を投げ出し、ああ、いまごろは、わが家の女房、借金取りに背を向けて寝て、死んだ振りをしてるのであろう、この一步金一つでもあれば、せめて三、四人の借金取りの笑顔を見る事は出来るのに、思えば、馬鹿な事をした、と後悔やら恐怖やら焦しょうそう躁そうやらで、

胸がわくわくして、生きて居られぬ気持になり、

「ああ、めでたい。婆の占いが、男の子とは、うれしいね。なかなか話せる婆ではないか。」

とかすれた声で言つてはみたが、蕾は、ふんと笑つて、

「お酒でもうんと飲んで騒ぎましようか。」と万事を察してお銚子を取りに立つた。

客はひとり残されて、暗憺、憂愁、やるかたなく、つい、苦しまぎれのおならなど出て、それもつまらない思いで、立ち上つて障子をあけて匂いを放散させ、

「あれわいさのさ。」と、つきもない小唄を口ずさんで見たが一向に気持が浮き立たず、

やがて、三十九歳の蕾を相手に、がぶがぶ茶碗酒をあおつても、ただ兩人まじめになるばかりで、顔を見合せては溜息をつき、

「まだ日が暮れぬか。」

「冗談でしょう。おひるにもなりません。」

「さてさて、日が永い。」

地獄の半日は、竜宮の百年千年。うで卵のげつぱばかり出て悲しき限りなく、

「お前さんはもう帰れ。わしはこれから一寝入りだ。眼が覚めた頃には、お産もすんでい

るだろう。」と、いまは、わが嘘にみずから苦笑し、ごろりと寝ころび、

「本当にもう、帰ってくれ。その顔を二度とふたたび見せてくれるな。」と力無い声で歎願たんがんした。

「ええ、帰ります。」と蓄は落ちついて、客のお膳ぜんの数の子を二つ三つ口にほうり込み、
「ついでに、おひるごはんを、ここでごちそうになりましょう。」と言った。

客は眼をつぶつても眠られず、わが身がぐるぐる大渦卷おおうずまきの底にまき込まれるような気持で、ばたんばたと寝返りを打ち、南無阿弥陀なむあみだ、と思わずお念仏が出た時、廊下に荒き足音がして、

「やあ、ここにいた。」と、丁稚てつちらしき身なりの若い衆二人、部屋に飛び込んで来て、

「旦那、ひどいじゃないか。てつきり、この界隈かいわいと見込みをつけ、一軒一軒さがして、いやもう大骨折き。無いものは、ただこうとは申しませんが、こうしてのんきそうに遊ぶくらいのお金があったら、少しはこつちにも廻してくれるものですよ。ええと、ことしの勘定は、」と言つて、書付けを差出し、寝ているのを引起して、詰め寄つて何やら小声で談判ひとしきりの後、財布の小粒銀ありったけ、それに玉虫色のお羽織、白柄しろつかの脇差、着物までも脱がせて、若衆二人それぞれ風呂敷ふろしきに包んで、

「あとのお勘定は正月五日までに。」と言ひ捨て、いそがしそうに立ち去つた。

粹人は、下着一枚の奇妙な恰好かつこうで、気味わるくにやりと笑い、

「どうもねえ、友人から泣きつかれて、判を押してやったが、その友人が破産したとやら、こちらまで、とんだ迷惑。金を貸すとも、判は押すな、とはここのところだ。とかく、大晦日には、思わぬ事がしゅつたい致す。この姿では、外へも出られぬ。暗くなるまで、ここで一眠りさせていただきましょう。」と、これはまたつらい狸寝入りたぬきねい、陰陽、陰陽と念じて、わが家の女房と全く同様の、死んだ振りの形となつた。

台所では、婆と薺が、「馬鹿というのは、まだ少し脈のある人の事」と話合つて大笑いである。とかく昔の浪花ななわあたり、このような粹人とおそろしい茶屋が多かつたと、その昔にはやはり浪花の粹人のひとりであつた古老の述懐。

(胸算用むねざんよう、卷二の二、訛言うそも只は聞かぬ宿ただ)

遊興戒

むかし上方かみがたの三粹人、吉郎兵衛きちろべえ、六右衛門ろくえもん、甚太夫じんだゆうとて、としは若しわか、家に金あり、親はあまし、男振りもまんざらでなし、しかも、話にならぬ阿呆あほうというわけでもなし、三人さそい合つて遊び歩き、そのうちに、上方の遊びもどうも手ぬるく思われて来て、生き馬の目を抜くとかいう東国の荒っぽい遊びを風聞してあこがれ、或あるとし秋風に吹かれて江戸へ旅立ち、途中、大笑いの急がぬ旅をつづけて、それにしても世の中に美人は無い、色が白ければ鼻が低く、眉まゆがあざやかだと思えば顎あごが短い、いっそこうなれば女に好かれるよりは、きらわれない、何とかして思い切りむごく振られてみたいものさ、などと天を恐れぬ雑言ぞうごんを吐き散らして江戸へ着き、あちらこちらと遊び廻まわつても、別段、馬の目を抜く殺伐なけしきは見当らず、やはりこの江戸の土地も金次第、どこへ行つても下にも置かずもてなされ、甚はなはだ拍子抜けがして、江戸にもこわいもの無し、どこかに凄すげい魔性ませいのものはいないか、と懐手ふところして三人、つまらなそうな様子で、上野黒門くろもんより池いけの端はたのほうへぶらりぶらり歩いて、しんちゆう屋いぢえもんの市右衛門いちえもんとて当時は有名な金魚屋の店先にふ

と足をとどめ、中庭を覗けば綺麗な生簀が整然と七、八十もならば、一つ一つの生簀には清水が流れて水底には緑の藻がそよぎ、金魚、銀魚、藻をくぐり抜けて鱗を光らせ、中には尾鰭の長さ五寸以上のものもあり、生意気な三粹人も、その見事さには無邪気に眼を丸くして驚き、日本一の美人をここで見つけたと騒ぎ、なおも見ていると、その金魚を五両、十両の馬鹿高い値段で、少しも値切らず平気で買つて行く人が次々とあるので、やつぱり江戸は違う、上方には無い事だ、あの十両の金魚は大名の若様のおもちやであろうか、三日養つて猫に食われてそれでも格別くやしそうな顔もせずまたこの店へ来て買うのであるうな、いかさま武蔵野は広い、はじめて江戸を見直したわい、などと口々に勝手な事を言つて単純に興奮し、これを見ただけでも江戸へ来たかいがあつた、上方へのよい土産話が出来た、と互いによるこび首肯き合つてるところへ、賤しい身なりの小男が、小桶に玉網を持ち添えてちよこちよここと店へやつて来て、金魚屋の番頭にやたらにお辞儀をしてお追従笑いなどしている。小桶を覗いてみると無数のぼうぶらがうようよ泳いでいる。

「金魚のえさか。」とひとりに興覚め顔して呟いた。

「えさだ。」もうひとりも、溜息をついて言った。

何だか白けた真面目な気持ちになつてしまつた。たかが金魚を、一つ十両で平然と買つ

て行く人もあり、また一方では、その餌えきのぼうふら売って、ほそぼそと渡世している人もある。江戸は底知れずおそろしいところだ、と苦勞知らずの三粹人も、さすがに感無量の態ていであつた。

小桶に一ぱいのぼうふらを、たつた二十五文で買つてもらつて、それでも嬉うれしうに、金魚屋の下男にまで、それではまた、と卑いやしい愛あい嬌きようを振り撒まきいそいそと立ち去るその小男のうしろ姿を見送つてひとりが、

「おや、あれは、利左りざじゃないか。」と言つたので、他ほかの二人は、ぎよつとした。

月夜の利左という浮名を流し、それこそ男振りはよし、金はあり、この三粹人と共に遊んで四天王と呼ばれ、数年前に吉州という評判の名妓めいぎを請出うけだし、ふつと姿をかくした利左衛門えもん、それが、まさか、と思えども見れば見るほど、よく似ている。

「利左だ、間違いない。」とひとりは強く断定を下し、「あの右肩をちよつと上げて歩く癖は、むかしから利左の癖で、あれがまた小粹こさいだと言つて、わしにも右肩を上げて歩けとうるさくすすめる女があつて閉口した事がある。利左に違いない。それ、呼びとめろ。」

三人は走つて、ぼうふら売りをつかまえてみると、むぎんや、まさしく利左がなれの果。「利左、お前はひどい。吉州には、わしも少し惚ほれていたが、何もお前、そんな、わしは

お前を恨みに思つたりなんかしてやしないよ。黙つて姿を消すなんて、水くさいじやないか。」

と吉郎兵衛が言え、甚太夫も、

「そうよ、そうよ。どんなつらい事情があつたつて、一言くらいわしたちに挨拶して行くのが本当だぞ。困つた事が起つた時には、お互い様さ。茶屋酒のんで騒ぐばかりが友達じやない。見れば、ひでえ身なりで、まあ、これがあの月夜の利左かい。わしたちにたつた一言でも知らせてくれたら、こんな事になりはしなかつたのに、ぼうふら売りとは洒落が過ぎらあ。」と悪口を言いながら涙を流し、六右衛門は分別顔して、利左衛門の瘦せた肩を叩き、

「利左、でも、逢えてよかつた。どこへ行つたかと心配していたのだ。お前がいなくなつたら、淋しくてなあ。上方の遊びもつまらなくなつて、こうして江戸へ出て来たが、お前と一緒にないと、どこの遊びも面白くない。ここで逢うたが百年目さ。どうだい、これから、わしたちと一緒に上方へ歸つて、また昔のように四人で派手に遊ぼうじやないか。お金の事や何かは心配するな。口はぼつたいが、わしたち三人が附いている。お前の一生は引受けた。」

と頼もしげな事を言つたが、利左は、顔を青くしてふんと笑い、そつぽを向きながら、
「何を言つていやがる。人の世話など出来る面つらかよ。わざわざこの利左をなぶりに上方か
らやつて来たのか。御苦労な事だ。こつちは、これが好きでやっているのさ。かまわな
いでくれ。遊びの果は皆こんなものだ。ふん。いまにお前たちだつて、どんな事になるかわ
かつたものじゃない。一生引受けたは笑わせやがる。でもまあ昔の馴染なじ甲斐みがいに江戸の茶ちやわ
碗んざけ酒でも一ぱい振舞つてやろうか。利左は落ぶれてもお前たちのごちそうにはならんよ。
酒を飲みたかつたら附いて来い。あはは。」と空虚な笑い方をして、小桶を手にさげてす
たすた歩く。三人は、気まずい思いで顔を見合せ、とにかく利左の後を追つて行くと、利
左はひどく汚い居酒屋へのこのこはいつて行つて、財布をさかさ振り、

「おやじ、これだけある。昔の朋輩ほうばいにおごつてやるんだ。茶碗で四はい。」と言つて、
昔に交らず気前のいいところを見せたつもりで、先刻の二十五文を残らず投げ出せば、入
口でうろうろしている三人は、ああ、あの金は利左の妻子が今夜の米代としてあてにして、
いまごろは鍋なべを洗つて待つているだろうに、おちぶれても、つまらぬ意地みえと見栄みえから、け
ちでないところを見せたつもりかも知れないが、あわれなものだ、と暗然とした。

「おい、まごまごしてないで、ここへ腰かけて飲めよ。茶碗酒の味も忘れられぬ。」と口

をゆがめて苦笑いしながら、わざと下品にがぶがぶ飲み、手の甲で口のまわりをぐいとぬぐって、「ああ、うめえ。」とまんざら嘘うそでもないように低く呻うめいた。三人も、おそろおそろ店の片隅かたすみに腰をおろして、欠けた茶碗を持ち無言で乾かん盃ばいして、少し酔って来たので口も軽くなり、

「時に利左、いまでも、やはり吉州と？」

「いまでも、とは何だ。」と利左は言葉を荒くして聞きとがめ、「粹人らしくもねえ。口のききかたに気をつける。」と言って、すぐまた卑屈へいけつにやりと笑い、「その女ゆえに、御覽ごらんのとおりのおぼうふら売りさ。悪い事は言わねえ。お前たちもいい加減に茶屋遊びを切り上げたほうがいいぜ。上方一と言われた女も、手活ていけの花として眺ながめると、三日経たてば萎しおれる。いまじや、長屋の、かかになつて、ひとつき風呂ふろへ行かなくても平気でいる。」

「子供もあるのか。」

「あたりめえよ。間の抜けた事を聞くな。親にも似ねえ猿さるみたいな顔をした四つの男の子が、根つからの貧乏人の子らしく落ちついて長屋で遊んでいやがる。見せてやろうか。少しはお前たちのいましめになるかも知れねえ。」

「連れて行つてくれ。吉州にも逢いたい。」と吉郎兵衛は本音を吐いた。利左は薄気味悪

い微笑を頬ほおに浮べて、

「見たら、あいそが尽きるぜ。」と言ひ、蹠そうろうと居酒屋を出た。

谷中やなかの秋の夕暮は淋しく、江戸とは名ばかり、このあたりは大竹藪おおたけやぶ風にざわつき、鶯うぐいすならぬむら雀すずめの初音町はつねちようのはずれ、薄暗くじめじめした露路を通り抜けて、額におしめの滴しずくを受け、かぼちやの蔓つるを跨またぎ越え、すえ葉も枯れて生垣いけがきに汚くへばりついている朝顔の実一つ一つ取り集めている婆ばばの、この種を植えてまた来年のたのしみ、と来年どころか明日知れぬ八十あまりらしい見るかげも無き老軀ろうくを忘れて呟よぐいている慾よくの深さに、三人は思わず顔を見合せて呆あきれ、利左ひとりは何ともない顔をして小腰をかがめ、婆さま、その朝顔の実を一つ二つわしの家へもわけて下さいまし、何だか曇たむつてまいりましていけません、など近所のよしみ、有合せのつらいお世辞を言ひ、陰干しの煙草たばこをゆわえた細繩ほそなわの下をくぐつて突き当りのあばらやの、窓から四歳の男の子が、やあれ、ととさまが、ぜぜ持つてもどらしゃつた、と叫ぶもふびん、三人の足は一様に立ちすくんだ。利左は平氣を装まい、

「ここだ、この家だ。三人はいつたら、坐すわるところが無いぞ。」と笑ひ、「おい、お客さままだぞ。」と内儀に声を掛ければ、内より細き声して、

「そのお三人のうち、伊豆屋吉郎兵衛さま、お帰り下さいまし。そのお方には昔お情にあずかった事がございます。」という。吉郎兵衛へどもどして、

「いや、それはお固い。昔の事はさらりと水に流して。」と言え、利左も、くるしそうに笑い、

「そうだ、そうだ。長屋の嬢にお情もくそもあるものか。自惚ちやいけねえ。」とすさんだ口調で言い、がたぴし破戸をあけて三人を招き入れ、「座蒲団なんて洒落たものはねえぞ。お茶くらいは出す。」

女房は色青ざめ、ぼろの着物の裾をそそくさと合せて横坐りに坐つて乱れた髪を掻き上げ、仰向いて三人の顔を見て少し笑い、

「まあ。」と小さい声で言つたきり、お辞儀をするのも忘れている。亭主はいそがしうに狭い部屋を歩きまわり、仏壇の戸びらの片方はずれているのを引きむしり、菜切庖丁で打ち割つて、七輪にくべてお茶をわかし、先刻窓から顔を出していた子供はと見れば、いつの間にか部屋の隅の一枚蒲団にこぶ巻になつて寝ている。どうやらまっぱだかの様子で、唇を紫にしてがたがた寒さにふるえている。

「坊やは、寒そうだな。」と客のひとりが、つい口をすべらしたら、内儀は坐つたまま子

供のほうを振り返つて見て、「着物を着るのがいやなんです。妙な癖で、着物を着せてもすぐ脱いで、ああしてはだかだか寝るんです。疝かんの虫のせいでしょうよ。」とさり気なく言つたが、坊やは泣き声を出して、

「うそだ、うそだ。坊は、さつき溝とびへ落ちて、着るものが無くなったから、こうして寝かされて、着物のかわくのを待っているのだ。」という。内儀も気丈な女ながら、ここに到いたつてこらえかね、人前もはばかり、泣き伏す。亭主は七輪の煙にむせんだ振りをして眼をこする。三人の客は途方に暮れ、無言で眼ませして帰り仕度をはじめ、挨拶もそこそこに草履ぞうりをつつかけて門口に出て、それから小声で囁ささやき合い、三人の所持の金子きんす全部、一いちぶ歩きん金三十八、こまがね七十目ばかり取り集め、門口に捨てられてある小皿こざらの上に積みかさね、足音を忍ばせて立ち去つた。狭い露路から出て、三人一緒にほつと大きい溜息をついた途端に、

「ふざけた真似まねをするな！」と背後に利左の声、ぎよつとして振りむくと利左衛門は金子を載せた小皿を持ち息せき切つて、「人の家へやつて来て、お茶も飲まずに帰り、そのうえ、こんな犬の糞くそみたいなものを門口に捨てやがって、人間の付き合ひの法も知らねえ鼻つたれ小僧め。よくもよくも、月夜の利左をなめやがったな。もう二度とふたたびお前た

ちの鼻の下の長いつらを見たくねえ。これを持ってとつと帰れ！」と眼の色をかえて喚わめき、「馬鹿にするな！」と件の小皿くだんを地べたにたたきつけて、ふつと露路の夕ゆうやみ闇に姿を消した。

「いや、ひどいめに遭った。」と吉郎兵衛は冷汗をぬぐい、「それにしても、吉州も、きかない女になりやがった。」

「色しき即是空そくぜくうか。」と甚太夫はひやかした。

「ほんとうに、」吉郎兵衛は、少しも笑わず溜息をつき、「わしはもう、きようから遊びをやめるよ。卒そと堵ぼ婆こ小町まを眼前こまちにありありと見ました。」

「出家でもしたいところだね。」と六右衛門はひとりごとのように言い、「わしはもう殺されるのではないかと思った。おちぶれた昔の友達ほどおそろしいものはない。路みちで逢つても、こちらから言葉をかけるのは遠慮すべきものかも知れない。誰だい、一ばん先に言葉ことばをかけたのは。」

「わしではないよ。」と吉郎兵衛は口をとがらせて言い、「わしは、ただ、吉州にひとめ逢いたくて、それで。」と口ごもった。

「お前だよ。」と甚太夫は冷静な口調で、「お前が一ばんさきに走って行って、一ばんさ

きに声をかけて、おまけに、また、あいつの家へ連れて行ってくれなんて、つまらぬ事を言い出したのも、みんなお前じやないか。つつしむべきは好色の念だねえ。」

「面目ない。」と吉郎兵衛は、素直にあやまり、「以後はふつつり道楽をやめる。」

「改心のついでに、その足もとに散らばっているお金を拾い集めたらどうだ。」と六右衛門は、八つ当りの不機嫌で、「これだつて天下の宝だ。むかし青砥左衛門尉藤綱さまが、」

「滑川なめりがわを渡りし時、だろう。わかった、わかった。わしは土方人足どかたにんそくというところか。

さがしますよ、拾いますよ。」と吉郎兵衛は尻端折しりばしよりして薄暗闇の地べたを這はい一步金やらこまがねやらを拾い集めて、「こうして一つ一つにして拾ってみると、お金のありがたさがわかつて来るよ。お前たちも、少し手伝つてごらん。まじめな気持ちになりますよ。」

さすが放埒ほうちやうの三人も、昔の遊び友達の利左の浅間しい暮しを見ては、うんざりして遊興も何も味気ないものに思われ、いささか分別ありげな顔になって宿へ帰り、翌あくる日から殊勝らしく江戸の神社仏閣をめぐつて拝み、いよいよ明日は上方へ帰ろうという前夜、宿の者にたのんで少からぬ金子を谷中の利左の家へ持たせてやり、亭主は受け取るまいから、内儀にこつそり、とくどいくらいに念を押して言い含めてやったのだが、その使いの者は、

しばらくして気の毒そうな顔をして帰り、お言いつけの家をたずねましたが、昨日、田舎へ立ちのいたとやら、いろいろ近所の者にたずねて廻つても、どこへ行つたのかついに行先き突きとめる事が出来ませんでしたという口上で、三人はそれを聞いて利左の行末を思い、いまさらながら、ぞつとして、わが身の上も省かえりみられ、ああ、もう遊びはよそう、と何だかわけのわからぬ涙を流して誓約し、いよいよ寒さのつる木枯しに吹きまくられて、東海道を急ぎに急ぎ、おのおのわが家に帰りついてからは、人が変つたみたいにけち臭くよろずに油断のない男になり、ために色街は一時さびれたという、この章、遊興もほどほどに止とどむべしとの戒いましめ歟。

(置土産、卷二の二、人には棒振虫同前に思はれ)

吉野山

拜啓。その後は、ごぶさたを申して居ります。めでたく御男子御出生の由、大慶に存じます。いよいよ御家運 御隆昌の兆と、おうらやましく思います。御一家いきいきと御家業にはげみ、御夕食後の御団欒はまた格別の事でありましょう。このお正月は御男子御出生と二つお目出度が重り、京の初春もわがものと思召し、ひとしお御一家の笑声も華やかに、昔の遊び仲間も集り、都の極上の酒を酌交し、とかく楽しみは京の町人、それにつけても先年おろかな無分別を起して出家し、眼夢とやら名を変えて吉野の奥にわけ入った九平太は、いまどうしているかしらんと、さだめし一座の笑草になさった事でございましょうね。いや味を申し上げているのではありません。眼夢、かくの如く、いまはつくづく無分別の出家遁世を後悔いたし、冬の吉野の庵室に寒さに震えて坐つて居ります。思えば、私の遁世は、何の意味も無く、ただ親兄弟を泣かせ、そなた様をはじめ友人一同にも、無用の発心やめ給え、と繁く忠告致されましたが、とめられると尚更、意地になつて是が非でも出家遁世しなければならぬような気持ちになり、とめるな、とめる

な、浮世がいやになり申した、明日ありと思う心の 仇あだごとく 桜、など馬鹿ばかな事を喚わめいて 刺てい髪はげしてしましまして、それからすぐそつと鏡を覗のぞいてみたら、私には坊主頭ぼうずあたまが少しも似合わず、かねがね私の最も軽蔑けいべつしていた横丁の藪医者やぶいしやの珍齋ちんさいにそっくりで、しかも私の頭のあちこちに小さい禿はげがあるのを、その時はじめて発見つかまつし、うんざりして、実は既にその時から少し後悔していたのです。白状のしついでに私の出家遁世の動機をも、いまは包まず申し上げますが、私はあなた様たちのお仲間に入れてもらって一緒に茶屋などに遊びにまいりまして、ついに一度も、もてた事はなく、そのくせ遊びは好きで、あなた様たちの楽しそうな様子を見るにつけても、よし今夜こそはと店の金をごまかし血の出るような無理算段して、私のほうからあなた様たちをお誘い申し、そうしてやつぱり、私だけでもず、お勘定はいつも私が払い、その面おもしろ白くない事、或る夜あやぶれかぶれになつて、女に向い、「男は女にふられるくらいでなくちや駄目だめなものだ」と言つたら、その女は素直に首肯うんずき、「本当に、そのお心掛けが大事ですわね」と真面目まじめに感心したような口調で申しますので、立つ瀬が無く、「無礼者！」と大喝だいかつして女を力まかせに殴り、諸行無常を觀じ、出家にならねばならぬと覺悟を極きめた次第で、今日つらつら考えると私のような野暮で物欲しげで理窟りくつっぽい男は、若い茶屋女に好かれる筈はずはなく、親爺おやじのすすめ

る田舎女でも、おとなしくもらつて置けばよかつたとひとりで苦笑致して居ります。まことに山中のひとり暮しは、不自由とも何とも話にならぬもので、ごはんの煮たきは気持ちもまぎれて、まだ我慢も出来ませんが、下着の破れを大あぐら搔かいて繕かい、また井戸端いどばたにしゃがんでふんどしの洗濯せんたくなどは、御不浄の仕末以上にもの悲しく、殊勝らしくお経をあげてみても、このお経というものも、聞いている人がいないときっぱり張合かいの無いもので、すぐ馬鹿らしくなつて、ひとりで嘖うき出したりして、やめてしまいます。立ち上つて吉野山の冬景色を見渡しても、都の人たちが、花と見るまで雪ぞ降りけるだの、春に知られぬ花ぞ咲さけるだの、いい気持ちで歌つているのとは事違ちがひ、雪はやっぱり雪、ただ寒いばかりで、あの嘘うそつきの歌人めが、とむらむら腹が立つて来ます。このように寒くては、墨染の衣一枚ではとてもしのぎ難がたく、墨染の衣の上にとてらをひっかけ、犬の毛皮を首に巻き、坊主頭もひやひやしますので寝ても起きても頬ほ被かぶりして居ります。この犬の毛皮は、この山の下に住む里人から熊くまの皮だとだまされて、馬鹿高い値段で買かわされたのです。が、尻尾しつぽがへんに長くてその辺に白い毛もまじつていますので、これは、白と黒のぶちの犬の皮ではないか、と後で里人に申ましますと、その白いところは熊の月の輪わという部分で、熊に依よつては月の輪がお尻しりのほうについている、との返事で、あまりの事に私も何とも言

葉が出ませんでした。本当に、この山の下の里人は、たちが悪くて、何かと私をだましてばかり居ります。諸行無常を觀じて世を捨てた人には、金錢など不要のものと思いのほか、里人が持つて来る米、味噌みその値段の高い事、高いと言えば、むつと怒つたような顔をして、すぐに品物を持帰るような素振りを見せて、お出様が御不自由していらつしやるかと思つて一日ひまをつぶしてこんな山の中に重いものを持ち運んで来るだ、いやなら仕方が無い、とひとりごとのように言い、私も、この品が無ければ餓死するより他ほかは無いいし、山を降りて他の里人にたのんでも同じくらいの値段を言い出すのはわかり切つていますし、泣き泣きその高い米、味噌を引きとらなければなりません。山には木の実、草の実が一杯いあつて、それを気ままにとつて食べてのんきに暮すのが山居の楽しみと心得ていました、聞いて極樂、見て地獄とはこの事、この辺の山野にはいずれも歴とした持主がありまして、ことしの秋に私がうっかり松茸まつたけを二、三本取つて、山の番人からもう少しで殴り殺されるようなひどい目に遭いました。この方丈いおりの庵も、すぐ近くの栗林くりばやしの番小屋であつたのを、私が少からぬ家賃で借りて、庵の裏の五坪ばかりの畑だけが、まあ、わずかに私の自由になるくらいのもので、野菜も買うとなかなか高いので、大根人蔘にんじんの種を安くゆづつてもらつてこの裏の五坪の畑に播まき、まことに興覚めな話で恐縮ですが、

出家も尻端折りで肥柄杓を振りまわさなければならぬ事もあり、その収穫は冬に備えて、縁の下に大きい穴を掘って埋めて置かなければならず、目前に一目千本の樹海を見ながら、薪はやつぱり里人から買わないと、いやな顔をされるし、ここへ来てにわか浮世の辛酸を嘗め、何のための遁世やら、さつぱりわけがわからなくなりました。遁世してこのようにお金がかかるものとは思ひも寄らず、そんなにお金も持って来ませんでしたので、そろ懐中も心細くなり、何度下山を思い立ったかわかりません。けれども、一旦、濁世を捨てた法師が、またのこの濁世の親御の家へ帰って泣いておわびをするなどは古今に例の無い事のようにも思われますし、これでも、私にはまだ少し恥を知る気持も意地もあり、また、ここを立ちのくにしても、里人への諸支払いがだいぶたまって居りますし、いま借りて使っている夜具や炊事道具を返すに当ってもまた金銭のややこしい問題が起るのではなからうかと思えば、下山の決心もにぶります。と言えば、少していさいもいけれど、実はもう一つ、とても私がいますぐ下山できないつらい理由があるのです。京の私の家のことし八十八歳になるばさまが、大事のへそくりの百両を、二十年ほど前に小さい茶壺にいれて固く蓋をして、庭の植込みの奥深く、三本ならびの杉の木の下に昔から屋敷に伝っているささやかなお稲荷のお堂があつて、そのお堂の縁の下にお盆くらいの

大きさの平たい石があるのですが、その石の下にです、れいの茶壺を埋めて置いて、朝から日の暮れるまでに三度、夜寝る前に一度、日に都合四度ずつ竹の杖つえをついて庭を見廻みまわる振りをして、人知れず植込みの奥に眼めを光らせてはいつて行き、その隠し場所の安泰をたしかめ、私がまだ五つ六つの時分は、ばばさまにたいへん可愛かわいがられてもいましたし、また私をほんの子供と思つて気をゆるしていたのでございましょう、或る日、私を植込みの奥に連れて行き、その縁の下の石を指差して、あの下に百両あるぞ、ばばを大事にした者に半分、いやいや一割あげるぞ、と噎しわがれた声で言いました、私はそれ以来どうにもその石の下が気になつてたまらず、二十年後あなた様たちに遊びを教えられて、たちまち金に窮して悪心起り、とうとう一夜、月の光をたよりに石の下を掘り起し、首尾よく茶壺を見つけて、その中から三十両ばかり無断で拝借して、またもどのように茶壺を埋め、上に石を載せて置き、ばばさまに見つかると、ひやひやしてしばらくは御飯ものどにとおらず、天を拝し地に伏してひたすら無事を念じ、ばばさまはやっぱりお年のせいか、あのように眼を光らせても石の下まで見抜く事は出来なかつた様子で、毎日四度ずつ調べに行つても平気な顔で帰つて来るので、私も次第に大胆になり、その後も十両、二十両と盗み、やがて無常を觀じて出家する時には、残っている金をそっくり行きがけの駄賃だちんとして拝借して

旅立つたようなわけで、あのばばさまの生きていらつしやる限り、私はおそろしくて家へ帰る事が出来ないのです。ばばさまは、まだきつとあの茶壺のからつぽな事にはお氣附きづきなさらず、相変らず日に四度ずつ見廻りに行っている事でありましょうが、お氣附きづきなさならぬままで頓死とんしでもなさつたならば、ばばさまも仕合せ、また私の罪も永遠にうやむやになつて、大手を振つて家へ帰れるというわけになるのです。けれども、ばばさまのあのお元氣では、きつと百まで生きるでしょうし、頓死など待つているうちに、孫の私のほうが山中の寒さに凍こえ死しにするような事になるかも知れません。思えば思うほど、心細くなります。昔の遊び友達、あるいは朝湯で知合つた人、または質屋の手代てだい、出入りの大工、駕籠ごかきの九郎助にまで、とにかく名前を思い出し次第、知つている人全部に、吉野山の桜花の見事さを書き送り、おしなべて花の盛りになりにけり山の端毎はしごにかかる白雲、などと古人の歌を誰だれの歌とも言わず、ちよつと私の歌みたいに無雑作らしく書き流し、遊びに来て下さい、と必ず書き添えて、またも古人の歌「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」と思わせぶりに書き結び、日に二通も三通も里人に頼んで都に送り、わがまことの心境は「吉野山やがて出でんと思ふ身を花散る頃はお迎へたのむ」というような馬鹿げたものにて、みずから省みて苦笑の他なく、けれども、かかるせつなき真赤な

嘘もまた出家の我慢にんにく辱と心得、吉野山のどかに住み易やすげに四方八方へ書き送り、さて、待てども待てども人ひとり訪ねて来るどころか、返事さえ無く、あの駕籠かきの九郎助など、かねがね私があればとたくさん酒手をやり、どこへ行くにも私のお供で、若旦那わかだんなが死ねばおらも死にますなどと言っていたくせに、私があればといていな手紙を書き送ってやったのに一片の返事も寄こさぬとは、ひどいじゃありませんか。九郎助に限らず、以前あんなに私を気前がいいの、正直だの、たのもしいだのと褒ほめていた遊び仲間たちも、どうした事でしょう、私が出家したら、ぱったり何もお便りを下さらず、もう私が何もあの人たちのお役に立たない身の上になったから、それでくるりと背を向けたというわけなのでしようか、それにしても、あまり露骨でむごいじゃありませんか。こんなに皆から爪つまはじきされるとは心外です。私はいったいどんな悪い事をしたのでしょうか。ばばさまのへそくりを拝借したとしても、それは一家の内の事で、また、地中に埋もれた財宝を、掘り出して世に活用せしめたのは考え様に依よつては立派な行為とも言えると思うのです。しかも、諸行無常を觀じ出家遁世するのは、上品な事で、昔の偉い人はたいていこれをやっているのです。それくらいのは、皆さまにもわかりそうなものです。それなのに、私を軽蔑して仲間はずれにしようとなさる。それは、あんまりですよ。私は決して下品な男では

ないんです。これから大いに勉強もしようと思つて居るのです。出家というものは、高貴なものです。馬鹿になさらず、どうかどうかお見捨てなく、いつまでもお付き合いを願います。たまにはお手紙も下さいよ。あんなに皆に遊びに来いと書き送つてやったのだから、誰かひとり、ひよつとしたらお見えになるかも知れぬ、と毎日毎日むなしく待ちこがれ、落葉が風に吹かれて地を這う音を、都の人の足音かと飛立つて外に駈け出し、蕭条たる冬木立を眺めて溜息をつき、夜は早く寝て風が雨戸をゆり動かすのを、もしや家から親御さまのお迎えかなど、らちも無い空頼みしていそいで雨戸をあけると寒月皎々と中空に懸り、わが身ひとつはもとの身にして、南無阿弥陀と心底からの御念仏を申し、掛蒲団を裏返しにして掛けて寝ると恋しい女の面影を夢に見ると言伝えられているようですから、こんな淋しい夜にこそ、と思うのですが、さて、私にはこれぞと定つた恋人も無く、誰でもいいとはいふものの、さあ、誰の面影が出るか、など考えて、実に馬鹿らしくなり、深夜暗闇の中でひとりくすくす笑つてしまいました。ばばさまの面影などが出ては、たまりません。こんな味気ない夜には、お酒でもあると助かるのですが、この辺の地酒は、へんにすつぱくて胸にもたれ、その上、たいへん高価なので、いまいまして、十日にいちど五合くらい買つて我慢しています。この山里の人は、何かと慾が深く、この下

の溪流には鮎あゆがうようよいて、私は出家の身ながら、なまぐさを時たま食べないと骨ばな
 れして五体がだるくてたまらなくなりそうです、とつて食おうと思ひ、さまさま工夫して
 みましたが、鮎あゆもやはり生しょう類るい、なかなかすばしこく、不器用な私にはとても捕獲出来
 ず、そのような私のむだな努力の姿を里人に見つけられ、里人は私のなまぐさ坊主たる事
 を看破致し、それにつけ込んで、にやにや笑いながら鮎あゆの串くし焼やきなど持って来て、おどろ
 くほど高いお金を請求いたします。私は、もうこの里人から、すっかり馬鹿にされて、
 どしどしお金を捲まき上げられ、犬の毛皮を熊の毛皮だと言つて買わされたり、また先日は、
 すりばちをさかさにして持つて来て、これは富士山の置き物で、御出家の床の間にふさわ
 しい、安くします、と言ひ、あまりに人をなめた仕打ち故ゆえ、私はくやし涙にむせかえりま
 した。それにつけても、お金が欲しく、そろそろ富とみ籤くじの当り番がわかつた頃ころだと思ひま
 すが、私のは、たしか、イの六百八十九番だつた筈はずです。当っているでしょうか。あの富
 籤を、京の家の私の寝間、床柱の根もとの節穴に隠して置きましたが、お願いですから、
 親爺に用あげな顔をして私の家へ行き、寝間に忍び込んで床柱の根もとの節穴に指を突
 き込み、富籤を捜し出して、当っているかどうか、調べてみて下さい。当っているといひ
 んですけれどもね。たぶん当っていないかと思ひますが、でも、とにかく、念のために調

べて見て下さいまし。お願いついでに、橋向うの質屋へ行つて、私がたしか一両であずけて置いた二寸ばかりの小さな観音像を受け出して下さいませんか。他の品は、みな流してもいいのです。あの観音像だけは、是非とも受け出して下さい。あれは、ばばさまからおまもりとして幼少の頃もらつたもので、珊瑚さんごに彫つたものですから、一両では安すぎるのです。受け出して、道具屋の佐兵衛に二十両で売つて下さい。佐兵衛は、あれを二十両でいつでも引取ると言つていたのです。ついでに私の寝間の、西北の隅すみの畳の下に色紙一枚かくしてありますから、あれも佐兵衛のところへ持つて行つてみて下さい。あの色紙は、茶屋の枕まくら屏風びょうぶに張つてあつたものですが、私はもてない腹いせに、ひつぱがして家へ持つて帰つたのです。雪舟せつしゅうではないかと思つていますが、或いは贗物あつものかも知れません。とにかく佐兵衛に見せて、そこはあなた様も抜け目なく、相応の値段で売りつけてやつて下さい。贗物であつても、出来は悪くない色紙のようですから、五十両と吹かけてみて下さい。売れましたら、観音像の代金と一緒に、お手数でも、こちらへすぐにお送り願います。このたびは、あなた様にもいろいろ御手数をかけるわけですが、御礼として縞しまの羽織を差上げたいと思います。それはいま九郎助が持つて居るのです。ちよつと粋いきな縞で、裏の絹もずいぶん上等のものです。九郎助は駕籠かきのくせに、おしやれな男で、

あの羽織をむやみに着たがりますので、私は一時借してやってそのままになっているので。決してくれてやったのではありませんから、どうか九郎助から取り上げてあなた様がお召しになって下さい。あんな恩知らずの九郎助には、もつともつとこらしめを見せてやりたいと思います。かまいませんから、あれを九郎助から取上げてやって下さい。あなた様は色が白いから、きつとあの羽織はお似合いの事と思います。私は色が黒いのであの羽織は少しも似合いませんでした。墨染の衣だけでも似合うかと思いの他、私は肩幅が広いので弁慶のような荒法師の姿で、狼おわかみに衣の例に漏れず、何もかも面白くなく、既に出家しているながら、更にまた出家遁世したくなつて何が何やらわからず、ただもう死ぬるばかり退屈で、

歎なげきわび世をそむくべき方知らず、吉野の奥も住み憂うしと言へり

という歌の心、お察しねがいたく、実はこれとて私の作った歌ではなく、人の物もわが物もこの頃は差別がつかず、出家遁世して以来、ひどく私はすれました。このたびのまことに無分別の遁世、何卒なにとぞあわれと思召し、富籤と観音像と、それから色紙の事お忘れなく、昔の遊び仲間の方々にもよろしくお伝え下され、陽春の頃には、いちど皆様そろつて吉野へ御来駕ごらいがのほど、ひたすら御待ち申し上げます。頓首とんしゅ。

(よろづの文反古、卷五の四、桜の吉野山難儀の冬)

青空文庫情報

底本：「お伽草紙」新潮文庫、新潮社

1972（昭和47）年3月21日発行

1991（平成3）年2月20日40刷改版

1999（平成11）年3月10日56刷

入力：a k i

校正：久保あきら

2000年4月24日公開

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新釈諸国噺

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>